



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	津軽の民俗芸能「荒馬」に関する研究 : Hobby Horse Dance
Author(s)	沼倉, 学
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16690号
Issue Date	2025-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16690
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98664
Type	doctoral thesis
File Information	NUMAKURA_Manabu.pdf, 全文



津軽の民俗芸能「荒馬」に関する研究

－Hobby Horse Dance－

北海道大学後期博士課程

08165015 沼倉 学

目次

序章	4
第一節 研究動機・目的	4
第二節 先行研究について	8
第三節 研究方法と論文構成	17
第一部 津軽の荒馬についての歴史的民俗学的考察	20
第一章 江戸期の日記・紀行文にみる荒馬の起源について	20
第一節 本章の目的と研究方法	20
第二節 藩政時代の日記・紀行文に見られる風流行列の形態について	23
第三節 虫送り、ボウノカミ送りの変化と荒馬の登場	33
第四節 小括	34
第二章 津軽の荒馬の比較研究	36
第一節 本章の目的と研究方法	36
第二節 荒馬の分布と圏域	37
第三節 フィールドワーク調査について	38
第四節 圏域毎の荒馬の比較検討	39
第五節 荒馬の様式	46
第六節 小括	48
【資料】 フィールドワーク調査結果	49
第二部 Hobby Horse Dance としての荒馬	74
第三章 前近代のスポーツ概念にみる <i>Hobby Horse Dance</i>	74
第一節 第1節 本章の目的と研究方法	74
第二節 スポーツの概念規定とその様相	77
第三節 「さかさまの世界」におけるホビーホースダンスの意味	84
第四節 小括	88
第四章 荒馬に見る日本馬と人の共生関係	89
第一節 本章の目的と研究方法	89
第二節 日本における馬の移入と東北への牧の拡大	90
第三節 日本における馬生産の特徴—野馬と荒馬	94

第四節 馬と人との関係と荒馬の流儀への影響.....	102
第五節 小括 ―津軽の荒馬とは何か―.....	105
補論 <i>Hobby Horse Dance</i> としての荒馬の教材化の試み.....	108
第一節 本論の目的と方法.....	108
第二節 先行研究の検討.....	108
第三節 教育内容.....	113
第四節 指導のポイント.....	116
第五節 授業単元計画.....	118
結章.....	129
第一節 本論文のまとめと成果.....	129
第二節 今後の課題と展望.....	131
文献一覧.....	132

序章

第一節 研究動機・目的

本研究は、津軽の民俗芸能「荒馬」について歴史的民俗学的考察を行い、「荒馬とは何か」という本質的問いを明らかにすることを目的とする。そもそも「荒馬」の本質とは何かという問いには幅がある。民俗芸能とは何かについて論じる場合も、それ自体が種々の要素の混雑する複合的事象、総合芸術であり、これを民俗学、芸能史、音楽史、国文学、宗教史、地方史、文化史といった関連諸領域と関連させる何か、年中行事、民間信仰、口承文芸として多角的にとり扱われるものの総体として扱う場合もある¹。また、以下に示すように多くの場合、由緒や系譜に触れることを通して、「荒馬」とは何かということに言及がなされてきた。

荒馬（あらま・あらうま）は青森県津軽地方²を代表する民俗芸能のひとつで³、『民俗芸能辞典』によれば、荒馬は青森県、秋田県、岩手県に伝わる「駒踊」⁴の一種として、その基本的芸能を「木製の馬の首の作り物と尻毛尾のついた楕円形の竹の枠型の作り駒を腰にくくりつけ、あたかも人が馬に乗っているように身づくろいをして踊る、いわゆるホニホロ式⁵の騎乗擬態の風流踊」⁶と説明されている。このような風流踊としての荒馬は、津軽地方に広く分布し、その地域に伝わる年中行事や祭りの中で伝承されてきたが、地域によってその基盤となる年中行事や祭り、そこで踊られる踊りの様式が異なる。年中行事にはボウノカミ

¹ 渡辺伸夫「Ⅲ 民俗学研究の諸分野・12 民俗芸能」『民俗研究ハンドブック』吉川弘文館、東京、1978年、194頁。

² 「津軽地方」は、広義には現在の青森県西部を指す呼称で、江戸時代に津軽氏が支配した弘前藩と黒石藩の領域にほぼ相当する。現在の行政区域としては、青森市を中心とした北東部の「東青地区」、弘前市を中心とした南部の「中弘南黒地区」、五所川原市を中心とした北西部の「西北五地区」の3地区に分かれ、狭義には「中弘南黒地区」と「西北五地区」を指して「津軽地方」と言う場合もある。歴史的にはそういった区分が同じだったわけではなく、境界も明確ではない時代もあったので、歴史的な意味合いを含んだ地域名を指す場合は「津軽」を用いる。

³ 青森県教育庁文化課が編集した『青森県の民俗芸能』では、津軽地方を代表する民俗芸能として「三匹獅子舞」「津軽神楽」「荒馬・太刀振り」を挙げている。（青森県教育庁文化課編『青森県の民俗芸能』青森県教育委員会、青森、1986年、3頁。）

⁴ 駒踊は荒馬と同様に作り駒を付けて踊る芸能で、青森県南部地方、岩手県北部、秋田県北部に散在し、一部は移住民によって北海道にも伝えられている。（仲井幸二郎・西角井正広・三隅治雄編『民俗芸能辞典』東京堂出版、東京、1981年、187-188頁。）

⁵ 作り駒を腰に付けて踊ったり走ったりする芸は江戸期から見られ、「ホニホロ」と呼ばれていた。宮武外骨によれば、「ほにほろは寛政の頃初めて流行」し、「ほにほろという語は和蘭陀語らしい」ことから、「此腰付馬も和蘭陀より渡来したもの」ではないかと推察している。（宮武外骨「ほにほろ考」『此花第四枝』雅俗文庫、東京、1910年、5頁。）。
⁶ 仲井ら、前掲書、187-188頁。

送り、虫送り、ねぶた祭り、の三つがあり、そこで見られる荒馬の様式には大きく馬が単体で踊るものと、「手綱取り（たづなとり）・手綱引き（たづなひき）・口取り（くちとり）」と呼ばれる馬牽き役と馬と一緒に踊るものの二つの芸態がある。その馬牽き役も地域によって人数や性別に違いが見られる（以下、地元の個別の呼称ではなく、馬牽き役を示す場合は統一して「手綱取り」と表記する）。

また、荒馬の由来について述べる資料の中には、「騎馬」や「農耕馬」を表象するものであったという例も散見される⁷。「騎馬隊」は武士にとって戦場における最強の「武装団」であり、地位や権威を示すステイタスシンボルでもあった⁸。「農耕馬」としての馬は、東北地方では明治期に入るまでは代掻きや駄載運搬と行った軽度なものに留められ、本格的な馬耕は明治以降に行われるようになったが⁹、特に東北地方には多くの馬産地があり、17世紀後半には農馬の所持と利用が広がって、「人馬」の距離が近づいたとされている¹⁰。

これに対し、荒馬と同様に作り駒を付けて踊る駒踊は「騎馬」をモチーフとした踊りだと言える。駒踊にはいくつかの荒馬に見られるような手綱取り・口取りと呼ばれる馬曳き役は付かず、馬が単体で踊る様式である。つまり、基本的な芸態が馬に騎乗した姿を表現している。また、青森県東部と岩手県北部に広がる南部地方は、かつては糠部（ぬかのぶ）と呼ばれ、古代から中世・近世まで全国有数の馬産地であった。この一帯に伝承されている駒踊は「南部駒踊」と呼ばれ、青森県や岩手県の民俗資料には「馬産地に生まれた芸能であり、秋の牧場での野馬捕りのさまを模した」¹¹「野馬取りの行事を模して始められたもの」¹²と解説されている。野馬捕りとは、軍馬育成のために牧で年に1度行われた行事で、自由放牧で育ててきた馬の中から2、3歳の若駒を捕らえて、それから軍馬になるための調教が行われた。つまり軍馬を育成するプロセスがモチーフになっているわけである（野馬捕りについては第4章で詳しく考察する）。岩手県九戸郡に伝わる「おおの駒踊り」には、「文化・文政の頃に江戸から馬頭のついた竹馬の玩具が持ち込まれ、それを使った遊びが、集団化された」¹³という由緒譚もある。秋田県北部地方の駒踊りは「駒形に武将がまたがるようにして仮装

⁷ 金木郷土史編纂委員会『金木郷土史』金木町役場、青森、1976年、672-675頁；今別町役場企画財政課「荒馬とは」『青森県今別町青森県無形文化財荒馬』<https://www.imabetsu-arama.com/about.html>（最終閲覧 2025.10.7）。

⁸ 兼平賢治『馬と人の江戸時代』歴史文化ライブラリー、東京、2015年、19頁。

⁹ 大瀧真俊『軍馬と農民』京都大学学術出版会、京都、2013年、13頁。

¹⁰ 兼平、前掲書、98-104頁。

¹¹ 門屋光昭「第七章 民俗芸能」青森県史編さん民俗部会『青森県史 民俗編 資料 南部』青森県、2001年、391頁。

¹² 岩手県教育委員会「おおの駒踊り」『岩手県の民俗芸能－岩手県民俗芸能緊急調査報告書』岩手県教育委員会、盛岡、1997年、180頁。[集成版：『北海道・東北地方の民俗芸能 1 北海道・青森・岩手』海路書院、東京、2005年、574頁。]

¹³ 同上、180頁。

した姿で、馬の手綱を取り、自ら跳んだり跳ねたりして踊るもの」¹⁴と言われ、その作り駒に入る人の衣装が甲冑姿をしていることから「騎馬」であることがわかる。民俗芸能事典では、荒馬は「駒踊の一種」と解説されていたが、この「農耕馬」を表象している点は駒踊と大きく違う点である。

しかし、「騎馬と人」、「農耕馬と人」のいずれの場合であるにせよ、そこには馬と人との間に何らかの関係性が存在したことは疑いない。にもかかわらず、荒馬として踊り継がれてきたことの意味を「馬と人との関係性の表象」という観点から探究したものはほとんどみられず、初めに述べた通り、由緒と系譜への言及にとどまっている。このことは由緒や系譜を本研究が軽視することを意味するものではないが、馬と人との関係性への着眼を通して、「荒馬の本質」が補完されることに本研究の意義があることを述べておきたい。

同時に本研究では、津軽の荒馬を世界的視野から捉え直す。津軽の荒馬には上記に述べた地域独自の固有性も伴うが、世界的には「Hobby Horse Dance（ホビーホースダンス）」の一形態に過ぎず、荒馬のように動物を真似た装束、所作、踊り、馬を模倣する木馬を道具立てとする文化は津軽のみに限定されるものではなく、ユーラシア、ヨーロッパ一円に共通する文化として存在している¹⁵。インドネシア・ジャワ島に伝わる Kuda Lumping（クダ・ルンピング）¹⁶やイランのホラーサーン（Horasan）地方に伝わる Wooden Horse Ceremonial Dance（木馬による儀式的舞踊）¹⁷などがその代表的な例である。また、ヨーロッパのバスク地方に伝わる Zamalzain（ザマルザイン・半人半馬）¹⁸やポーランドの Lajkonik（ライコニク・クラクフの木馬）¹⁹など、ヨーロッパ各地にも同様のホビーホースダンスが伝わっているが、特にイギリスに伝わるそれは数や種類も多く、学

¹⁴ 秋田県教育委員会『秋田県の民俗芸能－秋田県文化財調査報告書二二七号－』秋田県文化財保護協会、秋田、1993年、102頁。

¹⁵ Union Internationale de la Marionette. “Skirted Hobby Horse”. <https://wepa.unima.org/en/skirted-hobby-horse/>（最終閲覧 2025.8.27）。

¹⁶ Mifta Rahmawati, Maimun Maimun, Hasbi Ali. “Community Perception of Kuda Lumping Art in The Simpang Kiri Sub-District Subussalam City.” *Jurnal Seni Tari* 12(2) (2023).

¹⁷ Simin Shakeri, Mohammad Reza Sharif Zadeh. “Khorasan’ s Wooden Horse Ceremonial Dance Analysis and Investigation.” The Second International Interdisciplinary Conference “Russia and the East: Art, Philosophy and Culture,” Moscow, Russia, 2019.

¹⁸ Musée Basque et de l’histoire de Bayonne, “La danse”, Document enseignant.

¹⁹ Karolina Janeczko, “Wokół sporu o genezę i tradycję Lajkonika -Around the Dispute about the Origin and Tradition of Lajkonik-”. *Rocznik Filozoficzny Ignatianum The Ignatianum Philosophical Yearbook*, Vol.26, No.2 (2020), pp.263–282.

術研究も盛んに行われている²⁰。イギリスの五月祭に伝統的な「モリスダンスにつきもの
のホビーホース」と言われるように、人々がホビーホースを装着し、馬と一体となって踊
っていたことは J. Strutt ストラットのような 19 世紀を代表する尚古学者による『*The
Sports and Pastimes of the People of England* (イギリス国民のスポーツと娯楽)』に書き
綴られ、加えて、人間と動物との共生にかかわる象徴的な脈絡を通じて言及されている²¹。
実際、荒馬と駒踊について記した日本の民俗学論考の中に、ヨーロッパに伝わるホビ
ーホースダンスと青森の荒馬・駒踊との関連に触れたものがある。バスク地方のホビーホ
ースの由来が古代ギリシャやオリエント文明にまで遡るとして、その文化が大陸半島を通
り、京都・鎌倉を経て青森に伝わったという説が有ることを小池雅明が紹介している²²。
この説の真偽はともかく、世界的な視野から荒馬を捉えようという視点を持っていたこと
は先見性があり、本研究の着想にも多く影響を与えている。しかし、国内外を問わず、津
軽の荒馬を世界に伝わるホビーホースダンスの一つと捉えて位置づけて考察するものは管
見する限りこの論考以外は皆無であった。

以上のように、荒馬は踊り継がれてきた舞踊であるため、文献史料としての蒐集の困難さ
を伴い、研究史上における空白や世界史的観点は欠如していた。それにもかかわらず、荒馬
の保健体育教材としての価値は高く、津軽地方といった地域における学校教育現場におけ
る文化教材としての活用にとどまるものではなかった。荒馬は民族歌舞団わらび座²³が舞台
用に再構成した荒馬が教材として学校教育の中に広められた。しかし、歌舞団によって舞台
化の理論で踊りを再構成したものであったため、その歴史的民俗学的意義を含む身体技法
の読み解きはなされておらず、動きの質や構成は地元の踊りとは異なる形で広まり、その後、
熱心な体育教師や研究者が地元今別への取材を重ね、地元の保存会との交流を通じて、「今
別荒馬」の動きを教材化する実践を通じて、再構成されるに至る。筆者はその一員として、
この再構築の過程にも関わった²⁴。

それゆえ、本稿が目的とする荒馬が表象する馬と人の関係性から捉える「荒馬とは何か」
という本質的な問いは、単なる民俗学的歴史学的貢献を為すだけでなく、保健体育科の舞踊

²⁰ E.C. Cawte, *Ritual Animal Disguise*, London: DS Brewer for the Folklore Society, 1978.; Violet Alford, *The Hobby Horse and other Animal Masks*, London: THE MERLIN PRESS, 1978.

²¹ Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England* (London: J. White, 1801; reprint, London: Thomas Tegg, 1845), Project Gutenberg e-book,

²² 小池雅昭「郷土の芸能－荒馬踊りと駒踊り」『こまおどり創刊号』弘前大学民俗研究部、1961 年、8-9 頁。

²³ 民族歌舞団わらび座は民族伝統をベースに多彩な表現で現代の心を描く劇団で、1951 年に創立し、1953 年から秋田県仙北市に活動の拠点を置いて、舞台公演を中心に多角的な事業を行っている。
<https://www.warabi.jp/pages/info/> (最終閲覧 2025 年 1 月 24 日)。

²⁴ 沼倉学「民俗芸能『荒馬』の教材化について」宮城教育大学大学院教育学研究科修士論文、2001 年。

教材として、全国的に活用されてきた荒馬流儀の文化的奥行きの検証を行うことに等しい。特に、学校の中で踊られてきた荒馬は、単に所作や音、リズム、民俗芸能の由緒、系譜の伝授にとどまるのではなく、荒馬を通じて子どもたちに何を教えるのか、子どもたちが何を学習するのかということに動物と人間との共生関係の歴史から新たな視点を補完する重要な意義を放つことになるだろう。また舞踊は、踊るという主体的行為を通じて、経験値の付与が伴うことから、この文化的奥行きを実感し、地元のこどもたちの場合であっても、留学生であっても、教材の中身に応じたアイデンティティの構築にもつながる。しかも、以上の目的を遂行する上で、先行研究が提示してきた藩政時代の日記、紀行文等の文献研究の再調査、青森県史誌編纂事業に関わる民俗調査、世界の中のホビーホースダンスとの比較検討を踏まえる必要がある。以下に、先行研究の成果とその限界に関する概略を示す。

第二節 先行研究について

これまでの荒馬研究の多くは、主として民俗学的な研究調査や青森県史誌編纂事業に関わる民俗調査に関わって行われ、報告書としてまとめられてきた²⁵。これらの調査報告には、その時期に行われていた年中行事や祭りの内容、芸能の形態、起源・由緒、その他の言い伝えなどが記録されている。それらの調査研究によって津軽地方の広い地域に分布・伝承されている荒馬の個々の様相が明らかにされてきた。

『津軽の民俗』では、進藤幸彦が津軽地方に伝わるいくつかの荒馬を取り上げ、類型化を試みている²⁶。これが津軽の荒馬を学術的総合的に考察した最初のものに当たる。進藤は、荒馬の踊りの形・動作から「たんに暴れ馬の模倣で型も自由に跳ねまわる（俵元）」「それぞれ木製の馬頭をかかえた6人が手綱でたがいにつながれて踊る（小泊）」「南部藩の駒踊と類似し、馬体を表す模型を身につけて多数が円陣を組んで踊る（五所川原市藻川）」「男女組になり、女は花笠をつけ扇をかざし、男は駒踊の扮装で連れあって踊る（今別）」「1人が馬頭模型をかかえこんで踊り、2人が両側で手綱を取って踊る（相内、中里、金木、小曲、長富）」

²⁵ これまでに行われた主な民俗調査を挙げると、1966年、東京教育大学民俗学研究室が行った民俗総合調査（報告書：和歌森太郎編『津軽の民俗』吉川弘文館、1970年。）、1986年に青森県教育委員会が行った民俗芸能基礎調査（報告書：青森県教育庁文化課『青森県の民俗芸能』青森県教育委員会、1986年。）、1994年に青森県教育委員会が行った青森県民俗芸能緊急調査（報告書：青森県教育委員会『青森県民俗芸能緊急調査報告書』青森県、2006年。）、2004年から青森県史編さん事業民俗部会が行った研究調査（報告書資料編：青森県史編さん事業民俗部会『青森県史 資料 津軽』青森県史友の会、2014年。）、2014年に文化庁文化財部伝統文化課が行った青森県津軽地方の虫送り調査（報告書：文化庁『青森県地方の虫送り』文化庁、2015年。）などがあった。

²⁶ 進藤幸彦「津軽の民俗舞踊」『津軽の民俗』、東京、吉川弘文館、1970年、395-415頁。

の五つに類型化している²⁷。進藤の類型化は、津軽地方に広く伝わる荒馬の全体を俯瞰して捉え、各地域に伝わる踊りの様式に着目して類型化を図った点で示唆的である。

荒馬が古代オリエントに起源があるという説を紹介した小池は「郷土の芸能－荒馬踊りと駒踊り－」の中で、青森県津軽地方と南部地方だけでなく北海道道南地方にも荒馬と駒踊りあることを伝え、いくつかの踊りの比較検討をしたり、馬を育てていた牧との関連にも触れたりして、幅広い考察を行っている²⁸。

『青森県史 資料 津軽』では「第七章 民俗芸能 第四節 荒馬・太刀振り」の節で荒馬について解説されている。津軽における荒馬と太刀振りの伝承地域名を挙げ、今別町に伝わる「今別の荒馬」を具体例として詳述している²⁹。これらの民俗調査結果にはそれぞれの地域における年中行事と荒馬の関係やその起源・由緒などが詳述されている。しかしながら、それらを俯瞰し総合的な考察を行った研究は管見する限り見当たらない。

またこれらの調査において記された荒馬の起源・由緒は、その多くが踊り継がれてきたことに基づく口承伝承で、歴史学的な観点から見ると年代や伝播のルートを特定する上での実証的な史料としては乏しい。そして、このような民俗調査による資料以外の荒馬に関する史料も、そもそも「踊り継がれてきた」ものであるため、ほとんど残されていないのが現状である³⁰。唯一、江戸期の日記や紀行文には、当時の年中行事や祭りの様子についての叙述が伴い、荒馬について言及しているものも存在する。具体的には津軽の藩政時代の様子を記録した『永禄日記』（1791年頃成立）³¹、『平山日記』（1803年頃成立）³²、菅江真澄が青森の習俗を記録した「牧の朝露」（1793年頃成立）³³、「外浜奇勝」（1796年頃成立）³⁴、江戸後期の津軽の風土や暮らしを記録した『山一 金木屋又三郎日記』（1862年頃成立）³⁵であ

²⁷ 進藤、前掲書、409-410頁。

²⁸ 小池、前掲書、2-9頁。

²⁹ 大石泰夫「第七章 民俗芸能」青森県史編さん事業民俗部会『青森県史 資料 津軽』青森県史友の会、2014年、345-365頁。

³⁰ 津軽地方を特徴づける民俗芸能として挙げられている「三匹獅子踊」「津軽神楽」「荒馬・太刀振り」のうち、津軽神楽は津軽藩の宗教政策として直接関与したため、起源等に関わる史料が残されている。「三匹獅子踊」は藩政時代の津軽藩の新田開発との関わりから起源や伝承を伝える巻物を複数の団体が持っている。それに対し、荒馬や太刀振りを伝承している地域にはそのような巻物もなく、藩の公式の記録にも残されていないため、史料が少ない（同上、345-365頁。）

³¹ 山崎立朴編『永禄日記』1791年頃成立。〔復刻版：青森県文化財保護協会『永禄日記 みちのく双書第一集』国書刊行会、1956年。〕

³² 平山半左衛門編『平山日記』1803年頃成立。〔復刻版：青森県文化財保護協会『平山日記 みちのく双書第二十二集』1967年。〕

³³ 菅江真澄「牧の朝露」1793年頃成立。〔復刻版：内藤武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第二巻』未来社、1971年、349-385頁。〕

³⁴ 菅江真澄「外浜奇勝」1796年頃成立。〔復刻版：同全集第三巻、1972年、123-191頁。〕

³⁵ 武田正三郎敬之『山一 金木屋又三郎日記』1862年頃成立。〔復刻版：齋藤昭一編『山一 金木屋又三郎日記抜粋編』青研、1995年。〕

る。これらの日記や紀行文は、いつ、どこに荒馬が登場するのかを伝えており、荒馬の起源についての手がかりとなる。

次にこれまでなされてきた先行研究を観点別に整理しておきたい。

荒馬と年中行事との関連について

各地域の荒馬と年中行事との関係については、先に述べた通り、民俗調査報告書や青森県史、各市町村史誌に記されている。例えば、『青森県の民俗芸能』には、荒馬について「年中行事の虫送り行列に従った荒馬や太刀振りが、近年独自の芸能として行われ」³⁶たとある。

今別町史には「この踊りは田植えが終わり、田の神が天に昇るとき、農民が神に加護と感謝のため催される、神送り、サナブリの行事である」³⁷と記されている。

進藤は荒馬が虫送り行列だけでなく「ボンの神（ボウノカミ）」や「鹿島流し」などの他の行事においても共通して踊られていたことから、「虫送りに固有の舞踊というより、サナブリの送り行列に伴ったものと考えべき」³⁸としている。田植えが一段落した後のサナブリ行事として、虫送りをする地域とボウノカミ送りをする地域があり、それらが習合している場合も多く存在した。

小池は、荒馬と虫送りとの関連について「西津軽郡と北津軽郡の一部」と「南津軽郡」では様式が異なることを指摘し、「津軽地方の虫送りと荒馬踊りの関係は元来別個の派生源をもつものであって、虫送りに荒馬踊りが加わったというのは、西、北津軽郡の場合あてはまるが虫送りから荒馬踊りが派生したという南津軽郡の場合一度合体したものが分離したか、又全然合体せず荒馬踊りが独立したまま宗教的儀式から現在の様な芸能に派生したことも考えられる」³⁹としている。つまり、虫送りに見られる荒馬は後から加わったということになり、南津軽郡の荒馬については、荒馬が元々あったのか後から加わったのかは不明ということである⁴⁰。

戦前の年中行事の様子について

いくつかの民俗史料に戦前の年中行事のことが記されているものがあり、その史料からはやや古い時代の行事や荒馬の様子について知ることができる。佐藤末吉の「昔の農村」は、南津軽郡田舎館村の農村の様子を記した史料で、明治 20 年代頃の百姓の仕事や若者の生活

³⁶ 青森県教育庁文化課編、前掲書、3 頁。

³⁷ 今別町『今別町史』今別町、1967 年、501 頁。

³⁸ 進藤、前掲書、409 頁。

³⁹ 小池、前掲書、6-7 頁。

⁴⁰ 同上、6-7 頁。

について描かれている。田植えが終わった後のサナブリ休みにボウノカミ送りをやったこと、18歳から20歳の男性が荒馬を踊ったこと、風流行列の順番などが記されている⁴¹。

内田邦彦の『津軽口碑集』には、昭和初期の北津軽地方の生活や年中行事の様子が記されている。5月のサナブリに虫送りが行われ、荒馬は男性3人のうち1人が鈴を背負って馬となり、左右に1人ずつ手綱をとるとあり、現在の北津軽の荒馬とほぼ同じスタイルであったことがわかる⁴²。

齋藤吉彦の『上磯風聞志』には、昭和5年に今別村を訪れて見たネブタ祭りの様子が図入りで描かれている。「弘前ノネブタと最も相違する点は、図の如き若者二人対を為して相並んでネブタの前でオドル事である」⁴³として、荒馬の扮装を図示している。それを見ると荒馬の扮装は現在のものとほぼ同じであった。

荒馬の担い手の変容と、全国に広がった「民族舞踊」⁴⁴としての荒馬

大石は今別の荒馬の担い手の変容が来ていること記している。戦前は地域の青年団が祭りを取りしきっていた。戦後も青年団がその任を担っていたが、1980年代頃から青年団員が減少し、子ども会や町内会などの組織が一緒になって祭りの運営を担っていた。しかし子どもの数も減少し、町内の人たちだけでは運営が困難な状況になっていったが、町外や県外からの人々を受け入れ芸能を演じてもらうことで、祭りを維持している。このことについて、大石は「荒馬という民俗芸能がたどってきた特殊事情によるところが大きい」として、その事情も詳述している⁴⁵。

荒馬は民俗学や文化行政が対象とする民俗芸能としてではなく、1960年代頃から別の存在として全国的に有名になった。1962年に「民族歌舞団わらび座」が今別を訪れ、荒馬を土地の人に習って舞台化し、日本各地での公演演目に加えていった。また同じころ全国に民族歌舞団が次々と誕生し、わらび座との交流を通して全国の歌舞団に「民族舞踊」としての「荒馬踊り」が定着していった⁴⁶。

⁴¹ 佐藤末吉「昔の農村」『館城文化』発行所・発行年不明。青森県文化財保護協会『津軽の農書 みちのく双書第36集』1993年、382-394頁、427-429頁に掲載。

⁴² 内田邦彦『津軽口碑集』郷土研究社、1929年。再販版：歴史図書社、1979年、226-227頁。

⁴³ 齋藤吉彦『上磯風聞志』1930年。後に『青森県史叢書 西浜と外ヶ浜の民俗』に掲載。青森県、2020年、292頁。

⁴⁴ ここでの「民族舞踊」という表記は、1960年代以降の民族舞踊教育運動の中で使われた表記で、当時は民族歌舞団わらび座が舞台化した踊りや、全国の教師たちが習い実践として広がった踊りを「民族舞踊」と捉えていた。これはわらび座が「民族歌舞団」を掲げていたこともあるが、「全国の各地に伝えられてきた土着の民族舞踊を、広く国民の共有しうる民族的文化へと発展させたいという」願いも込められていた。（中森孜郎『日本の子どもに日本の踊りを』大修館書店、1990年、68-71頁。）

⁴⁵ 大石、前掲書、363-365頁。

⁴⁶ 同上、363-365頁。

この荒馬踊りは「民舞教育」の文脈で更に展開する。宮城教育大学の中森孜郎を中心に、「日本の子どもに日本の踊りを」というコンセプトで、わらび座や他の民族歌舞団の協力を得ながら地域の学生や学校の教員らがこの民舞教育を学び、継承していく。こうしてこの活動に影響を受けた現場教師や研究者らが、民族舞踊を取り入れた民舞教育を実践していった⁴⁷。その主要な踊りのひとつが荒馬踊りであり、全国各地に広まった⁴⁸。

その後、民族舞踊教育研究会⁴⁹をはじめとした全国の民舞研究会などの今別町以外の場所で踊りを習った人が、本場の荒馬を見てみようといふ今別町の荒馬を観に訪れるようになった。結果、可能な限り、正統な伝統芸能を受け継ぎたいと考える学習者が増加するようになる。さらに保存会等の踊りの継承者であると考えられる伝承者を招いて、踊りを伝授する機会も増えるようになる。こうした動向を背景として、ネブタ祭りを観に訪れる人に荒馬が伝授されるようになり、伝統芸能の担い手の減少を防ぐ目的で、祭りの中で荒馬を演じられる機会を増加させる取り組みがなされるようになった⁵⁰。

以上が、国内における荒馬に関する研究の概略にあたる。これらを総合すると、次のような成果と課題が見えてくる。まず進藤の研究から、荒馬が広く津軽地方に伝播し、それらを踊りの形や動作からいくつかのタイプに類型化できることが明らかになった。また、進藤や小池の研究から、荒馬はボウノカミ送りや虫送りといった田植えが終わった後のサナブリ行事の行列に元々見られたのではなく、後から行列に加えられたことが分かる。つまり、荒馬は津軽地方に伝播しながらその地域のサナブリ行事に取り入れられ、その地域毎の様式で踊られるようになった。それから、その加わり方も西・北津軽地方と南津軽地方では違って、前者は後から加わったと考えられるが、後者は明確ではない。そのことから、最初は南津軽地方の行事に荒馬が取り入れられ、それが北津軽地方に伝播して虫送りに取り入れられた可能性が考えられる。また、現在はねぶた祭りで荒馬を踊る今別町史にも元々はサナブリの行事であったと記されている。したがって、上磯地方ではねぶた祭りの行列に後から荒馬が加わったと思われる。南津軽地方のボウノカミ送りについては明治中期の佐藤の史料に現在のような形式が見られ、北津軽地方の虫送りと上磯地方のねぶた祭りについては昭和初期の内田と齋藤の史料に現在とほぼ同じような形式が確認できる。しかし、それ以上の詳細は明らかになっていない。

⁴⁷ たとえば、東京都にある和光小学校は体育授業の2本柱にスポーツ教材と民舞教材を位置づけ、民舞の授業では毎年2年生が今別荒馬を学習し行事の中で披露している。東京都和光小学校、「教育の特色」
<https://wakoe.wako.ed.jp/education#h.r5neb94wef2c>（最終閲覧 2025.1.20）。

⁴⁸ 大石、前掲書、363-365 頁。

⁴⁹ 東京都内の民間教育研究団体、<https://www.minbuken.com/>（最終閲覧 2025.1.20）。

⁵⁰ 大石、前掲書、363-365 頁。

大石の調査研究は、全国の民俗芸能保存団体が過疎化による担い手不足で保存活動が困難になっている現状に対し、今別の荒馬については、今別荒馬を習いたいと現地を訪れる教育関係者らがねぶた運行に参加し祭りを盛り上げていることや、大川平荒馬やこの地域のファンとなった大学生や卒業生が毎年の様に戻ってきて、新たな祭りの担い手となり地域文化の保存維持に貢献している事例を明らかにした。但し、津軽の荒馬の全ての実態を網羅しているわけではない。それゆえ、いくつかの典型的な荒馬の事例をさらに検討すべき余地が残されている。

また、津軽における地方毎の次に荒馬を世界的視野から捉える上で参考となる先行研究および史料について述べておきたい。

Hobby Horse Dance の観点に拠るもの

先に述べたように「Hobby Horse Dance としての荒馬」という視座がこれまでの研究には欠如していた。荒馬のように動物を真似た装束、所作、踊り、馬を模倣する木馬を道具立てとする文化は津軽のみに限定されるものではなく、「Hobby Horse Dance」として総称される舞踊としては世界中に広がっている。その際、大英博物館 The British Museum による馬蹄形が幸運を象徴するようになった人類史にも言及する「Horses and human history (馬と人間との共生の歴史)」といった総説⁵¹や E.C.Cawte カウトによる *Ritual Animal Disguise* (動物に扮する儀礼行為)⁵²、Violet Alford アルフォードの *The Hobby Horse and other Animal Masks* (ホビーホースとその他の動物仮面)⁵³がある。加えて、先に言及したストラットによる前近代のスポーツ、娯楽、慣習を扱った *The Sports and Pastimes of the People of England* は荒馬の世界的な共時性と歴史的つながりを想起させ、かつその時代の動物と人間の関係性を考察するものとして特に重要な文献に位置づく。

なお、上述の馬との共生関係や動物に扮する儀礼行為の観点に即し、日本以外の馬の衣装を身につける踊りに着目し、荒馬との関係について示唆した小池は、フランスやスペインにも同様の馬を付けた踊りがあり、西洋の馬の踊りがユーラシア大陸を通り日本に伝わったのではないかという説を紹介している⁵⁴。確かにフランスやスペインでは現在もホビーホースダンスが伝承され、祝祭等で踊られている。また、イギリスはスポーツとしての狩猟、馬術との関連に限らず、馬との共生関係を重視し⁵⁵、たとえば、馬が人びとの生活にもたらす

⁵¹ The British Museum, op.cit., “Horses and Human History,”

<https://www.britishmuseum.org/blog/horses-and-human-history> (最終閲覧 2024.12.15)。

⁵² E.C. Cawte, *Ritual Animal Disguise* (London: DS Brewer for the Folklore Society, 1978), passim.

⁵³ Violet Alford, *The Hobby Horse and other Animal Masks* (London: The Merlin Press, 1978), passim.

⁵⁴ 小池、前掲書、8-9 頁。

⁵⁵ The British Museum, op.cit. <https://www.britishmuseum.org/blog/horses-and-human-history>, (最終閲

意味は装飾された馬蹄(ホースシュー)が魔除け及び幸福を呼び込む象徴として戸口に飾られるなど身近なものであり⁵⁶、ホビーホースダンスの研究も進んでいる⁵⁷。

前近代的なスポーツの概念と荒馬

加えて、ホビーホースダンスは大英博物館の特集記事が総括しているように、馬と人間との象徴的な共生関係の表現として生まれたと考えるのが自然であり、このことは荒馬が「何故、馬を対象とするのか」という問いとも通じる。この点について考察する際、前近代的なスポーツの概念史からの知見が示唆的である。たとえば、池田恵子による『前ヴィクトリア時代のスポーツ』は近代スポーツが成立する前夜の前ヴィクトリア時代（18世紀末から19世紀はじめ）には、鷹狩り、競馬、熊いじめなど、動物を伴ったスポーツが数多く見られたと論じ、そもそもスポーツと動物は前近代から深い関係性を有していたと述べている⁵⁸。また、前近代および近代スポーツが成立するまでの過渡期のイギリスのスポーツ史を描く際に不可欠であった先に言及のストラットの *The Sports and Pastimes of the People of England* の中でも、動物と人間が協働する慣習儀礼・娯楽が紹介されており、古い時代のスポーツは、気晴らしや娯楽を含む動物との関わりを無視できない文化であったことを示している⁵⁹。加えて、ピーター・バークは『ヨーロッパの民衆娯楽』の中で、前近代の民衆の祭りが「カーニバルの世界」、「さかさまの世界」として、日常の権威や正常とされる社会的地位の逆転を映していると述べている⁶⁰。ロバート・W・マーカムソンも『英国社会の民衆娯楽』の中で、前近代の村落共同体内における祭りの社会的機能は日常からの解放、「すでに存在する日常の対立と密接に関連」であることを明らかにしている⁶¹。したがって、前近代のスポーツ概念から荒馬の文化的奥行きに接近することは、ホビーホースダンスが生み出された背景にある動物と人間の共生関係と日常世界からの反転を通じた世界観を捉える手掛かりになり、本研究が明らかにしようとする荒馬の文化的本質に迫る際に不可欠な視点となるように思われる。

学校教育における教材としての荒馬

覧 2024.12.15)。

⁵⁶ Robert Means Lawrence, *The Magic of the Horse-Shoe: With Other Folk-Lore Notes* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1898), pp.3-5.

⁵⁷ Cawte, op.cit.; Alford, op.cit., passim.

⁵⁸ 池田恵子『前ヴィクトリア時代のスポーツ』不昧堂出版、1996年。

⁵⁹ Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England*, op.cit., passim.

⁶⁰ ピーター・バーク（中村賢二郎・谷泰訳）『ヨーロッパの民衆娯楽』人文書院、1988年。

⁶¹ ロバート・W・マーカムソン（川島昭雄・沢辺浩一・中房敏朗・松井良明訳）『英国社会の民衆娯楽』平凡社、1993年。

最後に学校教育における教材としての荒馬について先行研究を確認しておく。荒馬は1960年代から始まった「民舞教育」の文脈の中で教材として全国の学校現場や幼稚園・保育園・子ども園といった幼児教育の現場に広まった経緯がある。そして、教材としての荒馬は民舞教育の発展史の中で、いくつかの典型的な教材が生まれ教育実践が展開された。

1960年代から80年代にかけて広まったのは、民族歌舞団わらび座が舞台化した踊りを教材化した荒馬である。その特徴は、現地の踊りにある振りだけでなく、わらび座が創作した振りも組み込まれ、基本的な「型」を踏まえながらも自分たちの思いを込めて再構成や再創造をすることをねらいとする教材であった。

学校体育研究同志会は、この再構成された荒馬の「型」を踏まえながら、「はね」や「振り」を組み合わせ、空間構成を工夫し、即興的・創造的に踊る荒馬のおもしろさを主眼におき、集団で一つの踊りをつくりあげていくことねらいとして実践に取り組んだ⁶²。

しかし、このように、再構成・再創造が行われた結果、現地に伝わる元々の踊りとは異なる踊りを生産することにつながった。このことに問題意識を持ちはじめた教員たちは地元で伝承されている今別荒馬を学ぶため、青森県今別町のねぶた祭りを訪れるようになった。そして、そこで習った今別荒馬を教材化した実践が行われるようになった。

地元の今別荒馬の教材化の中心を担った東京民族舞踊教育研究会の園田陽一は、学校教育の中で民舞指導をするときには、地元で伝わる民俗芸能の歴史や由来、そして踊りの意味、そして伝承している方々の思いなどを汲み取って、一連の地域文化の脈絡の中で地域生活様式の中にある動きの必然を捉え、踊りの流儀だけでなく、なぜその動きなのかを明確にしながら、できるだけ地元で足を運び、地元で出会った人たち、目にした風景、感じたにおいや味など、伝授可能なものはなるべく伝えながら実践に取り組んだと述べている⁶³。1980年代以降は地元の踊りを教材化する試みが全国にも広がり、すでに教材化されていた踊りの地元を訪れたり、伝承地の保存会を招いて講習会を開いたりするなど、地元で元々伝わる踊りを習い教材化する実践が増えた。

このようにして、地元で習いつつも、幼児体育に即した文脈から宮城県石巻市で「わらしこ保育園」を運営し、「ダンプ園長」の愛称で親しまれていた高田敏幸が教材化した、通称「ダンプ園長の荒馬」が生まれた。高田は、元々はわらび座の荒馬を実践していたが、今別荒馬の本質を知りたいと現地との関わりを深め、地元で伝わる由緒だけでなく、東北や青森の地理や歴史、そこにかつて住んでいた先人たちの暮らしにも思いを馳せ、そこから想像さ

⁶² 高田敏幸・渡辺孝之「第1章 荒馬」『たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞』学校体育研究同志会編、ベースボールマガジン社：東京、1988年、77-78頁。

⁶³ 園田陽一『民舞に恋して－民俗舞踊を子どもたちに－』東京民族舞踊教育研究会編、新日本出版社：東京、2015年、32-33頁。

れるものを全て踊りの意味の中に込めて教材化を行った。加えて、荒馬に内在する身体を動かす喜びは「踏む」ことであるとし、「踏むことによって快いと感じる身体感覚がわかること」と「人とひとが快いものに向かって響き合い、力を合わせていく」ことを重視して荒馬の教材化と実践を進めた⁶⁴。

最初にわらび座の荒馬による教材化を進めていた学校体育研究同志会舞踊分科会は、その後地元の民俗芸能を教材化する理論を構築し、新たな荒馬教材を生み出した。進藤貴美子が打ち出した「民俗舞踊の身体技法」⁶⁵という概念の理解に努め、それまで実践されてきた民俗舞踊を改めて「身体技法」の視点で捉え直し、それを内在化させた教材化論について、実践研究の中で成果を明らかにした。その結果できあがったのが民舞教材『『今別』荒馬』⁶⁶である。左記の教材では具体的な学習内容として①縦軸の意識化、②縦軸方向への自重による安定した「踏み」、③上肢の脱力と下肢との連動などを取り入れた指導が展開された。

総合的な学習の時間や社会科の授業で地域文化として民俗芸能について学ぶ取り組みもなされていた。青森県内の中学校社会科教師の三浦博英は、地域再生という観点から社会科という教科の枠を越え、教科横断的に学校全体のカリキュラムに関わる取り組みとして行った実践を報告している⁶⁷。すなわち、「地域の伝統行事に関わることで地域に貢献する」ことを柱とし、2011年の段階では中学生たちは自分の地区の祭りを「外側から見ている」という状況であったが、総合的な学習の時間の一部を「地域学」として位置づけることで、2013年度は全校生徒が全地区の伝統行事に地域を支える一員として参加し、その成果を文化祭等で発表した。3年間の学校での取り組みの結果、地域の祭りが活気あるものになった。こうした事例は荒馬や荒馬を含む年中行事・祭りが、伝承地域において生きた教材となることを示している。

このように学校教育を介した荒馬の教材化の試みは「荒馬」が公教育を通じて、認知されるに至ったことを示すものであり、民俗舞踊であり、風流のひとつである荒馬の本質を問う本研究も学校教材としての荒馬に何を提言できるのかという点は軽視できない。但し、以下に研究方法として、詳細を示す通り、文献調査やフィールドワークを通じて、荒馬の起源や系譜に迫ったとしても、第二章で詳述する通り、荒馬の可変的かつ流動的な文化的総体に言

⁶⁴ 高田敏幸「津軽半島、今別町に伝わる民俗舞踊『荒馬』を教材化し、子どもたちに“こだわりの荒馬”を伝える」『季刊保育問題研究』全国保育問題研究協議会編集委員会編 210、2004年、20-29頁。

⁶⁵ 進藤貴美子「民俗舞踊の身体技法―黒川さんさ踊り『庭ならし』を例に―」『年報いわみざわ：初等教育・教師教育研究 15』北海道教育大学岩見沢分校、1994年、71-79頁。

⁶⁶ 沼倉学「表現運動 民舞教材：『今別』荒馬」『新みんなが輝く体育 2 小学校中学年体育の授業』、創文企画：東京、2019年、116-127頁。

⁶⁷ 三浦博英・篠塚明彦「地域学習は『地域再生』の基礎となりうるか―青森県における教育現場での実践を通して考える―」『社会科教育研究 No.131』日本社会科教育学会、2017年、13-24頁。

及する必要があるため、必ずしも単一ないし複数の起源を追求することが、本質論への接近を意味するとは限らない。それゆえ、本研究では、かつての研究にはみられなかった馬と人との共生関係を捉えることで、授業実践の体系化以前に本研究から提示できる「馬と人との共生関係」から見いだされる新たな本質を教材研究にどのように加味することができるかという試みの提案にとどめたいと考える。

第三節 研究方法と論文構成

以上の先行研究における成果と課題、世界の中のホビーホースダンスを含む動物との共生関係、学校教育を通じた荒馬の教材化といった観点から捉える新たな観点を踏まえ、津軽の民俗芸能荒馬について歴史的民俗学的考察を行い、『『荒馬』とは何か』という本質的な問いを明らかにするために、本論文の構成と研究方法を以下の通りとした。

本論文は第一部、第二部、補論に分けて構成した。第一部は「津軽の荒馬についての歴史的民俗学的考察」と題し、第一章では「江戸期の日記・紀行文にみる荒馬の起源について」論じ、第二章では「津軽の荒馬の比較研究」について論じる。第一部はこの二章からなる。

第一章では、江戸期の日記・紀行文における虫送り、ボウノカミ送り、ねぶた祭りの記述を対象とし、そこに記載されている年中行事・祭りの内容や荒馬の有無を考察することで、津軽の荒馬の起源について文献史料から分析を行う。対象とする日記・紀行文は、津軽の藩政時代の様子を記録した日記・紀行文のうち、虫送り、ボウノカミ送り、ねぶた祭りについての記載が見られた『永禄日記』⁶⁸、『平山日記』⁶⁹、菅江真澄が青森の習俗を記録した「牧の朝露」⁷⁰、「外浜奇勝」⁷¹、江戸後期の津軽の風土や暮らしを記録した『山一 金木屋又三郎日記』⁷²の五文献である。

第二章では、津軽の荒馬を植木行宣による風流踊の研究方法来に即して⁷³、比較分析を行った上で、さらに祭りを構成する風流の下位体系の多様性を炙り出す。すなわち、植木の分析によれば、一定の地域に集中した分布のそれぞれが一つの圏域をなし、さらに周囲のものと連なってより大きな圏域を形成するとされている。それゆえ、まずは、荒馬の分布図を作成し、各地域に伝わる荒馬を構成する個々の下位体系の特徴をつぶさに抽出し、それらの拡が

⁶⁸ 山崎、前掲書。

⁶⁹ 平山、前掲書。

⁷⁰ 菅江、前掲書、1793 年。

⁷¹ 菅江、前掲書、1796 年。

⁷² 武田、前掲書。

⁷³ 植木行宣「民俗芸能分布圏試論－丹後における風流踊りをめぐって－」『民族文化分布圏論』名著出版、1993、11-36 頁。

りに基づく圏域を示す。その上で、各圏域において継続性に信頼が持てる荒馬、つまり現在も地域の年中行事や祭りとして廃れておらず、フィールドワーク調査が実施可能であるものを各圏域の代表例として抽出し、比較分析を試みる。

これにより、文献研究から導きだされる荒馬の由緒と現存する風流としての荒馬の特徴を明らかにすることが可能となる。但し、圏域ごとの代表的な特徴とその下位体系にも差異が伴い、かつ、現在も過去においても、その伝統的な流儀そのものが時間をかけて構築され、習合し続けている側面もあることから、植木が述べているように、地域における風流の分析は、その由緒のある地域のある流儀や伝播ルートを特定することを第一の目的としない。むしろ、幅広くかつ多様に広がるという荒馬文化圏内の多様な内在的特徴を炙り出し、それを詳述することに意味を見出すことが可能となると考える⁷⁴。つまり、第一部は可変的かつ流動的な文化的総体としての荒馬の変化に着目する。

以上の第一部を受け、第二部では第一部で述べた日本の津軽における風流踊である荒馬の文化的特徴を相対化し、世界の中のホビーホースダンスとの共通性と独自性を明らかにしたいと考える。その際、Hobby Horse の概念が「*deportare* から *disport* へと」いったモダン・イングリッシュの前史にあたるラテン語や中世英語が包含する精神的物理的移動の概念といった前近代的なスポーツ概念とかかわりがあることを踏まえた。移動手段としての馬と古来のスポーツは無縁ではない。そこで、第二部は「Hobby Horse Dance としての荒馬」と題し、「第三章 前近代のスポーツ概念にみる Hobby Horse Dance」と「第四章 荒馬にみる馬と人との共生関係」の二章とした。

第三章では、まずスポーツ史における「sport」という言葉がどのような概念を包含しつつ変遷してきたのかについて論じる。具体的には、前近代のスポーツ概念、とりわけ、前ヴィクトリア時代のスポーツにおける馬と人との関係性について概観する。本章ではホビーホースダンスの類型の中でも、特に荒馬と同じ芸態を持つ「Tourney Horse（トーナメント馬）」を中心に検討する。そして、前近代的なスポーツが有していた包括的な概念との関係性、馬を介した祭りとしての民俗舞踊が生活の流儀をどのように映すものであったのか、荒馬と共通する儀礼行為の普遍的側面とが明らかになる。つまり、この民衆娯楽としての祭りはマーカムソンが述べる「社会の全領域の現実と切り離すことのできない、基本的な社会行為」であり、「すでに存在する日常との対立と密接に関連」するものであったと言える⁷⁵。

次いで、第四章では、第三章で得た世界的な Hobby Horse Dance 視座から、津軽の荒馬

⁷⁴ 植木は、圏域毎に抽出した代表例の類似点・共通点に固執すれば、より古い形態の「原」タイプを求めることにつながるが、その結果、その追求は「無限定な過去に溶解するもの」となってしまうと述べている（同上、11-36 頁。）。

⁷⁵ マーカムソン、前掲書、188-189 頁。

にみる馬と人との共生関係について考察する。まず、日本の馬匹生産の歴史、特に牧における馬の生産や管理について久慈勝男、安田初雄、山口英男、蒲池明弘などの研究を基に検討する。次に兼平賢治の研究を中心に⁷⁶、江戸時代の馬と人の関係性について確認する。それを踏まえて津軽という地域性に見る馬と人の関係を考察し、その心性が荒馬の様式にどのような影響を及ぼしたのかを検討する。

以上により、第一部で論じた荒馬は津軽という日本の地域における固有の風流踊であると同時に、世界に広がる馬と人との共生関係の表象でありかつ、日常とさかさまの世界—マーカムソンのいう「すでに存在する日常の対立と密接に関連」—としてのホビーホースダンスの一形態であることの具体的様相が明らかになる。これらの探究成果をもとに、そもそも学校体育教材として踊られるようになったことで、全国に知れ渡るようになり、いまなお、民舞の教材として踊り継がれる荒馬踊りの文化的奥行きを最後に検証してみたいと考える。

そこで、補論として「Hobby Horse Dance としての荒馬の教材化の試み」の一章を据えた。つまり、補論では、四章までの考察で得た新たな荒馬の視座を基に、荒馬の教材化を試みる。まずは、これまでの実践されてきた荒馬教材について概観し、民俗舞踊を学ぶ意味や荒馬教材の特徴などについて検討する。その後、第一章から第四章までに明らかになった荒馬の新たな知見を踏まえて、一例としての教材化の試みを行う。

結章では、以上述べてきた通り、各章で論じた内容を総括し、津軽の荒馬が持つ歴史的民俗学的特徴と荒馬が表象するに内在する馬と人の関係性を重ね合わせ、「荒馬とは何か」という問いに迫る。最後に本研究の限界点と今後の課題を提示する。

⁷⁶ 兼平、前掲書。

第一部 津軽の荒馬についての歴史的民俗学的考察

第一章 江戸期の日記・紀行文にみる荒馬の起源について

第一節 本章の目的と研究方法

本章の目的は、津軽の荒馬がいつ、どこで、どのようにして始まったのか、その起源を現存する文献史料から可能な限り迫ることを目的とする。

序章でも触れたが、荒馬の一つの特徴は、伝承地域によってその基盤となる年中行事や踊りの様式が異なることである。この年中行事が起源に迫る重要なキーワードでもあるので、まずはそれを整理しておく。

中弘南黒地区（弘前市周辺および南の地域）周辺ではボウノカミ¹送りの中に荒馬が登場する。ボウノカミ送りは悪疫を追い払う疫神祭のことである。「疫ノ神」「疱ノ神」「暴ノ神」と標記することもあるが²、近世以前、疱瘡などの疫病はこの疫神が暴れ回ることによって起こると信じられていた。その悪疫神がその地域に入らぬよう、藁人形（「ボウノカミ」と呼ばれる）を作り、様々な役に扮した人々の行列を伴って村を練り歩き、悪疫退散を祈る行事であった。この地方の荒馬は手綱取りが付かず、馬が単独で踊る様式である³。

西北五地区（津軽地方の北西部に位置する地域）周辺では虫送りの中で荒馬が踊られる。津軽の虫送りは藁で蛇や龍を模した模型（「ムシ」と呼ばれる）を作り、それを担いで村を練り歩き、稲虫退散や五穀豊穡を祈る呪術的行事である⁴。この地方の荒馬は、一頭の荒馬に二人の手綱取りが付く、即興的な踊りが特徴的である⁵。

上磯地方（東津軽地方の沿岸地域）ではねぶた祭りにおいて荒馬が見られる。ねぶた祭りは、元々は旧暦7月7日に行われた七夕の行事で、民間に伝わった「眠り流し」の行事が発展したものと言われている。「眠り流し」とは夏季の睡魔やその他の穢れや災厄を追い払う

¹ 「ボウノカミ」の標記は地域によって「疫ノ神」「ボノ神」など異なっているが、一般的呼称として用いる場合、大石泰夫の論考に習いカタカナ表記とした。（大石泰夫「第七章 民俗芸能」青森県史編さん事業民俗部会『青森県史 資料 津軽』青森県史友の会、2014年、345-365頁。）

² 尾上町教育委員会社教課編『古里の歴史民俗資料第3集 八幡崎・西野曾江地区編』尾上町教育委員会、1981年、113頁。

³ 同上、120頁。

⁴ 大石、前掲書、345-365頁。

⁵ 五所川原市相内に伝わる「相内の虫送り」の荒馬は、基本的には囃子のリズムに合わせて地区を練り歩きながら踊るが、所々で道に寝そべって動かなくなったり、進むのを嫌がって後ずさったり、馬の心情を即興的に表現する場面が見られる。（2018年6月9日に行ったフィールドワークで踊りを視察し、相内地区在住で地域の民俗芸能に詳しい三和不二義氏より示唆を受けた。）

行事で、人形や灯籠を持って練り歩き最後は川や海に流していた⁶。「青森ねぶた」や「弘前ねぶた」が有名であるが、青森県内では8月1日から7日にかけて広くねぶた祭りが行われている。この地方の荒馬は、荒馬役の男性と馬の手綱を取る女性が組になって踊る様式をとっており、他の地域では見られない独特のものである⁷。

これらの行事は、元々は「神送り」に通じ、人間生活に負の働きかけをする神を鎮圧して再来をこぼもうとする儀礼として行われていたが⁸、医学や農業技術の発展や社会構造の変化から行事の本来の意義は薄れ、行事の内容が省略されたり習合したりして、次第に芸能娯楽的なものに変化していったと考えられる⁹。

また、これらの年中行事や祭りは、基本的に「風流行列」¹⁰の形態で行われる。この行事の主役は「ムシ」「ボウノカミ」「ねぶた灯籠」であり、それらを担いで練り歩き祈願することそのものが祭りの主たる目的であった。したがって、これらの年中行事や祭りについての先行研究では、「津軽地方においては虫送りの行列の先頭に荒馬や太刀振りおよびよばれる芸能がつく場合が多く見られる」¹¹というように、荒馬はあくまで行列に附随する一芸能として語られることが多かった¹²。

荒馬の起源や由緒については、青森県史を初め、各市町村史、郷土研究誌や荒馬を含む風流行列等について探究する関連の民俗学研究の論稿の中で論及されている。しかし、各伝承地域に記された市町村誌や郷土研究誌の由緒譚や起源説は、民俗学的な視点から考察され

⁶ 青森県郷土館『ねぶたと七夕』青森県郷土館、1999年、1-15頁。

⁷ 進藤幸彦「津軽の民俗舞踊」『津軽の民俗』吉川弘文館、1970年、395-415頁。尚、進藤の荒馬の類型化については序章を参照のこと。

⁸ 仲井幸二郎・西角井正広・三隅治雄編『民俗芸能辞典』東京堂出版、1981年、126-127頁。

⁹ 尾上町教育委員会社教課編、前掲書、113-128頁。

¹⁰ 「風流」とは、元々は「みやびやかなもの、風情あるもの、雅致あるもの」の意である。平安中末期には宮廷貴族が築庭や調度・装束などにも風流を凝らすようになり、その世相を反映して祇園祭り等の祭礼行列の曳きものや装束にみやびた趣向を盛り込むようになった。それを契機に、趣向を凝らした山車や仮装行列、華麗な衣装、採物の踊りなどを「風流」と称するようになった。特に祇園祭りや盆踊りなどの怨霊や疫神を鎮送する目的の芸能には華麗な装束の練り衆が囃子を賑やかに奏しながら踊り歩くものが多く、それらの踊りや囃子を「風流」と呼ぶ傾向が強かった。したがって、祭礼の行列も本来は「風流」に含まれるのだが、本研究では行列に焦点を当てるため、多くの演者が列を作って、賑やかに華やかに練り歩く行列を「風流行列」とした。（本田安次「風流考」『日本の民俗芸能Ⅱ 田楽・風流一』木耳社、1967年、565頁；仲井ら、前掲書、394頁；独立法人日本芸術文化振興会「風流・風流行列、日本の民俗芸能」<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc27/genre/furyu/gyouretsus/>（最終閲覧2023年8月20日）。）。

¹¹ 文化庁文化財部伝統文化課『青森県津軽地方の虫送り-青森県津軽地方の虫送り調査報告書-』文化庁文化財部伝統文化課、2015年、7頁。

¹² 特に北津軽地方の虫送りの場合は荒馬を行わない地域も多く地域差があるので、荒馬は虫送りの中心的な芸能ではなく、その地域の特徴的な芸能として位置づけられている。『岩木川流域の民俗』の「民俗芸能」の章では、荒馬はこの地方の代表的な民俗芸能として取り上げられていない。（門屋光昭・村中健大「第7章 民俗芸能」『岩木川流域の民俗』青森県、2008年、171-180頁。）

たものがほとんどで、年代や伝播のルートを特定する上で実証的な史料は乏しく、踊り継がれてきたことに基づく口承伝承に依拠せざるを得ないものがある¹³。

そのような荒馬について書かれた史料は乏しいが、荒馬が踊られる年中行事についてはいくつかの史料が残されている。特に本研究が着目する江戸期の日記や紀行文には、当時の年中行事や祭りの様子が記述されており、年代や地域による年中行事や祭りの違いを考察することができる。そして、いつ、どこかの記述に荒馬が登場するのか見ることで、荒馬の起源についての手がかりを得ることができると思う。

したがって本研究では、様々な地域において踊り継がれている荒馬に関連する種々の踊りの形態進化・習合・枝分かれを含む民俗舞踊の拡がりについて議論する前に、現存している文献史料らの考察を行うこととした。なお、各地域において踊り継がれている踊りが有する体系を構成する個々の下位カテゴリーを詳細に分類し、その形態進化・拡がりの可能性を分析することは第二章に委ねる。本章ではそのための前段階として、江戸期の日記・紀行文における虫送り、ボウノカミ送り、ねぶた祭りの記述を対象とし、そこに記載されている年中行事・祭りの内容や荒馬の有無を考察することで、津軽の荒馬の起源について文献史料に限定した検討を行うことを目的とする。

具体的には、以下の一次史料を用いて行う。18世紀末から19世紀に書かれた以下の文献史料は、郷土史ないし民俗史研究によって虫送り、ボウノカミ送り、ねぶたについての記

表1 日記・紀行文の執筆年代と、各年中行事の執筆時期 (筆者作成)

	永禄日記	平山日記	牧の朝露	外浜奇勝	山一金木屋又三郎日記
1500年					
1600年	1627:虫祭				
1700年	1745:虫祭 1762:虫祭	1717:ボウノカミ送り 1773:ボウノカミ送り			
1800年			1793:大畑のねぶたながし	1796:木作のむしおくり 大館のねぶたながし	1855:浅虫の棒の神送り 1856:一丁田・高屋の虫祭り

載を含むことが指摘されているものであり、復刻版も存在している。なお、風流について語る古文書はむしろ限定的であり、他に新たな史料発掘がなされる可能性は低く、少なくとも、現存する下記の古い史料に記された内容を整理しておく必要性はあろう。津軽の藩政時代

¹³ 津軽地方を特徴づける民俗芸能として挙げられている「三匹獅子踊」「津軽神楽」荒馬「太刀振り」のうち、津軽神楽は津軽藩の宗教政策として直接関与したため、起源等に関わる史料が残されている。「三匹獅子踊」は藩政時代の津軽藩の新田開発との関わりから起源や伝承を伝える巻物を複数の団体が持っている。それに対し、荒馬や太刀振りを伝承している地域にはそのような巻物もなく、藩の公式の記録にも残されていないため、史料が少ない。(大石、前掲書、345-365頁。)

の様子を記録した『永禄日記』（1791 年頃成立、復刻版の全集 1983 年）¹⁴、『平山日記』（1803 年頃成立、復刻版の全集 1967 年）¹⁵、菅江真澄が青森の習俗を記録した「牧の朝露」（1793 年頃成立、復刻版の全集 1971 年）¹⁶、「外浜奇勝」（1796 年頃成立、復刻版の全集 1971 年）¹⁷、江戸後期の津軽の風土や暮らしを記録した『山一 金木屋又三郎日記』（1862 年頃成立、復刻版 1995 年）¹⁸の五つを研究対象とする。これらの史料が書かれた期間と、対象とする記述の執筆年を「表 1 日記・紀行文の執筆年代と、各年中行事の執筆時期」に示す。

第二節 藩政時代の日記・紀行文に見られる風流行列の形態について

第一項 『永禄日記』、『平山日記』に見られる虫送りとボウノカミ送り

『永禄日記』は、津軽藩ができる以前、この地方を治めていた浪岡北畠氏の後裔山崎氏による家記である。代々家憲として書き続けてきたものを山崎立朴が編集したとされている。1558 年（永禄元年）から 1772 年（安永 7 年）までの記録には、年の豊凶、天候の異変など、さまざまな出来事について記されている¹⁹。

『平山日記』は、五所川原市湊の平山家の家記で、同家六代の平山半左衛門が編著ではないかと考えられている。1550 年（天文 19 年）から 1803 年（享和 3 年）までの出来事が記録されている。特に農業に関する記述が多い²⁰。

虫送りは「虫祭」と記述され、二つの日記を突き合わせると、1627 年（寛永 4 年）、1745 年（延享 2 年）、1762 年（宝暦 12 年）の 3 回行われていたことがわかる。

1627 年（寛永 4 年）の虫祭について、『永禄日記』には次の様に記録されている。

六月初頃より稲虫^{ムシマツリ} 敷、在々虫祭^{オビタダシク ザイザイ ツカマツ} 仕ル。然 処^{シカルト} 南光坊^{コロナンコウ} 天海僧^{ボウテンカイソウ} 正江^{ジョウ} 被仰付^{ヘ オナセツケラレゴ} 御祈禱^{キトウ} 七

¹⁴ 山崎立朴編『永禄日記』1791 年頃成立（復刻版：青森県文化財保護協会『永禄日記 みちのく双書第一集』国書刊行会、1956 年）。

¹⁵ 平山半左衛門編『平山日記』1803 年頃成立（復刻版：青森県文化財保護協会『平山日記 みちのく双書第二十二集』青森県文化財保護協会、1967 年）。平山半左衛門編、平山日記、1803 年頃成立 [平山日記 みちのく双書第二十二集、青森県文化財保護協会、1967 年]。

¹⁶ 菅江真澄「牧の朝露」1793 年頃成立（復刻版：内藤武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第二巻』未来社、1971 年）。

¹⁷ 菅江真澄「外浜奇勝」1796 年頃成立（復刻版：内藤武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第三巻』未来社、1972 年）。

¹⁸ 武田正三郎敬之『山一 金木屋又三郎日記抜粋編』1862 年頃成立（青研、1995 年）。

¹⁹ 山崎、前掲書、解題。

²⁰ 平山、前掲書、解題。

アリ
日有²¹。

『平山日記』にはその年の正月から天災が続いたことが、次の様に記されている。

正月元日大風、二月大地震^{ジワ レソウロウホド} 地割^{タチヨリ} 候 程、春立^{ヨリ} 方水不足、六月初頃^{オオクツキ} 方稲虫多^{ザイカタ} 付、在方ニ
テ^{ツカマツリソウロウ} 虫祭 仕^{シカルトコロニオアズカリノ} 候、然^{オオセツケラレソウライテゴ} 所 御預之御出家ニ被仰付^{キトウ} 候 而御祈禱七日有り²²、

この年は、元日から大風、2月には地割れがするほどの大地震、春からは水不足になり、6月には虫害は発生するという天災続きの年であった。そこで「在々」、つまりあちこちの村々で虫祭が行われた。また、南光坊天海という僧侶が仰せつけられて7日間の祈禱を行った。

村々で行われた虫祭の形態や様子はこの記述からは不明である。また、南光坊天海の祈禱も村々で行われた虫祭の一つだったのか、それとも藩などが取り仕切る公式の祈禱だったのか、後者のようにも読みとれるが断定はできない。

1745 年（延享 2 年）の虫祭について、『永禄日記』には次の様に記録されている。

二月末より能雨降不^{ヨクアメフリモウサザリソウロウ} 申 候。照^{テリツツキソウロウユエ} 続^{クサキノ} 候 故、草木芽出、花も早く^{ハルノ} 春土用中ニ不^{チュウ} 残^{ノコラズ} ひらき
モウシソウロウ^{モウシソウロウ} 申 候。六月土用中^{アシタ} 天気悪敷、土用後も大分寒く^{ダイブン} 候。七月十五日^{ソウロウ} 強き南風朝四時より日
マデフキ^{マデフキ} 暮迄吹、出穂ニハ^{モウサズソウロウ} 当り不^{イマダイデザリソウロウ} 申 候。未^{ソウロウ} 出 候 稲ニ^{ミソウロウトコロ} 当り 候 やと見^{ソノ} 候 処、其後八月中旬に
カレ^{カレ} 段々枯穂出^{イデソウロウ} 候 間、すい白虫付^{ツキソウライテ} 候 而、左様ニ可有^{コレアルベシ} 之と在々虫祭^{ツカマツリソウロウ} 仕^{ツカマツリソウロウ} 候²³。

この年は、2月末から雨が降らずに日照りが続き、花や草木は春の土用（4月下旬頃）には全て咲いてしまった。しかし、6月になると一変して天気が悪くなって気温も下がり、7月15日に1日中吹いた強い南風の影響で8月中旬には稲穂が枯れてきて、更にすい白虫の虫害に襲われた。それで、村々で虫祭が行われた。

この時も 1627 年（寛永 4 年）と同様に虫祭は村ごとに行われたが、その詳細は不明である。

平山日記には虫祭を行った記録はないが、「此年南風虫付等^{コノ ハ エ ツキナド}にて大不^{ナンギシソウケミ} 作在々難儀^{ナンギシソウケミ} 惣^{ナンギシソウケミ} 検見^{ナンギシソウケミ}」

²¹ 山崎、前掲書、32 頁。

²² 平山、前掲書、30 頁。

²³ 山崎、前掲書、172-173 頁。

願御座候」²⁴とあり、この年は南風の影響で大変な不作だったので、困って藩に年貢納入について相談を願い出たことがわかる。

1762 年（宝暦 12 年）の虫祭について、『永禄日記』の記録は下記の通りである。

春立雪消遅彼岸二月 廿 八日ニ 候 処、三月十四五日迄雪有 閏 四月十九日入 梅ニ而、
同月中 植 候田ハ 宜、五月ニ 入 植 付 候分ハ 甚 虫付 多、在方虫祭村々ニ有之、虫付
稲ハ土用中半より新 萌 出、土用過十日 余 も草取事。虫付不 申分ハ 去 秋 之 比 出穂、
麦ハ散々不作²⁵。

例年は彼岸の 2 月末には雪が溶けるころ、その年は 3 月半ばの春になっても雪が溶けず、閏 4 月に入梅をしたとある。閏月は 4 月が 2 回あることで、実際は 5 月中旬に梅雨入りしたことになる。その時期に植えた稲の多くに虫がつき、それで村々で虫祭が行われた。虫がついた稲は 7 月下旬（夏の土用半ば）には芽が出て、虫がつかなかった分は昨秋に比べて穂が実った。しかし、麦は散々だった。

『平山日記』には虫祭についての記録はないが、以下の様な記録がある。

春立雪消かたく彼岸二月 廿 八日の 処 三月十四五日早く雷 有 之 候、閏 月有之故
可有 之 候、四月の 閏 月に春夏共余り荒々敷く無御座の年にて豊年に成る²⁶

3 月半ばまで溶けず、3 月半ばには雷があった。この年は閏月がある年で、その春夏は荒れることが無く、豊年になった。昔から雷が多い年は豊作になるといわれ、この年も雷が早くあったことが記述されている。永禄日記と合わせて読むと、虫が多い年だったので虫祭を行い、その御利益だったのかその後の気候も穏やかで、豊作を迎えることができたようである。

これらの史料から、江戸期津軽地方の虫祭は村々で行われ、その一つの形態として僧侶による祈祷があったことがわかる。しかし、現在の様な行列を伴う祭であったかどうかは定かでない。また、3 回しか記録が残されていないことから、虫害が酷かった年に記録した可能性が考えられるが、年中行事としてそれ以外の年も虫祭が行われていたのか、害虫が発生した時にだけ虫祭が行われていたのかはこの記録からは読み取れない。

²⁴ 平山、前掲書、263 頁。

²⁵ 山崎、前掲書、211 頁。

²⁶ 平山、前掲書、325 頁。

次に、ボウノカミ送りについて見ていく。『平山日記』には1717年（享保2年）、1773年（安永2年）の2回、ボウノカミ送りが行われた記録があるが、『永禄日記』にはその記録は見られない。ただし、その時期に「時疫」が流行したと記載されている。

1717年（享保2年）のボウノカミ送りに関する『平山日記』の記録は次の通りである。

コノ ナツヨリジエキ テ アイワズライ ソウロウアイダ コレ ソノ トオリソウロウ
此年夏より時疫ニ而諸人相煩、段々うつり候間、諸人は是を嫌い、其家の前通候ニも、
アルキイキソウロウ ノ ソウロウ シカレドモ キライソウライテ セツ アイワズライ シニタエオオクゴザソウロウ
走り歩行候程之事ニ候、然共何程嫌候而も当り前の節は相煩、死絶多御座候、
ヨリテ
依而ぼうの神一ヶ村ニ而五度七度宛送り申候得共一向其印無之候而、其翌年も病残り
ノ アイワズライ サン、ヨ ノ ヤムコトナシ オオクシニ ヨリシニタエノ コレアリソウロウ
之者相煩、三四年之間無止事、人多死或ハ家ニ奇死絶之族も有之候²⁷

この記録では、この年の夏から時疫が流行し、病人がいる家の前を通る時は走って過ぎようとしていたようであるが、そのような行為もむなしく多くの死者が出た。それで、ボウノカミ送りを「一ヶ村ニ而五度七度宛送」ったとある。一つ一つの村で5度送ったり7度送ったりしたということだと思われるが、ボウノカミ送りについても村々で行われていた。しかし、その甲斐もむなしく、3、4年は疫病が止まなかった。

『永禄日記』にも、翌年の1718年（享保3年）の記録に「其夏より時疫流行皆々煩候故、日雇之者無之、作手入難儀仕候。」²⁸とある。夏より疫病が流行して皆が感染し、働き手がいなくなって困ったようだ。

1773年（安永2年）の疫病は深刻で、ボウノカミ送りだけではなく、大掛かりな祈祷も行われた。『平山日記』には次の様に記録されている。

コノ ジエキ ハジメ アルイ ハタチ イウ ニワカ
此年四月より時疫はやり初は村のはつれ小家或は派杯と言所より病出し卒に大熱に成
り一向寒熱のふけさめと申無之して只大熱症にて病出しより八日めに必大戦慄来りふ
ヤミ
るい止て大汗出て大便痛する者は活戦慄来ても汗不出者は死す、（中略）右に付古来先例
コレアルヨシ カシラ オモノイリ キトウオオセツケラレルヒトガタ クニジュウ
有之由にて山伏頭大行院え御物入の御祈禱被仰付人形を作り御国中山伏の長老なる者
を集美十七日の祈禱行法甚新にして皆耳目を驚し候、六月十四日まで右祈禱満シ同十
ノリモノ ツキシイアオモリ
五日大行院は乗物にて山伏数百人附添青盛へ行き同所の海江送り候処四五日過候て
ヒトガタマタサナキ ヨリソウロウヨシ コレ コレアリマジク モウシソウロウ キトウハジメ アオモリ ミチミチ
右人形亦々渚へ寄候由、是を見て只事に有之間敷と申候、祈禱初より青盛への道路
ソウロウマデ オビタダシキコナリ シカレドモソノシルシ アイミエモウサズマスマス
同所の海え送り候迄諸人参詣夥事也、然共其験少しも相見得不得不申信強大ニ成り
モウシソウロウ
申候²⁹

²⁷ 平山、同上、194頁。

²⁸ 山崎、前掲書、135頁。

²⁹ 平山、前掲書、362-363頁。

『永禄日記』にも上の時期に時疫が流行した記録があり、祈祷の様子が次のようにより詳細に記されている。

時疫次第に夥敷事ニ付大行院に而祈禱被仰付候處、古来も例御座候由ニ而、人形
を作り国中山伏之長者殿を集、十七日之祈禱ニ而行法甚たあらたにして人皆耳目を
驚し候。六月一四日一七日之祈禱満し、同十五日山伏数人ニ而青森へ送り其人形を船
ニ乗せ、風之儘に放ちやり候。其間国中参詣夥敷事、参錢之多き事難尽筆紙。然処
四五日過、右之人形又々返り参候由ニ而、亦々山伏共参是を送り候。是ハ唯事ニハ
不可有、時疫彌増時行可申先兆と人々申候。此祈禱ニ大行院江参候山伏数人ニ
候処、此後時疫ニ而皆々相果候。此時青森へ送り候路次之参錢多候処、是を
取候山伏不殘相果候³⁰。

上記は次のような状況であったことを伝えている。つまり、この年は4月から疫病が流行し始め、その症状は大熱が出たり寒気がしたりして、8日目に必ずふるえが来て、それが止むと大汗をかき腹を下すと生きられる。しかし、ふるえが来ても大汗をかかないと死亡した。山伏の頭が古来からの方法による大行院での祈祷を仰せつけられた。国中の山伏の長が集められ、17日間という長い祈祷に人々は驚いたようだが、その内容は人形を作りそれを奉るというものであった。そして、数百人の山伏を連れてその人形を青森の港に運び、それを船に乗せて海に流してやった。しかし、4、5日後に人形が港に戻ってきてしまい、これは只事ではないとなった。青森までの道々には参拝する人が多くなったが、疫病が衰える兆しは見えず、ますます感染者は増え、しまいには山伏たちが罹って死んでしまった。

さて、現在もボウノカミ送りが伝承され執り行われている中南地方八幡崎地区に伝わる「八幡崎疫ノ神退散祭由緒」では、この祈祷が八幡崎疫ノ神送りの起源だとしている³¹。そこには、人形を作って祈祷したり海に流したりする方法が記載されているため、現在行われているような藁で男女の人形を作り奉る習わしがこの頃にすでに存在していたことを示しており、その起源であった可能性が考えられる。

『平山日記』にはこの時、村々でもボウノカミ送りや百万遍の祈祷が行われていたことがつぎのように記録されている。

³⁰ 山崎、前掲書、233-234頁。

³¹ 尾上町教育委員会社教課編、前掲書、113-115頁。

村々にて疫ノ神祭二^{バウノカミマツリ}三度も執^{トリオコナイ}行^{マタ}、亦山伏共を頼み火^{ドモ}焼^{クワショウ}ざんまい杯と頓^{ハイ}弁^{トンベン}いふて怪敷事を致して此疾を遁^{コノシツ}れんとすれ共^{ノガ}弥^{ドモイ}やますして山伏も段々に相煩^{アイワズライシ}死する者多し
村々にて百万遍の念仏を執行すれば宣^{ヨロシ}クとて、皆燈籠^{トウロウ}を拵^{コシラ}蠟燭^{ヘロウソク}を悉^{コトゴト}く費して、葬礼のごとくにして鉦^{ドモコレ}をたたぎだて廻^{ソノシルシ}りけれ共是も其験なし³²

この記録によると、村々ではボウノカミ送りが1度ではなく2、3度行われ、山伏による祈祷も行われたが効果が無く、山伏も病に倒れ死んでいった。また、百万遍を唱えるといいとして、燈籠を作り蠟燭をともにして鉦を叩きながら村を回って祈ったが、その効果も見られなかった。

この記述から、この時代のボウノカミ送りは、灯籠を掲げ、鉦を鳴らしながら村を回る行列の形態であったことがわかる。その鉦も「葬礼のごとき」とあるので、祭りのお囃子というよりは、死者を弔うための鉦の音だったと推察される。

第2項 菅江真澄の「牧の朝露」に見るねぶたながしと「外浜奇勝」に見る虫送り

菅江真澄は1793年から1801年まで津軽から下北地方を見聞してまわり、その習俗について記録した。七夕のねぶたながしや虫送りなどの年中行事の記録も残されており、1793年7月6日と7日に下北地方を見聞した時、大畑（現むつ市大畑町）でねぶたながしを見て、その様子を以下の様に記述している。

六日 空はれて、暑さ、つちの中よりもいや増りて、いな、ひえのほ出て、やはしき世にはあらじかしと、つどふ人よろこびぬ。

（中略）

いまだくれはてぬに、わらは、むさかなゝさか（六尺、七尺）、あるは丈斗^{ジョウト}の棹^{サオ}のうれにいろ画かいたる、けたなる火ともしに七夕祭としるして、そが上に小笹^{コザサ}薄^{ススキ}などさしつかね手ごとにさゝげ持て、「ねぶたもながれよ、豆の葉もとゞまれ、^オ苧^オがら／＼」とはやし、つゞみ、笛に声どよむ斗^トありくは、いでは（出羽）の国秋田の山賊のわらはは、麻芋のからをおのれ／＼がとしの数に折て、藤豆という、野にはう、かづらに巻ゆひにいゆひて、おなじ国ながら久保田（秋田）の里などには、唯燈^{タダアカリ}たかくさゝげありけど、さるをこなひもせざりけり。飽（秋）田郡にては、ねぶりながしといへど、こゝにては、ねぶたながしといふめる。（中略）

³² 平山、前掲書、363頁。

七日 朝とく雨のふれれば、

雨にけふぬれ渡るとも銀浪（あまのがわ）こよひは袖をほし合いのそら
夕霧ふかければ、ながめわびて、

秋風に天の河きり吹はれよ逢瀬まよはん妻むかひ舟

こよひも、火ともしたかやかにふりかざして童のゝしりありけど、過し夜よりは、ひのかげ
おとりたり。此灯火のかげ、寺々のたか燈籠の松杉のうれにかゝやき、軒毎には、なぬか盆
とて灯をかけたるに、螢の光、夕月のおかしさとめでて小夜中までありて、戯れうたに「ね
ぶたながし」てふことを、

あなねぶたながしと秋の一夜をもおもはで星や祭るなるらん

人々、こよひの歌よまん、銀河いづこをながるゝや、いまは空かいけちくもりたれど、こゝ
ろあてにあふぎて夜半も過ん頃、

棚機のあまの河なみうつつとも夢ともわかでこよひあけなん。³³

6日は天気がよく気温も上がり、稲や稗の穂も出てきて、このような素晴らしいことはめ
ったにないと、集まった人々が喜びあっていた。この時代のねぶた灯籠は、2m ぐらいの竿
の先につけた灯籠に絵や「七夕祭」の文字を書き、先に小笹薄をつけ、それを手で持って練
り歩く形態だった。また、「ねぶたもながれよ、豆の葉もとゞまれ」と、鼓や笛の囃子に合
わせて歌い歩いた。秋田の里ではただ灯籠を高く掲げることはするが、そのような行為はや
っていない。そのことを秋田では「ねぶりながし」というが、ここでは「ねぶたながし」と
いっていた。

7日も前日までよりは灯の数は少なかったが、燈籠を振りかざして子どもたちが賑やかに
していた。この灯火は「なぬか盆の灯」として寺の木々の枝や各家の軒毎に掲げられ、人々
は小夜中まで銀河の天の川に七夕の思いをはせていた。

菅江は7月1日から大畑に滞在していたが、5日以前にはねぶたながしの記述は見られ
ない。8日は田名部に移動しているので8日の様子は定かではないが、おそらく頃には7月
7日の七夕にかけての数日間ねぶたながしをすることが定着していたと思われる。現在のね
ぶた祭りでも7日は「なぬかび」と呼んで祭りの締めくくりの日と捉えられている。この手
持ちの灯籠を掲げてあるく形態は、初期の弘前ねぶたに見られる形態と同じである。この手
持ちの灯籠が扇型や人形型になり、それがどんどん大型化することで現在の様な「弘前ねぶ
た」や「青森ねぶた」になっていった。この時に歌われた「ねぶたもながれよ、豆の葉もとゞ

³³ 菅江、前掲書、353-355 頁。

まれ」という歌は、現在でも歌われることがある。この時代の下北地方のねぶたながしでは、鼓や笛を伴うお囃子が演奏された。これは、先のボウノカミ送りの鉦の音と比べると、だいぶ賑やかなものになっていたと思われる。秋田の里で見られた「唯燈たかくさゝげあり」とは、秋田の「竿灯」だと推察される。

この3年後、1796年（寛政8年）に津軽地方を見聞して回った時の日記『外浜奇勝』に、木作（現在の木造）の辺りのねぶたながしと大館の虫送りのことが記述されている。

（7月）四日（中略）

ゆんでに村あまた遠からず見えて、長田村をへて^{キツクリ}木作に到る。このやかたにまつる、やはたのみやどころにまうでて、相知れるかみぬし工藤定当がやどにとぶらひかたらひ暮れば、笛つゞみにはやしどよめけば、わらはべ、をのれ＼／が手ごとに、^{アカリ}燈の器をおもひ＼／に作りもて、てりかゞやかし、ふりかざし、みちもさりあへず、よひより至るまで人のむれありくは、れいの、ねぶたながしなめり。

五日 けふ斗^トはとて、あるじとからたひてくるれば、わらは、大丈夫うちまじり、ねぶたもながれよと、はやしありくかまびすしさ。

六日 （中略）坂くだりて船岡、床前、大館に到るほど、むしおくりすとて、人のかたしろ、むしのかたしろをあまた作りもち、いと＼／の^{カミハタ}紙幡を風にふかせ、つゞみ、笛、かね、^{ホラフキ}宝螺吹、ねりさわぎ戯れ舞ひて田づら＼／をめぐり、はて＼／は、つるぎ^{タチ}太刀してきりはらふのわざもありけるとなん。大なる野良をはる＼／と^{スギ ウキタガワ}過て浮田河をわたり^{ミトビラ}御扉の浜に來けり。³⁴

この日記は、旧暦の7月4日から6日の日記である。4日に木作に着き、宿に入ってくつろいでいると、笛と鼓のお囃子が聞こえてきた。見ると子どもたちが手に手作りの灯籠を持って振りかざし、夜が更けるまで行列になって歩くねぶたながしであった。5日もねぶたながしは続き、「ねぶたもながれよ」とやかましく囃し歩いていた。6日は船岡、床前（現在の床舞）、と移動し、大館に着くと虫送りをやっていた。人の形と虫の形の頭を作り、紙旗を振って、鼓、笛、鉦、法螺貝でお囃子を鳴らしながら田の畦などを戯れ舞って歩いていく。その後には「つるぎ太刀して切りはらうわざ」が見られた。

菅江は、木造で子どもたちがそれぞれの灯籠を持ちお囃子を伴い町を練り歩く姿を見て、3年前に下北で見た行事と同じものだとして理解し「れいの、ねぶたながしなめり」と記述したと思われる。その行列の形態はほぼ同じで、灯籠は手に持てる大きさの灯籠をそれぞれ作り、

³⁴ 菅江、前掲書、148-149頁。

笛と鼓のお囃子を伴った行列であった。「ねぶたもながれよ」という囃し言葉は、3年前の下北でも聞かれた。

6日は大館（現つがる市森田町大館）に移動し、そこで虫送りを見ている。この虫送りには「人のかたしろ」と「虫のかたしろ」が登場する。これは、現在の虫送りやボウノカミ送りに見られる藁で作った「ムシ」や「男女の人形」と考えてよいと思われる。お囃子は鼓、笛、鉦、法螺貝とだいふ賑やかになっている。そして戯れ舞って歩いている姿から、虫害を追いはらう呪術的な祈祷要素の他に、大きなお囃子をかき鳴らしながら練り歩く娯楽的要素も見られる。

大館の虫送りは、丁度七夕の時期に行われていた。七夕も穢れを水に流して禊ぎをする行事が起源なので、虫害や疫病を村から追い出そうとする「神送り」の思想と通底する。ねぶたながしと虫送りの形態が似ているのはそのような思想的な共通性もあると思われる。また、「つるぎ太刀してきりはらふわざ」というのは太刀振りのことではないかと思われるが、断定は難しい。しかし、荒馬についての記述はない。1796年頃までには、まだ虫送りの中では荒馬は顕著に見られなかった可能性と文献史料には残らなかった可能性の双方が推察される。

第3項 『山一金木屋又三郎日記』に見られる虫送り

この日記は、岩木町（現在の弘前市岩木町）で造り酒屋を営んでいた山一金木屋又三郎（本名は武田正三郎敬之）が書いたもので、弘前や周辺地域の町人や役人の暮らしの様子が描かれている。年代としては1837年（天保8年）、1853年～1860年頃（嘉永6年～万延文久の一部）のことが記されてる³⁵。

1855年（安政2年）6月の日記に、浅虫の「ボウノカミ送り」のことが記述されている。

十九日には浅虫^{ボウノカミ}棒の神送り太刀振り子供十四五人出 其他^{ヤリ}鑓 弓 鉄砲 長柄挟み箱 長刀等色々細工致し 猿田彦なども出 行列賑々しく 別して太刀振り子供上手にて見事に御座候。中々近村の様なざつたる事に無く候 浅虫は湯の気にて堪え難き暑に御座候³⁶。

浅虫では賑やかな行列を伴うボウノカミ送りが行われていたようである。14、5人の子どもによって見事な太刀振り演じられていた。また鑓、弓、鉄砲などの武家の道具や猿田彦の仮装も見られる。この行列は、周りの村で行われているボウノカミ送りのように雑なもので

³⁵ 武田、前掲書、504頁。

³⁶ 武田、前掲書、176頁。

はなく、立派な行列だったようである。浅虫は温泉地である。湯の気で暑いのはそのためである。

この日記で1番注目すべき点は、ボウノカミ送りの記述に太刀振りが明記されたことである。菅江の虫送りの記述に太刀振りを思わせる描写がみられたが、この記述では子どもが14、5人参加したことも含めて書かれている。また、鎗、弓、鉄砲といった大名行列の装いで練り歩いている。これは、「八幡崎疫ノ神送り」の行列にも見られる。この基になっているのは「弘前八幡宮の例祭行列」だと思われる³⁷。しかし、これらの中にはまだ荒馬は見られない。

翌年の1856年（安政3年）6月19日と6月20日の日記に、一丁田二本木と高屋の虫祭りの様子が次の様に記されている。

六月十九日 晴

店ごみ掃き井戸式ツかえる ^{イチチョウダ}一丁田 ^{カサホコ}二本木虫祭り ^{ダイカグラ}傘鉾七八本出 太神楽真似獅子などもでる

太刀振り 荒馬等も出る

六月廿日

今日高屋虫祭り ^{タカヤ}傘鉾三之助に持たせ遣わす ^{ヤリ}傘鉾七本旗大小八本 鎗 獅子 猿田彦真似 馬上山伏の真似貝吹き祭礼 ^{ガマ}構いのよしか 殿様の真似か杉葉の鳥毛 ^{トリケ}式本 道具挟み箱折板 ^{オリイタ} 奴振り鷹の代わり薄柿色の鶏を紐付け手へ上げ ^{エサ}餌差しも出る ^{ムシ}虫大なる事なり 太刀振り六人 あら馬四人なんだか騒々しき事なり 馬鹿らしき事なり 昨年迄左様の事無く候処 ^{ヘサ}一丁田二本木にて色々出候に付きまけぬと言う訳やら当年はいろ／＼出る。³⁸

この地域の虫祭りに荒馬の記述が登場する。太刀振りも見られる。特に高屋の虫祭りには、傘鉾、旗、鎗、道具挟み箱といった物を担いで持つだけでなく、猿田彦真似、馬上山伏の真似、殿様の真似など、様々な仮装をした人たちが加わり、だいぶ賑やかな行列になっていた

³⁷ 弘前図書館収蔵『弘前八幡宮祭礼図 壱〜伍』には、当時の渡御行列の様子が詳細の描かれていて、武家の道具を持つ姿や様々な仮装の姿も見られる。（弘前市立弘前図書館「弘前八幡宮祭礼図 壱〜伍（目録）」『おくゆかしき津軽の古典籍』〔電子書籍〕 <https://adeac.jp/hirosaki-lib/catalog/mp000200-200010>、最終閲覧 2025.6.30。）

³⁸ 武田、前掲書、242 頁。

ようである。大きな虫も見られる。

「あら馬」は手綱取りのつかない単独の馬が4人いたと思われる。「なんだか騒々しきことなり 馬鹿らしき事なり」ということは、整然と列を作って厳かにやるというよりは、面白おかしく賑やかにやっていたと推察される。

また、「昨年迄左様の事無く候処」とあるように、このような行列になったのはこの年からであった。その理由は、「一丁田二本木にて色々出候に付きまけぬと言う訳やら当年はいろ／＼出る」とある通り、一丁田二本木の虫祭りに「まけぬと言う訳」、つまり、隣の町と虫祭の規模を競い合っていたからであった。このことから、この時代には虫害を払う呪術的要素よりも、娯楽的要素が強くなり、隣の村よりも規模や面白さを競い合う祭りとして実施されるようになっていたようである。「昨年迄左様の事無く」の「左様の事」がこの様な賑やかな行列全体を指しているのか、それとも太刀振りや荒馬を賑やかに面白おかしく行ったことを指しているのかはわからない。

第三節 虫送り、ボウノカミ送りの変化と荒馬の登場

以上、『永禄日記』、『平山日記』、『牧の朝露』、『外浜奇勝』、『山一 金木屋又三郎日記』に見られる虫送り、ボウノカミ送り、ねぶたながしの記述を辿ってきた。本研究で利用した文献史料で荒馬が初めて登場するのは『山一 金木屋又三郎日記』の1856年虫祭の記述であった。しかし、その過程をみると、虫送りやボウノカミ送りが持つ行事としての意味や内容が時代や伝播によって変化し、そうした変化の過程を通して、荒馬が現れるようになったことがわかる。

『永禄日記』『平山日記』は、弘前藩内に居住していた山崎家と、北津軽地方（現在の青森県五所川原市周辺）を治めていた平山家の者によって書かれていることから、都市部やそこに近い地域の様子が記述されている。この記述によると、虫送りやボウノカミ送りは年中行事としてではなく、虫害が出たり疫病が流行したりした時に村々で行われていた可能性もあると考えられる。1600年代の記録では僧侶による祈祷の形態が見られたが、1700年代中頃には村々では灯籠を掲げ、鉦を鳴らして村を練り歩く風流行列の形態が見られる様になった。

「牧の朝露」、『外浜奇勝』では、下北地方と西北地方という都市部から離れた農村のねぶたながしと虫送りのことが描かれていた。それによると、1700年代末には津軽地方の広い範囲にねぶたながしの行事が見られ、それが7月7日の七夕にかけての年中行事となっていた。同様に虫送りも年中行事として行われるようになっていたと考えられる。形態も風流

行列が一般的になり、灯籠の他に虫形や人形を作って掲げるようになった。年中行事として執り行われるにしたがって、行事の意味の中に虫害や疫病と行った悪疫を村から送る呪術的要素だけでなく、風流行列を楽しむ娯楽的要素が見られる様になる。お囃子の楽器が増えて賑やかに打ち鳴らすようになり、行列も厳かに歩くのではなく舞ったり戯けたりする人々が現れてくる。

1800年代中頃には、津軽の広い範囲で虫送りやボウノカミ送りが年中行事として行われ、娯楽的要素が強くなっていった。浅虫、一丁田二本松、高屋の風流行列には傘鉾、旗の他にも鑓、弓、鉄砲長柄挟み箱、長刀などの武家の道具や、猿田彦、馬上山伏、殿様などの仮装が加えられ、様々な趣向がこらされるようになっていく。これは、当時の弘前藩内で最大の例祭だった「弘前八幡宮例祭」の風流行列が強く影響し、様々な仮装が取り入れられるようになったのではないと思われる。その背景には、「一丁田二本木にて色々出候に付きまけぬと言う訳やら」³⁹とあったように、隣の町や村には負けたくないとする気持ちや、隣の行列よりも派手で見栄えのする行列を出そうとする競争意識があり、年々趣向をこらすようになる中で、荒馬が加えられ、それが津軽地方全域に伝わっていった可能性もあろう。

また、1855年の浅虫のボウノカミ送りには見られなかった荒馬が、翌年1856年の一丁田・高屋の虫祭には描かれていた。1年の差があるので、1856年には浅虫のボウノカミ送りにも取り入れられる可能性はある。但し、一丁田・高屋は旧岩木町内の地域で、弘前のすぐ隣の町であったため、一丁田・高屋周辺地域から荒馬は広がった可能性も残る。また『山一 金木屋又三郎日記』の執筆者が造り酒屋を営んでいたりと、商人の多い町であったことから、経済的にも豊かな地域であったために虫祭の行列の派手さを競い合うことが可能になったことも考えられる。

第四節 小括

津軽地方の伝わる荒馬の起源について、先行研究の検討から、津軽の南津軽地方に伝承されていたボウノカミ送りの行列に見られた荒馬が、同地方や西南地方の虫送りに習合する中で虫送りの行列でも踊られるようになり、その後上磯地方ではねぶたの中でも荒馬が踊られる様になった可能性はあるものの、それらを断定するまでには文献史料に基づく調査では限界がある。

但し、年代記から、虫送りやボウノカミ送りの行事は、1600年代までは虫害や疫病が流行した時に村々で行われ、僧侶による祈祷が見られたということは同時代史料より断定可

³⁹ 同上、242頁。

能である。1700 年中頃になると、村々で、灯籠を掲げや鉦を鳴らしながら風流行列をする形態が見られるようになった。1700 年末頃には、下北地方や西北地方において、灯籠を掲げて行列をするねぶたながしや人や虫の形代を掲げて行列をする虫送りが、7 月 7 日の七夕にかけての年中行事として行われるようになった。またそれらの行事には、虫害や疫病を村から送りだす呪術的要素だけでなく、風流行列を楽しむ娯楽的要素が加わっている。1800 年代中期の弘前周辺の地域では、それらの行列の内容を隣の町や村と競い合うようになった可能性もある。より派手な演出をしようとする中で荒馬が取り入れられ、次第に津軽全域に広がっていった可能性もあろう。

本研究では、現段階で江戸時代後期から明治・大正時代の頃の荒馬に関わる習俗の記録が残っている史料に限定した。津軽の中では弘前周辺地域が荒馬の発祥と考えられるが、そこに荒馬がどこからどのように伝わったのか、その地理的ルートについてはなおも不明である。そのためには、秋田県や岩手県の駒踊に関わる史料と突き合わせ、更なる検証を行うことが必要であり、今後の課題である。本稿では少なくとも藩政時代から残されている日記・紀行文から提示できる史実を整理することで、まずは以上の結論を得た。これらの文献史料に残された記録を踏まえながら、様々な地域において踊り継がれている荒馬に関連する種々の踊りの形態進化・習合・枝分かれを含む民俗舞踊の拡がりや、その過程においてそれぞれの地域の民衆が何を受容し残してきたのかを考察することで、面として広がる荒馬の価値や意味を検討していきたいと考える。

—以上の第一章は『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 143 巻所収論文に基づく—
沼倉学「津軽の荒馬の起源についての一考察：江戸期の日記・紀行文の記述に着目して」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 143 巻、2023 年、1-15 頁。

第二章 津軽の荒馬の比較研究

第一節 本章の目的と研究方法

前章では、津軽の荒馬について歴史的考察を行った。本章では民俗学的なアプローチによって、荒馬の広がりや変化について迫りたい。ところで、可変的かつ流動的な文化的総体としての荒馬の変化に着目することは、いかなる学術的意義を伴うのか。

民俗芸能の分布について、植木は、一定の地域に集中して分布し、それぞれに一つの圏域をなし、さらに周囲のものと連なってより大きな圏域を形成するとしている。そして、その圏域毎に典型となる芸能を抽出して比較検討することで、その民俗芸能の歴史的変遷を辿り、民俗芸能の時代性を追究し、相対的年代を明らかにする編年的考察が可能になるだろうと述べている¹。

本研究の対象とする荒馬も、地域によって異なった荒馬が伝承され、植木のいう圏域が形成されている。植木が指摘するように、荒馬の分布を面として捉えて比較分析をする視点は、荒馬の伝播の道筋やその年代を明らかにする可能性を広げるものであろう。

そこで本研究では、津軽の風土、政治経済のもとで馬と人との生活交流を通じて、様々な様式を派生させながら、津軽の広範囲に伝播し、時代の趨勢とともに今なお変化し続ける民俗芸能である荒馬の分布と地域毎の芸態の特徴からその圏域を措定し、その典型となる荒馬の比較検討から、荒馬の類型化を図ることを目的とする。

研究方法としては、まず、荒馬の分布図を作成し、各地域に伝わる荒馬を構成する個々の下位体系の特徴をつぶさに抽出し、それらの拡がりに基づく圏域を示す。その上で、各圏域において継続性に信頼が持てる荒馬、つまり今も地域の年中行事や祭りとして実施され、フィールドワーク調査が実施可能だったものを典型として抽出し、比較分析を試みる。

なお、荒馬の分布状況については、主に過去4回行われた青森県全域を対象とした民俗芸能調査の結果を主な資料として分布図を作成した。それに加え、同じく民俗芸能調査報告書の詳細報告や伝承されている市町村の史誌の記述内容と突き合わせ、さらに筆者自身が2018年6月から8月にかけて行ったフィールドワークの結果を加えて考察を行うこととする。

¹ 植木行宣「民俗芸能分布圏試論―丹後における風流踊をめぐって―」植木行宣・樋口昭編『民俗文化分布圏論』名著出版：東京、1993、11-36頁。

第二節 荒馬の分布と圏域

表2 主な荒馬と基盤となる年中行事

番号	民俗芸能名	所在地（現在の住所）	基盤となる年中行事
①	八幡崎の荒馬	平川市八幡崎	ボウノカミ送り
②	田舎館の荒馬	南津軽郡田舎館村田舎館	ボウノカミ送り
③	柏木町荒馬踊	平川市柏木町	サナブリ
④	久吉駒踊	平川市碓ヶ関久吉	虫送り
⑤	金木さなぶり荒馬踊	五所川原市金木町	虫送り
⑥	嘉瀬の荒馬	五所川原市金木町嘉瀬	虫送り
⑦	長富の荒馬	五所川原市長富	虫送り
⑧	俵元の荒馬	五所川原市俵元	虫送り
⑨	相内の荒馬	五所川原市相内	虫送り
⑩	中里の荒馬	北津軽郡中泊町中里	虫送り
⑪	牛潟の荒馬	つがる市牛潟町	虫送り
⑫	今別荒馬	東津軽郡今別町今別	ねぶた祭り
⑬	大川平荒馬	東津軽郡今別町大川平	ねぶた祭り
⑭	二股荒馬	東津軽郡今別町大川平二股	ねぶた祭り
⑮	浜名の荒馬	東津軽郡今別町浜名	ねぶた祭り
⑯	鍋田の荒馬	東津軽郡今別町鍋田	ねぶた祭り
⑰	村元の荒馬	東津軽郡今別町村元	ねぶた祭り
⑱	大泊の荒馬	東津軽郡今別町大泊	ねぶた祭り
⑲	野田荒馬	東津軽郡外ヶ浜町平館野田	ねぶた祭り
⑳	増川荒馬	東津軽郡外ヶ浜町三厩増川	ねぶた祭り

4つの民俗芸能調査結果と市町村史誌を基に、筆者が作成。

先に述べた通り、津軽地方の主な荒馬を年中行事との関係を示したものが表2、それを津軽地方の地図にマッピングしたものが図1である。



図1 主な荒馬が伝承される圏域

4つの民俗芸能調査結果と市町村史誌を基に筆者が作成。

表2の作成のために参照した調査資料は、昭和後期から平成に行われた調査結果に基づいている²。したがって、それ以前にはさらに多くの荒馬が伝承されていた可能性がある、しかしながら、図1に示したように、伝承されている地域と年中行事の関係は明確に区分可能であり、荒馬は津軽地方の広い地域に存在しているが、その土地で行われている年中行事の様式に見合う芸態に変化しながら伝承された可能性が考えられる。

具体的には、津軽の荒馬は、次の三つの圏域に分類できる。

一つ目は表2に示した①から④が伝承される南津軽地方と呼ばれる圏域である。現在の田舎館村と平川市にかけての地域にあたる。この地域ではボウノカミ送りを中心に、それらを含むサナブリ³の行事の中で荒馬が踊られている。

² 表1作成のために参考にした調査は、1966、67年に行われた民俗総合調査（報告書：和歌森、1970、以下、「1966調査」）、1985年に行われた青森県の民俗芸能調査（報告書：青森県教育庁文化課、1986、以下、「1985調査」）、1994、95年に行われた青森県民俗芸能緊急調査（報告書：青森県教育委員会、1996、以下、「1994調査」）、2014年に行われた青森県津軽地方の虫送り調査（報告書：文化庁文化財部伝統文化課、2015、以下、「2014調査」）の四つである。加えて、田舎館村誌（田舎館村、1999）も参考にした。

³ サナブリ・さなぶり（早苗振）とは、田植え終了後の祝のことで、サオリ、またはソウリに対する言葉

二つ目は⑤から⑪が伝承される北津軽地方と呼ばれる圏域である。岩木川の中流域から下流域、現在の五所川原市、つがる市、中泊町にかけての地域で、この地域では虫送りの中で荒馬が踊られている。

三つ目は⑫から⑳が伝承される上磯（かみそ）地方と呼ばれる圏域である。上磯は東津軽地方のうち陸奥湾に沿って西側の外ヶ浜町、今別町付近を指し、この地域ではねぶた祭りの中で荒馬が踊られている。

これら圏域の典型として、南津軽地方の①八幡崎の荒馬、③柏木町荒馬踊、北津軽地方の⑤金木さなぶり荒馬、⑨相内の荒馬、上磯地方の⑫今別荒馬、⑬大川平荒馬、を抽出する⁴。これらは今現在も地域の年中行事や祭りの中でその姿を見ることができる。また、⑤⑫⑬は民俗芸能としての荒馬が青森県無形民俗文化財に指定され、⑨は虫送りの行事が同じ指定を受けている。①③は平川市無形民俗文化財に指定されている。

第三節 フィールドワーク調査について

筆者は2018年6月から8月にかけて、前節で典型として抽出した六つの荒馬が踊られる年中行事・祭りについてフィールドワーク調査を実施した。フィールドワーク調査の具体的な日付と場所を「表3 フィールドワークの実施日と実施場所」に示した。

表3に示した全6回のフィールドワーク調査では、保存会代表の方や踊り手への聞き取りを行い、記載の神事並びに風流行列を視察し、動画および静止画像による映像記録も残した。その記録を基に、年中行事・祭りの概要、風流行列の構成、作り駒の形状と衣装、お囃子、踊りの特徴と振りについて整理を試みた。映像記録については保存会から提供い

である。サオリは春、田の神が山から降臨すること、サナブリ（サノポリ）は秋仕事を終えて帰られること意味する（西角井編、1958：342-343）。津軽ではサナブリの行事として虫送りやボウノカミ送り、またはそれらが習合した形態での風流行列が行われた。

⁴ 「金木さなぶり荒馬」「今別荒馬」、「大川平荒馬」「柏木荒馬踊」の四つは、既に固有名詞として青森県無形民俗文化財や平川市無形民俗文化財に登録されている呼称である。今別荒馬と大川平荒馬は同じ今別町に伝承され、それらを合わせた名称として「今別町の荒馬」と表されることもある。これに対して相内と八幡崎に伝わる荒馬はその地域内では単に荒馬と呼ばれていて、「相内荒馬」や「八幡崎荒馬」のような固有名詞としての呼称は存在しない。したがって、本研究内では「相内の荒馬」「八幡崎の荒馬」と表記する。（西角井正広編『津軽の民俗文化資料』1958、342-343頁。）

表3 フィールドワークの実施日と実施場所

対象の荒馬	年中行事・祭りの名称	実施日	実施場所
①八幡崎の荒馬	八幡崎疫ノ神送り	7月8日(日)	準備：八幡崎地区農業研修センター 行列：八幡崎市街地～八幡宮
③柏木荒馬踊	※代表への聞き取りと撮影のみ	7月7日(土)	柏木町コミュニティセンター
⑤金木さなぶり荒馬	金木町虫送り	6月16日(土)	準備：金木東部地区コミュニティセンター 行列：金木八幡宮～金木町市街地
⑨相内の荒馬	相内の虫送り	6月9日(土)	準備：相内青年会館 行列：市浦コミュニティセンター～相内市街地～神明宮
⑫今別荒馬	今別ねぶた祭り	8月7日(火)	準備：ねぶた小屋(今別漁港内) 行列：今別診療所～今別市街地～ねぶた小屋
⑬大川平荒馬	大川平ねぶた祭り	8月5日(日)	準備：大川平文化会館 行列：文化会館～大川平市街地～文化会館

ただいたものとフィールドワーク時に自ら撮影したものを活用した。

③の柏木町荒馬踊は、年中行事の中で踊られていない。地域の柏木小学校で伝承活動が行われていたため、小学校での伝承活動に基づいている。

以下に上記六つの荒馬のフィールドワーク調査結果について論じる。

第四節 圏域毎の荒馬の比較検討

第一項 南津軽地方の荒馬

この地域は津軽藩政時代から農業が盛んな地域であったが、他の地方と比べ用水や気候の面で恵まれていたという⁵。また、津軽の最南端にある碓ヶ関は秋田藩との国境で、関所が置かれていた。

この地域には、サナブリの行事としてボウノカミ送りをする地区と虫送りをする地区、またはそれらが習合した様式の地区が混在している。①②の地区はボウノカミ送り、④の地区はかつては虫送りとして行われ、1994 調査では虫送りは行われず不定期開催となっていた。③の地区はサナブリの行事として行われていたが、1994 調査では④と同様に不定期開催となっていた。

また、この地域には、荒馬を意味する複数の名称も混在している。①②は荒馬だが、③はかつて「荒駒(あらこま)」と呼ばれていた。④は「駒踊」の名称を有する。1990 年(平成2 年)1 月1 日発行の『津軽新報』は「伝統芸能荒駒踊り」という見出しで、①②③を紹介

⁵ 尾上町『尾上町誌 通史編』尾上町、1992、114-115、816-821 頁。

している⁶。④は「駒踊」が盛んな秋田や岩手と隣接する地域であるため、隣接する地域に共通する「駒踊」の名称が用いられた可能性も考えられる。いずれにしても、この圏域は荒馬と駒踊が混在する中で、独自の芸態が確立したと考えられる。以下では、この圏域における典型として抽出した①八幡崎の荒馬と③柏木町荒馬踊について詳述する。

(1) 八幡崎の荒馬

八幡崎の荒馬は、7月上旬に行われる「八幡崎疫ノ神（ボウノカミ）送り」の中で踊られる。1655年（明暦元年）の「霊送祭」や1717年（享保2年）の「大祈祷」を起源とする説もあるが、明確な由緒は不明である⁷。藁で作った男女の人形（ボウノカミ）を中心に、様々な役が連なる風流行列を伴っている。筆者が調査に訪れた時の行列の構成は、領主、天狗、崇敬会長、市会議員、藁人形（疫



図2 「八幡崎の荒馬」の行列
2018年7月8日 筆者撮影

ノ神)、幟旗「天下泰平萬民安穩」「風雨順時五穀豊穰」と記す)、奴（挟箱、槍持）、ささら、太刀振り、荒馬、お囃子（笛、太鼓）からなっていた。尾上教育委員会によると、かつてはもっと多くの役があり、山車も曳かれていたという⁸。

作り駒は、楕円の枠に、板状の馬頭の根本を紐で結びつけ、もう片方を衣装の腰紐に結びつける。馬頭は首から頭に掛けて一枚の板から切り出され、鬣（たてがみ）と耳が付けられている。口元に手綱が結ばれ、踊り手はそれを掴んで踊る。馬の枠の周辺には幕布を垂らし、枠の後ろ半分の臀部は布で覆い、「〇に八」が描かれた白い布がもう一枚垂れている。後ろには藁で作った尾が真っ直ぐ伸びるように付けられている。

八幡崎の荒馬は、馬役が2頭並ぶように列を作り、2頭が対になって内側に馬頭を近づけたり、外側に向かって跳ねたり、左右対称の動きで踊りながら行列を進めて行く（図2）。

八幡崎の荒馬は、「神々が天から降りるとき、荒馬に乗って飛来するという観念から」⁹はじまったといわれ、「荒馬」の呼称が具体的な馬の仕草や場面と対応しているわけではない。

この荒馬の動きは、やや中腰の姿勢で、足踏みをしたり片足に乗って地面を踏みしめたり

⁶ 津軽新報社「伝統芸能荒駒踊り」津軽新報社：青森、1990年1月1日、朝刊21面。

⁷ 尾上町教育委員会「八幡崎村疫ノ神退散祭由来考」『古里の歴史民俗資料 八幡崎・西野曾江地区民俗資料調査報告書 第3集』尾上町教育委員会：青森、1981、113-114頁。

⁸ 同上、116頁。

⁹ 同上、120。

しながら、お囃子に合わせた振りを踊って進んで行く。踊りは左右に3回ずつ地面を踏む動作をし、それに合わせて馬頭を上下に振る。そして、隣の馬と馬頭を1回ぶつけ合い、足を切り替えて足踏みをする。ここまでがひとまとまりの振り（以下、「ひと踊り」）で、このひと踊りを繰り返す。お囃子に合わせて行列全体の行進が始まれば踊りも始まり、行進が止まれば踊りも止まる。お囃子が続く限り繰り返される振りの構成になっている。

（２） 柏木町荒馬踊

柏木町荒馬踊は、かつては青年団を中心にサナブリの行事として行われ、現在は保存会が地域の小学校と連携し、柏木小学校の子どもたちによって学校や地域の行事で踊られている。保存会から提供いただいた資料によると、「南部藩第二三代の南部安信が、天文二年（一五三三）、津軽大光寺を討



図3 「柏木町荒馬踊」の行列の様子
2018年1月14日撮影 保存会提供の資料より

ち滅ぼしたときに、南部から津軽へ伝えられたもの」¹⁰が由緒と伝えられている。また、同じく保存会から提供いただいた映像資料によると、柏木町荒馬踊の行列の構成は、音頭取り、太刀振り、ササラ、荒馬、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）から成る¹¹。

作り駒は、楕円の枠に立体的な馬頭が付いている。馬頭には円筒形の首があり、細長い鬣と首付近に鈴が付いている。枠には裏地付きの装飾が施された幕布と麻紐で作られた尻尾が取り付けられている。八幡崎の作り駒の様に臀部を覆う布や紋の入った布はない。

この荒馬も、馬役が2頭並ぶように列を作り、円筒形の首を持って踊る。2頭が対になり、左右が入れ替わったり、後退、前進を繰り返したりしつつ行列を進めて行く。こうした隊列、入れ替わり、後退、前進の所作が意味するものは不明である（図3）。

この荒馬の動きも中腰の姿勢で、お囃子に合わせ振りを伴いつつ、踊り進んで行く。踊りは左右に3回ずつ地面を踏む動作をし、それに合わせて馬頭を左右に振る。そして、足踏みをしながらお互い向きあり、次のフレーズで左右を入れ替える。その後また前を向いて行進していく。これがひと踊りの振りで、八幡崎の荒馬と同様、荒馬単体としての始まりや終わりがあわけではなく、お囃子が続く限り繰り返される振りの構成になっている。

¹⁰ 柏木町荒馬保存会「柏木町荒馬踊り」柏木町荒馬保存会提供資料、作成年不明、1頁。

¹¹ 柏木町荒馬保存会『ひらかわ伝統芸能フェスティバル 柏木町荒馬踊』柏木町荒馬保存会提供映像資料、2018。

第2項 北津軽地方の荒馬

この地域は津軽藩政時代に新田開発が行われ、その頃に多くの村ができた¹²。虫送りが盛んに行われて来たのはこういった歴史的背景と関係している。

この地域では、サナブリの行事として虫送りが行われる。風流行列を構成する主要な要素は「ムシ」と呼ばれる藁製の蛇体や龍体で、それに附随する馬を付ける踊りはどの地区であっても荒馬と呼ばれている。以下、この地域の典型と考えられる⑤金木さなぶり荒馬と、⑨相内の荒馬について詳述する。

(1) 金木さなぶり荒馬

金木さなぶり荒馬は、6月中旬に行われる虫送りの中で踊られる。かつて新田開発が進められ、農村の虫祭も賑やかになってきた頃に、津軽四代藩主津軽信政公が金木村の視察に訪れ、その時のエピソードを虫送りの荒馬踊りに取り入れたという由緒譚が残っている¹³。金木さなぶり



図4 「金木さなぶり荒馬」の「橋渡りの英姿」の場面
2018年6月16日 筆者撮影

荒馬の行列の構成は、巫女、太刀振り、オガシコ（道化）、獅子踊、荒馬（馬役1馬と人引役2人）、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）から成る。元々別々に行われていた太刀振り、獅子踊、荒馬を、1970年頃に統合して新たな芸態をつくり出したと言われ¹⁴、近年になって行列に巫女が加わったそうである。しかし、虫送りにつきものであるムシ、すなわち、藁製の蛇体や龍体は伴っていない。

作り駒は、やや小さい楕円の枠に、木製の馬頭と藁製の尻尾が付いているが、幕布はない。馬頭は立体的で、円筒形の首に鬣のあるやや大きめの頭が付けられている。

この荒馬は馬役1馬と人引役2人が3人1組で踊る。3人とも全て男性である。金木さなぶり荒馬は「殿様の騎馬」を表現している。これは、津軽藩四代藩主信政公が民情視察で金木村を訪れた際に、村外れの丸木橋を馬に乗ったまま颯爽と渡ったという「橋渡りの英姿」を舞踊化したものとされ¹⁵、実際の踊りでも丸木橋の模型を跳び越す場面が演じられる（図4）。

踊りは、中腰の姿勢のまま、金木の馬役は手綱を持った手で馬頭を上下左右に振り、馬を

¹² 高橋秀夫「第4章 近世の津軽」和歌森太郎編『津軽の民俗』吉川弘文館：東京、1970、41-55頁。

¹³ 金木郷土史編纂委員会『金木郷土史』金木町役場：青森、1976、673-674頁。

¹⁴ 大石泰夫「二 外ヶ浜の民俗芸能」『西浜と外ヶ浜の民俗』青森県：青森、2010、173頁。

¹⁵ 金木郷土史編纂委員会、前掲書、673-674頁。

操っている様に踊る。馬引役はそれに合わせて共に進んで行く。特に振りがまとまったひと踊りはなく、左右の軸足を切り換え地面を1回ずつ踏む動きを伴いながら、ストーリーを演じたり、行列と一緒に進んだりする。

（2） 相内の荒馬

相内の荒馬は、6月第2土曜日に行われる虫送りで踊られる。相内の虫送りは「津軽地方の虫送りの原型」といわれており、藩政時代は「虫祭」と呼ばれ、新田開発が進められた北津軽一帯では特に盛んであったといわれている¹⁶。

相内の虫送りの行列の構成は、大ムシ（ムシ車）、小ムシ（踊り手）、荒馬（馬役1馬と人方2人）、オリダ持ち、太刀振り（青年団、大人、子ども）、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）から成る。オリダ持ちとは道化を演じる者を指し、虫送りを観ている観客におどけたしぐさを見せて、行列を盛りあげる役である。



図5 「相内の荒馬」の行列の様子
2018年6月9日 筆者撮影

作り駒は、正確な楕円ではなく、後ろ側の方が広がっている枠に、立体的な馬頭と黒く太めの尻尾がつき、枠の後ろ側には逆さにした箕をつけることで臀部に丸い膨らみをもたせ、その上を布で覆っている。馬頭には細長く結んだ鬣があり、首はないが、付け根に大きな鈴が付いている。

相内の荒馬は「農耕馬」そのものを表現していると思われる。これについて文献史料に基づく由来譚は残されていない。但し、馬役が行列の途中で動くのを嫌がって止まったり後ずさりをしたり、その場に寝そべったりする場面が見られる。それを馬方が手綱を引いたり、綱で叩く真似をしたりしながら、本物の馬をなだめて操る姿が演じられる（写真4）。こうした馬のしぐさの再演が含まれていることは、農耕馬として、馬と身近な日常を共有していたことの例証を示すものであるかもしれない。

踊りは、ひと踊りのような振りのまとまりはなく、金木さなぶり荒馬と同様に左右の軸足を切り換え、地面を1回ずつ踏む動きをしながら道々を進んで行くが、所々で止まったり、後ずさりしたり、地面に寝転ぶなどして、馬になりきって即興的に踊ったりする。

¹⁶ 五所川原市「相内の虫送り（あいうちのむしおくり）」

<https://www.city.goshogawara.lg.jp/kyouiku/bunka/aiuchimushiokuri.html>（最終閲覧 2024.8.17）。

第三項 上磯地方の荒馬

この地域は津軽海峡や陸奥湾に面する沿岸部で、人々の多くは古くから漁労で生計を立てていた。中心となる今別は津軽藩の「九浦（くうら）」の一つに数えられ、かつては奉行所が置かれ、日本海航路の要所の一つであった¹⁷。

この地域では、ねぶた祭りの中で荒馬が踊られる。ねぶた祭りは津軽海峡を越えて下北半島にも伝わっており、海運によりねぶた文化が伝わったことを意味している。しかし、下北半島のねぶた祭りには荒馬は伝承されていない。以下、この地域の典型と考えられる⑫今別荒馬と、⑬大川平荒馬について詳述する。

（１） 今別荒馬

今別荒馬は、8月上旬のねぶた祭りで踊られる。今別荒馬は、元々はサナブリの行事で踊られていたものが、ねぶた祭りに引き継がれたといわれている¹⁸。

今別のねぶた祭りの行列の構成は、花もらい、荒馬（馬役の男性と手綱取り役の女性）、跳ね人（はねと）、お囃子（太鼓、笛）、ねぶたから成る。花もらいとは、行列を先導しながら、各家々を回って花（ご祝儀）を集める役を指す。花をいただくと、その家の前で厄払いや家内安全を祈願して荒馬を踊る。跳ね人はねぶた祭りを盛り上げる踊り手のことで、馬と手綱取りを囲むように輪になって踊る¹⁹。

作り駒は、楕円形の枠に木製の馬頭と麻などの尻尾を付け、幕布が垂らされている。馬頭は厚みのある板で首から頭を切り出し、鬣と耳が付けられ、口元に手綱が結ばれている。枠の後ろ側の臀部は八幡崎や相内の様に布で覆われていて、相内の様な箕は入っていないが、枠を曲げることで膨らみをつけている。更に四つ菱の紋が入った布が一枚垂れている。

今別荒馬では、馬役の男性と手綱取り役の女性がペアになって踊る（図6）。初め荒馬は手綱取りに引かれておとなしく踊り始めるが、やがて荒れ出し、手綱取りから離れるとますます荒れ狂って踊るようになるといわれていて²⁰、実演もそのように踊られる。



図6 「今別荒馬」の馬と手綱取り
2018年8月7日 筆者撮影

¹⁷ 青森県、2018、314-315 頁。

¹⁸ 今別町『今別町史』今別町：青森、1967、505 頁。

¹⁹ 大石、前掲書、168-171 頁。

²⁰ 今別町、前掲書、505 頁。

今別荒馬の振りは、ひと踊りで構成されている。町の中心部や花をいただいた家の前に荒馬が来ると、合図が出され行進が止まる。次に踊りの合図が出され、そこでひと踊りが披露される。そして、踊り終わると次の場所へ移動し、再び合図が出されて、同様のひと踊りが披露される。この流れがしばらくの間続いて行く。お囃子の節には、町を練り歩く時の「あゆみ（行進）」、ひと踊り踊る時の「踊り」、全ての門付けを終えて集会所等に帰る時の「戻り節（バツタラ）」の3種類がある。

今別荒馬の馬役の振りは四つの動きで構成されている（手綱取りの動きは馬に連動するが、ここでは省略する）。また、今別の場合は、虫送りの荒馬にも見られる1回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作と、ボウノカミ送りの荒馬に見られる3回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作のいずれの動作も含まれている。馬頭を上下に激しく振って踊るのも特徴で、この動作によって、馬の荒々しさが表現されている。

（2）大川平荒馬

大川平荒馬は、今別と同様に8月上旬のねぶた祭りで踊られる。大川平の荒馬の場合もサナブリの行事として行われていた²¹。

大川平のねぶた祭りの行列の構成は、花もらい、太刀振り、荒馬（馬役の男性と手綱取り役の女性）、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）、ねぶたから成る。以前は跳ね人も見られた。

作り駒は、ほぼ今別のものと同じ形で、楕円形の枠に、頭と首を板から切り出した馬頭と麻の尻尾が付けられ、黒い幕布が垂らされている。臀部の膨らみはないが布で覆われていて、三つ星の紋が入っている。

大川平荒馬も、馬役の男性と手綱取り役の女性がペアになって踊る（図7）。初めは手綱取りが綱を持って踊るが、手綱取りから荒馬が離れるとより荒々しく踊るように変化するところも今別荒馬と共通している。大川平荒馬にも今別荒馬と同様のひと踊りがあり、家々の前で合図が出されると行進が止まり、ひと踊りを披露する。お囃子の節は今別同様、「あゆみ（行進）」「踊り」「戻り節（バツタラ）」の3種類がある。

大川平荒馬の馬役の振りは三つの動きで構成されている。今別荒馬と同様に1回踏む動作と3回踏む動作を含むが、3回目の動作の時は軸足の切り換えを行うために両足を使って地面を踏む。今別荒馬のように馬頭を上下に振るのではなく、左右に横振りしながら踊る。



図7 「大川平荒馬」の馬と手綱取り
2018年8月5日 筆者撮影

²¹ 青森県教育委員会、前掲書、230頁。

その際に足の裏を見る様な姿勢を取るため、より低い姿勢が必要とされる。また、こうしたやや腰を落とす低い動作によって地を踏む農耕馬のような力強さを表現しているといわれている。

第五節 荒馬の様式

これまで、荒馬の分布から圏域を措定し、そこに現在も伝承される典型的な荒馬について詳述してきた。これらの下位体系をまとめて比較すると、表 4 に示したように全ての荒馬に共通する様式と、圏域毎に共通する様式があることがわかる。

第一項 全てに共通する様式

全てに共通する様式として、風流行列の中で踊られる風流踊だということがあげられる。そして、その作り駒の形状をあげることができる。どの荒馬も楕円形の枠に馬の首と尻尾が付けられ、その中に体を入れて固定するようになっており、この馬に見立てた装具を上手にさばきながら踊る。

お囃子は太鼓と笛による演奏が共通している。また、どの荒馬も地面を1回踏んだり、3回踏んだり、その場で足踏みをしたりと、「踏み」という動作が重要とされている。踊りの中で地面を踏む動作は、地面の中の邪気を追い払う意味があり²²、「邪気を追い払う」ための所作は、厄災を払う虫送りや病送りの思想とも共通している。

表 4 典型荒馬における要素の比較

		八幡崎の荒馬	柏木町荒馬踊	金木さなぶり荒馬	相内の荒馬	今別荒馬	大川平荒馬
名称	荒馬	●	●	●	●	●	●
	荒駒		(●)				
年中行事	サナブリ		●			(●)	(●)
	ボウノカミ送り	●					
	虫送り			●	●		
	ねぶた祭り					●	●
行列の構成	先導役(深衣振り、東流、花もらいり)	●		●		●	●
	道化役			●	●		
	ボウノカミ	●					
	ムシ			(●)	●		
	ササラ	●	●				
	太刀振り	●	●	●	●		●
お囃子	太鼓	●	●	●	●	●	●
	笛	●	●	●	●	●	●
	手平鉦		●	●	●		●
作り駒	板状の馬頭	●				●	●
	立体的な馬頭		●	●	●		
	首がある	●	●	●		●	●
	鬘	●	●	●	●	●	●
	首に鈴		●		●		
	幕布	●	●			●	●
	臀部の膨らみ				●	●	
	臀部を布で覆う	●			●	●	●
踊りの形態	馬同士が対	●	●				
	手綱取りが2人			●	●		
	手綱取りが1人					●	●
	手綱取りが男性			●	●		
踊りの振り	手綱取りが女性					●	●
	地面を1回踏む			●	●	●	●
	地面を3回踏む	●	●			●	●
	足踏み、その場での振り	●	●			●	●

() 付きは、かつてそうだったといわれる要素

²² 仲井幸二郎・西角井正広・三隅治雄編、前掲書、399 頁。

第二項 圏域毎に共通する特徴と年中行事・祭りとの有機的関連性

(1) 南津軽地方の荒馬

南津軽地方の荒馬は、ボウノカミ送りをはじめサナブリ行事で踊られ、手綱取りが付かず荒馬が独立している。その形態は秋田や岩手の駒踊とも共通するが、柏木町荒馬踊はかつて「荒駒(アラコマ)」と呼ばれており、これらの例は駒踊との関連が深いことを示している。

踊りは3回地面を踏む振りを中心にひと踊りが構成され、お囃子に合わせて繰り返す踊られる。また、行列の中にササラを鳴らして進む役がいることも共通した特徴である。

この圏域の荒馬は、シンプルな振りのパターンを継続して行進している。行列には荒馬以外にも様々な役割があり、荒馬は行列の中の主要な役割の一つを担いつつも、行列全体の中の一つとして位置付けられ踊られている。

(2) 北津軽地方の荒馬

北津軽地方の荒馬は、虫送りで踊られ、1人の馬役に2人の手綱取りが付く。踊りは1回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作から成る。さらに、殿様の騎馬や農耕馬など具体的な場面に即した馬の姿がイメージされ、表現されている。一連の統一された所作から成るひと踊りは見られない。むしろ、その場で即興的に表現されることが共通した特徴である。

手綱取りが付いたり、即興的な踊りが見られたりするということは何を意味するのか、それは、馬と人の関係性ではないだろうか。虫送りは稲作と関係が深い行事である。そして、かつての稲作には労働力としての馬が欠かせなかった。それだけ馬と人の関係は分かちがたく、そのことを荒馬が表現している。

(3) 上磯地方の荒馬

上磯地方の荒馬は、ねぶた祭りで踊られ、馬役の男性と手綱取り役の女性がペアになって踊る。踊りは1回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作と、3回ずつ地面を踏む動作を組み合わせたひと踊りがあり、それを行列が練り歩く際の途中途中で披露される。

男女ペアで踊ったり、ひと踊りがあったりすることは、荒馬が「魅せる踊り」に変化したことを物語っている。ねぶたもその造形美や絵の色彩を楽しむ文化である。それに溶け込んだ荒馬は、単に同じ振りを繰り返すのではなく、振りの組み合わせや、手綱が切れた後の荒々しい踊りへの変化など、観衆を楽しませる芸能へと変化したと推察される。

第六節 小括

本研究は、荒馬の分布と圏域ごとの祭りの形態を整理し、その圏域において典型的であると考えられる芸態にみられた共通点と差異について論じ、荒馬の類型化を図った。この類型化は、複雑に絡み合う、圏域の祭り全体を構成する個々の要素と全体との関係を示すことにつながった。こうした類型化は、民俗舞踊研究における単線的な編年的考察を困難にしてきた理由を少なからず示唆しているように思われる。つまり、影響力のある圏域のある祭りから他の地域の祭りに徐々に広がったと考えるよりも、圏域内に存在している地区ごとの独自の祭りの個々の要素をなしていた舞踊（荒馬）が別の地区に伝わる際、その圏域ないし、地区の祭り全体を支配していた様式に溶け込む形で導入された可能性とその分化を物語っている。それゆえ、以上のことから、祭り全体の伝播を編年史的に再構成することや、踊りの様式から祭り全体が確立する年代を特定することはむしろ困難であり、それよりも、祭り全体を特徴づけるどのような要素が最もその圏域ないし、特定の地区の内部で重視されているかということが歴史的に意味をなし、圏域内の地区の風流を解釈する上で、重要であるということが明らかになったと言える。

—以上の第二章は『比較舞踊研究』第30巻所収論文に基づく—

沼倉学「津軽の民俗芸能『荒馬』の比較研究」『比較舞踊研究』第30巻、2024年、41-52頁。

【資料】フィールドワーク調査結果

全6回のフィールドワーク調査では、保存会代表の方や踊り手への聞き取りを行い、記載の神事並びに風流行列を視察し、調査ノートその他、写真や映像で記録を残した。その記録を基に、年中行事・祭りの概要、風流行列の構成、作り駒の形状と衣装、お囃子、踊りの特徴と振り、について整理を試みた。写真については適宜文中に示した。最後に、文献史料等に記されている起源・由緒を記載した。

①八幡崎の荒馬

【年中行事・祭りの概要】

2018年7月7日（日）8:00～12:00に、八幡崎疫ノ神送りを対象に実施したフィールドワークは以下のようなものであった。保存団体は「八幡崎郷土芸能保存会」で、この保存会は地域に伝わる「八幡崎獅子踊り」など他の民俗芸能も伝承していた。八幡崎疫ノ神送りは、以前は毎年開催されていたが、2018年当時は隔年開催となっていた。八幡崎地区農業研修センターで祭りの準備が行われていた。行列に出る様々な役の衣装の着付けの他、行列終了後の直来（なおらい：宴席）もこのセンターで行われるため、料理の準備もなされていた。準備が整うと、センターから約700m離れた行列の出発地点となる場所へ移動した。出発地点は、八幡崎市街地を通る猿賀ガーデンライン（県道117号線）沿いの場所で、そこから約900m離れた八幡宮までの道を、疫病退散を祈願しながら歩くというものであった。

【風流行列の構成】

行列は、領主1人、保存会長1人（名簿に記載があったが、藁人形役と兼務していた）、天狗1人、崇敬会長1人、市議員1人、藁人形2人、幟旗2人、奴4人、ささら4人、太刀振り10人、ささら3人、荒馬9人、お囃子5人で構成されていた。お囃子は太鼓2人と笛3人から成る（写真1）。彼らはそれぞれの役の装束を身に纏い道具を有する。行列のメインは「疫ノ神」を表す藁人形であり、男女を模した藁人形が掲げられていた。太刀振りも見られた。太刀振りは津軽のボウノカミ送りや虫送りの多くに付随している。ささらは木製の楽器を鳴らしながら歩く役で、横歩きで移動するのが特徴的であった。領主、天狗、疫ノ神、幟旗は男性、奴と太刀振りは女性、ささらと荒馬は男性が担っていた（写真2）。

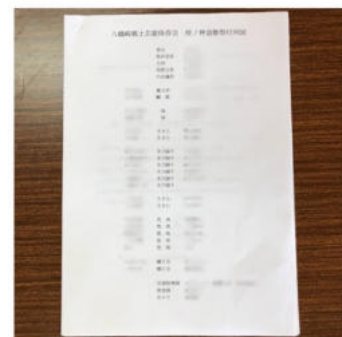


写真1 「八幡崎の荒馬」の行列構成の資料
2018年7月8日 筆者撮影・加工



写真2 「八幡崎疫ノ神送り」の疫ノ神(左)、太刀振りとささら(中央)、荒馬(右)
2018年7月8日 筆者撮影

【作り駒の形状と衣装】

作り駒は、竹で作られた楕円の枠に黄土色や朱色の幕布が垂らされ、乾燥させた植物で作った尻尾が付けられていたもので、多くの地域で見られる荒馬の基本形に準じたものであった。竹枠の臀部は水色の布がかけられ、さらに「八幡崎」の「八」がデザインされたと思われる「〇に八」の模様があしらわれた飾り布が垂らされていた。馬頭は平面的な板状で、顔が描かれ、鬣と手綱がつけられていた。首の根本には前側と後ろ側にはひもが結ばれていて、前側のひもは竹枠に縛って固定され、後ろ側のひもは踊り手の腰紐に結んで固定されていた。この馬頭の付け方は他の荒馬には見られない独自の特徴であった（写真3）。踊り手の衣装は、

上はこの地域の伝統工芸品でもあるこぎん刺しの半纏、下は黒い股引きで、白足袋に草鞋を履き、頭には豆絞りという出で立ちであった。



写真3 「八幡崎の荒馬」の馬頭(左)、馬体(中央)、つけ方(右)
2018年7月8日 筆者撮影

【お囃子】

お囃子は担ぎ桶太鼓が2台、笛が3人の計5人による。行列の最後尾で演奏を行い、奴、ささら、太刀振り、荒馬はこのお囃子の拍子に合わせて歩を進めていた。

お囃子の一回りは「A A' A' B」の5フレーズを基調とし、このまとまりが繰り返し演奏された。笛のフレーズはA、A'、Bの三つ、太鼓のフレーズは笛に対応したAとBの二つであった。メロディーラインはほぼ同じだが、A'の方がメロディ後半の音程が下がってい

たというのが A と A' の違いであった。太鼓のリズムはどちらも同じで、長さは太鼓の拍子 8 拍分であった。B は A の後半部分を少し変化させたようなフレーズで、A の 3/4 の長さ、つまり 6 拍分であった。

【踊りの特長と振り】

八幡崎の荒馬は、馬役が 2 頭並ぶように列を作り、中腰の姿勢で、2 頭が対になって内側に馬頭を近づけたり、外側に向かって跳ねたり、左右対称の動きで踊りながら行列を進めるというものであった。

フレーズ A の下肢の動きは、最初の 3 拍で内側の足（以下、内足）で地面を 3 回踏み、次の 1 拍で外側の足（以下、外足）に乗り換える。次の 3 拍でその外足で地面を 3 回踏み、次の 1 拍でまた内足に乗り換える。これでトータル 8 拍分となり、この動作を 3 回くり返す（A A A'）。この時の上肢の動きは、荒馬の首を持って、地面の踏み込みに合わせて馬体全体を上下に軽く振る。次のフレーズ A' では、最初の 1 拍で乗り換えた内足でさらに内側に 1 歩踏み込んで、それと同時に隣にいる馬の馬頭同士をコツンとぶつけ合う。次の 2 拍で乗り換え無しで一気に外足で地面を 2 回踏み、その後の 5 拍は馬頭を振りながら足踏みをする。最後の B は、A' の最後から続けて馬頭を上下に軽く振りながら 6 拍分をその場で足踏みする。これでひと踊りの振りとなる。この振りを行いながら少しずつ行列を前進させてゆく。

【起源・由緒】

この踊りを荒駒踊り、駒踊りなどと称している地区もあるが、八幡崎村では荒馬踊りと称し、これを演ずる事を荒馬踏みといっている。

神々が天から降るとき、荒馬に乗って飛来するという観念から初ったといわれ、馬産地にある馬の芸能「駒踊り」から来たものではなく、津軽の荒馬踊りはもっと遠慮なものである。

北津軽郡五林平から出た記録によると、約七百年前の南北朝時代に逆り、南北合体の時に荒馬踊りを作ったともある²³。

③ 柏木町荒馬踊

【年中行事・祭りの概要】

²³ 尾上町教育委員会社教課、前掲書、120 頁。

2018年7月6日(土)14:00~16:00に実施したフィールドワーク調査は以下のようなものであった。現在は、この地域においてはボウノカミ送りやサナブリといった年中行事は行われておらず、荒馬はこの地域の柏木小学校で伝承活動が行われている。そのため、筆者は柏木町コミュにセンターに赴き、保存会代表の方から話を伺い、衣装や用具などを見せていただいた。保存会の人々は伝承を目的として柏木小学校において踊りの指導とお囃子の演奏を行っていた。保存会より提供いただいた平成30年に行われた「ひらかわ伝統芸能フェスティバル」を記録した動画資料と、昭和40年・昭和48年の記録映像を編集した動画資料の二つを参考に風流行列の構成、お囃子、踊りの振りの分析を行った。

【風流行列の構成】

行列の構成は、平成30年の映像資料では行列を先導する音頭取り1人、太刀振り12人、ささら6人、荒馬5人、となっていた。お囃子は、太鼓4人、笛5人、手平鉦から成る。このフェスティバルの会場は平川市文化センターという室内ホールで、行列はステージの上で行われていた。そのため、お囃子は行列の後ろについて一緒に練り歩くのではなく、ステージ奥手に横一列に並んで演奏が行われていた。この時の行列では、音頭取りは女兒、太刀振りは女兒、ささらは女兒と男児、荒馬は男児がその役を担っていた。

昭和40年と昭和48年の映像は、音頭取り、太刀振り、ささら、荒馬、手踊り、お囃子が映し出されていた。音頭取りは男性1名であったが、その他の人数は映像からは把握できなかった。昭和40年の行列は総勢70~80人ぐらいの大行列で踊られていた。性別による役割分担は、昭和40年の映像では画像の粗さで正確に判別できなかった。昭和48年の映像では、太刀振りは女性、ささらと荒馬は男性、手踊りは女性と男性のどちらも担っていたように見えた。

【作り駒の形状と衣装】

来訪の際、荒馬の装束・道具は修繕に出されていて、直接見ることはできなかった。したがって、以下の分析は保存会から頂いた詳細な資料に基づく。

作り駒は、基本形の形状と同じで、塩ビ管で作られた楕円の枠に、朱地にたくさん金色の菊が描かれた豪華な幕布が垂らされていた。幕布には紺地に白い大小の水玉が描かれた裏地が付けられていた。臀部を隠す布はなかった。馬頭は首が円筒形になっていて、その先の顔も同じく円筒形の木で作られ、立体感のある馬頭であった。顔には手綱が巻かれ鈴が飾られてい

て、振ると音が鳴った。
尻尾は麻縄をほどいて細くしたもので出来ていた（写真4）。

荒馬役の衣装は写真の様な黒と緑の半纏を羽織り、頭にはねじり鉢巻きをしていた。平成30年の映像資料では、室内での発表だったこともあってか、足元は素足で、足袋や草鞋などは履いていなかった。



写真4 柏木町荒馬踊の馬（左）、馬役の半纏表（右上）、裏（右下）
柏木町荒馬踊保存会提供資料より

【お囃子】

お囃子は担ぎ桶太鼓、笛、手平鉦から成る。太刀振り、ささら、荒馬の全てが、このお囃子の拍子に合わせて、踊りながら歩を進めていた。

お囃子の一回りは「A A B C C' D B' B' B B」の10フレーズを基調とし、このまとまりが繰り返し演奏された。笛のフレーズはA、B、B'、C、C'、Dの六つから成り、太鼓のフレーズは笛にほぼ対応したA、B、C、Dの四つであった。笛のBとB'の違いは、メロディーラインはほぼ同じだが、B'の方がメロディの前半の音程が下がっていた。メロディーラインのうちC'には前半に半音刻みの音程が入るとというのがCとC'の違いであった。

太鼓のフレーズはA、B、C、Dそれぞれの長さが太鼓の拍子4拍分であった。「A A B C B D B B B B」の10フレーズでひとまとまりを構成し、このまとまりが繰り返し演奏された。笛と太鼓のフレーズは基本的に対応しているが、5番目のフレーズは笛がC'に対して太鼓はBのフレーズを演奏していた。

【踊りの特長と振り】

柏木町荒馬踊の荒馬は、2列に隊列を組み、中腰姿勢で地面を踏みしめていく動作と、体を起こし足踏みをする動作から成る。その際、馬頭は常に横に振られている。踊りは6フレーズを基調とする。またお囃子と動きとでは動きの方がやや先行する。しかし、太鼓の1フレーズ4拍に合わせて地面を踏んだり足踏みを行ったり、踊りとお囃子は常に一体のものである。

馬の振りは、まず進行方向に向かって中腰姿勢になり、3拍に合わせて左足で地面を3回踏みしめながら進み、次の1拍で右足に寄せ替える。次の3拍に合わせて右足で地面を3回

踏みしめながら進み、次の1拍で左足に寄せ替える。次の3拍で再び左足で地面を3回踏みしめながら進み、次の1歩で右足に寄せ替えると同時に、体を起こして内側を向いて隣にいた荒馬と向かい合わせになる。次の4拍は向かい合ってその場で足踏みをする。足踏みの時は、上げた足を左右に大きく開く。この時の上肢の動きは、中腰姿勢で地面を踏みしめながら体の正面で馬頭を小さく左右に振る。体を起こして向かい合い足踏みをする時は、上げた足を外側に開く動きと連動させて、馬頭を左右に大きく振る。向き合った次の1フレーズでは再び中腰姿勢になり、初めの3拍で左足で3回地面を踏みしめながら進み、その時に向かい合った馬とすれ違いながら場所を入れ替える。次の1拍で右足に寄せ替え、同時に行列の進行方向に体を向けて、その後は体を起こして4拍分その場で足踏みをする。上肢の動きは、中腰姿勢で入れ替わるころは、馬頭を左右に小さく振り、体を起こしての足踏みは、体の向きに合わせて左右に大きく振る。この6フレーズがひとまとまりの所作となり、次に左右の列を入れ替えて、同ひとまとまりの所作を繰り返す。

【起源・由緒】

この荒駒踊りは、南部藩第二十三代の南部安信が天文二年（西暦1533年）津軽大光寺城を討ち亡ぼした時に南部から津軽へ伝えられ、滝本張摩守の時代には、一大行事として盛行を極めたと言われている。

もともと南部藩の祖先は、甲州南部の郷から移ってきたと言われていることから、荒駒踊りは、甲州では馬術の一種であり、それが時代の推移とともに民衆の生活にとけ込み、舞踊化されたい。それが津軽に伝えられてから、津軽に古来から伝承された「さなぶり荒馬踊り」の形式と混同して、現在みられるような舞踊ができあがったものであろう。

馬の踊りは、各地で民族芸能として伝承されているが、南部の駒踊りは乗馬をあらわしており、津軽では「荒駒」と云って、田の神を感謝するサナブリ祭（田植えの後、豊作を祈願する祭事）に出てくる農耕馬をあらわしているようである。

柏木町の荒駒は、南部の流れをくみながら、それと違った独特の踊りとリズムを持っているのは、津軽の土壌に育ったためであろう。

荒駒は、藩主がお供の武者をひきしたがえて、各村内の民情を視察して廻った行列を現していると言われている。そのためか、古い形式では、槍、挟箱、牽馬等の行列を組んで踊ったものであるが、近年は、次第に簡素化され、駒踊りだけとなってしまっている²⁴。

²⁴ 柏木町荒馬保存会、前掲書、1-2頁。

⑤金木さなぶり荒馬

【年中行事・祭りの概要】

2018年6月16日（日）11：00～16：00に、金木町虫送りを対象に実施したフィールドワークは以下のようなものであった。まず、金木東部地区コミュニティーセンターで、保存団体の「金木さなぶり荒馬保存会」の方から、祭りの話を聞いたり、衣装や道具を見せていただいたりした。この場所は祭りの参加者が着替えをしたり、行列開始前の昼食や祭りが終わってからの直来をしたりする場所であった。その後昼食をいただき、行列開始前の神事を執り行う金木八幡宮に移動した。13：00から神事が執り行われ、その後虫送りの行列がスタートした。神社のすぐ隣は津軽三味線会館、金木観光物産館、太宰治記念館斜陽館などの観光施設が並ぶ場所で、その駐車場で荒馬の見せ場となる「橋渡りの英姿」が披露された。それから約2時間半をかけて流し踊りで市街地を周り、再び斜陽館前に戻ってきた。そこで最後のひと踊りが披露されて、その年の虫送りの行列は終了となった。その後は金木東部地区コミュニティーセンターに戻って直来となった。

【風流行列の構成】

行列は、巫女2人、太刀振り8人、おかしこ（道化）2人、三匹獅子踊り6人、荒馬3人、お囃子17人で構成されていた。お囃子は太鼓5人、笛5人、手平鉦7人から成る。おかしこは大人と子どもが1人ずついて、どちらも猿のお面にほっかむりをして滑稽な表情をつくり、ほぼそろいの衣装を身につけていた。三匹獅子踊りも大人3人、子ども3人の構成であった。大人は本物の獅子頭に正式な衣装を身につけ太鼓も持っていた。それに対して子どもは紙で作った獅子頭に布を垂らした簡易的な面を付けて、太鼓は持たない出で立ちであった（写真5）。荒馬は馬役1人に対して手綱引き（金木では他に「供奴・ともやっこ」ともいう）が2人つく。巫女と太刀振りは女性が担い、荒馬は男性が担っていた。おかしこと三匹獅子踊りは面を被っていたので性別ははっきり分からなかったが、おそらく男性だったと思われる。子どもの獅子踊りは男児が担っていた。



写真5 「金木さなぶり荒馬」の魔女と太刀振り（右）、おかしこと獅子踊り（左）
2018年6月16日 筆者撮影

【作り駒の形状と衣装】

作り駒は、基本形も楕円の枠が小さく、幕布は付けられていなかった。枠は木製で、尻尾は植物の葉を乾燥させたものであった。馬頭は大きく立体的で首も太くしっかりしていた。それを身につける馬役は殿様に扮して、頭には陣笠、白装束に陣羽織を羽織り、足は毛皮の脚絆を付け白足袋に草履を履いていた。馬の幕布はないが、美しい陣羽織が馬の木枠を隠して立派な騎馬の姿であった。それを引く手綱引きは、ほっかむりの上に編笠を被り、津軽地方の伝統工芸品でもあるこぎん刺しの模様が入った半纏を着ていた。足は布製の脚絆を付け白足袋に草履を履いていた。脚絆の素材の違いに役の身分の違いが表れていた（写真6）。



写真6 「金木さなぶり荒馬」の馬（上）
馬役と手綱引きの衣装（下）
2018年6月16日 筆者撮影

【お囃子】

お囃子は担ぎ桶太鼓、笛、手平鉦で演奏された。全ての役がこのお囃子の拍子に合わせて踊りながら歩を進めていた。

お囃子の一回りは「A A' B B' C C' D D' D''」の9フレーズを基調とし、このまとまりが繰り返し演奏された。笛のフレーズはA、A'、B、B'、C、C'、D、D'、D''の九つ、太鼓は1フレーズのみ、手平鉦も太鼓に準じた1フレーズのみであった。

笛のメロディーラインはほぼ同じだが、最後に節回しの違いでA'やD''などいくつかのフレーズに分類された。

太鼓のフレーズは「ドーンコ ドン ドン ドーンコ ドン ドン」の1フレーズで、手平

鉦の1フレーズが重なり、それらに合わせて笛のフレーズが演奏された。

【踊りの特徴と振り】

金木さなぶり荒馬は、殿様役と、その両側に馬頭に結ばれた手綱を持つ2人の手綱引きがつき、3人が一緒にやや中腰姿勢で踊る。しかし、荒馬の見せ場では、体を伸ばし上に高く跳ね上がるように踊ることもある。下肢の動きは殿様と手綱引きに共通していて、太鼓の「ドーンコ ドン ドン」後半の「ドン ドン」で軸足を切り換えて重心を持ち上げる。次の「ドーンコ」で上げていた重心を落として地面を踏みしめる。その後、直ぐに逆足に軸足を切り換えて重心を上げる。次の「ドーンコ」で再び重心を落として地面を踏む。この所作を繰り返す。

殿様役の上肢の動きは、馬頭から出ている手綱の横を持ち、地面を踏み込むタイミングで馬頭を上下に振り続ける。そして、体を左右に動かすのに合わせて馬頭も左右にも振る。「右に○回、左に○回」といった決まった振りはなく、全て即興的に動くのが特徴である。

手綱引きの上肢の動きは、手綱を頭上に掲げたままの姿勢で踊り続ける。体の向きも殿様役同様に即興で、馬との距離を保ちながら踊り続ける。市街地の流し踊りでは、その振りで少しずつ前進していった。

市街地中心部の広場では、金木さなぶり荒馬の見せ場である「橋渡りの英姿」が披露された。これは、津軽藩四代藩主信政公が民情視察で金木村を訪れた際に、村外れの丸木橋を馬に乗ったまま颯爽と渡ったという逸話が舞踊化されたものである。まず、荒馬の3人が出てきて、広場を大きく一周し、その後3人が横に広がる形で位置についた。そこにおかしこが模型の丸木橋を運んで来て殿様役の正面に置いた。荒馬は橋に近づいていき、左右に移動しながら渡るかどうか迷う素振りを見せ、1回目は渡らず大きく跳ねながら後ずさっていった。再び橋に近づいて渡るかどうか躊躇する素振りを見せ、2回目も結局渡らずに後ろに大きく後ずさった。再度荒馬が橋に近づいて迷う素振りを見せ、最後は意を決したように丸木橋を跳び越えた。それを合図に一段と大きくお囃子が打ち鳴らされ、会場からは大きな拍手が沸き起こった。

【起源・由緒】

往時の神は、さの神あるいは“ざんばい、”と呼ばれ、田植えの時それを迎えるが、それを“さくだり、”“ざをろし、”“さんばいおろし、”といい、そして田植えが無事終了して、その状況を確認に見届けてもらい、その年の豊作を、更に神々の約束を重ねて送り返すのが“さのぼり、”“さなぶり、”である。

そして、一時の休暇を人々と共にとることになる。この時、さの神は馬に乗って昇天する

といわれ、田植えの時も、神は馬鋤台が「ヨリシロ」だとされた。また、“さなぶり”の時には馬が一役買ってでるが、それが芸能化して遺わされたのが、古い意味の荒馬踊りといわれ、これに伴うササラ踊りや太刀振り踊りといわれる棒踊りは一種の呪具であり、踊りのとき打ち合わせ振りまわすることは、悪霊退散の民俗であるという。

虫送り

津軽地方に残る荒馬のうち、金木の「さなぶり荒馬」は、かなり古い形態がうかがわれる。この荒馬も、金木の田植えが終わった村祭りの中に加わって来た。村をあげてのさなぶり休みに、藁製蛇体を先頭に、傘ぶくろ、太刀振り、荒馬、獅子踊りの順に、太鼓、笛、手振りがねの鳴物がついて、賑やかに村内を練りまわった後、村外れの林の木に蛇体を投げかけて帰る。こうした“虫送り”、行事は津軽一帯に古くからあったものだが、明治から大正年代にかけて、次第に姿を消していった。しかし、北郡や西郡地方には未だに行われ、“虫送り”、又は、“虫祭り”、といわれて伝え残されている。

金木の荒馬

さなぶり行事と頭については以上のとおりだが、金木地方で現在行われているいわゆる“金木の荒馬”は一種独特なもので、これについては次のように伝えられている。新田開発が進捗するに従い、金木地方の水田の開発が進められ、農村の虫祭りも賑やかになり行事化してきた。その頃、天保年間に、藩主信政公が少数の士卒を連れて民情視察の途次、金木村を訪れ、八幡宮に五穀豊穰と武運長久の御祈願をされた。突然のことなので、神主笹木氏（現笹木正巳氏先祖）並びに庄屋角田氏（現角田信一郎先祖）とがはからい、村人を挙げて迎え、帰りには礼をつくして村端れまで見送りをした。当時、赤坂（若松町の入口）手前の橋は、丸太橋のいたって粗雑なものであったが、藩主は馬上豊かに馬の手綱をとり、供奴二人が左右に手綱をのばして、一回二回と後ろに下がり右にひき、左に廻り、三回目に英姿さっそうとして橋を渡れたとのことである。始めて見た藩主の見事な英姿に感激した村人たちは、村の誉れとして永久に残すべく“虫送り”の荒馬踊りに取り入れるようになったとされている。

虫送りの警護

金木の荒馬踊りは、以上のように藩主の橋渡りの勇壮な状況が主となるように変わってきた。後の藩主が当地方の民情視察で金木村に来たとき、庄屋は神主と共に、さきの藩主の橋渡りの英姿を賞め讃え、今まで農耕を表現してきた「荒馬踊り」を「橋渡りの英姿」の踊りとしてい旨を恐る恐る言上したところ、藩主は非常に気をよくして許され、同行の絵師に馬の百態を六尺屏風に描かせて与えたと伝えられている。後日、庄屋角田、神主笹木の両人が弘前城に招かれたとき、藩主から「金木の荒馬は先公妙心院殿の御姿なれば、無礼させるな」として、警護の衣裳五着賜ったという。以後その衣裳を着用して、虫送りには警護役として

付き添うことになった。警護の衣裳は、現在一着残っている²⁵。

⑨相内の荒馬

【年中行事・祭りの概要】

2018年6月9日（日）8：00～17：00に相内の虫送りを対象に実施フィールドワークは以下のようなものであった。市浦小学校側の青年会館に伺うと、保存団体の「相内青年団」を中心に地域の方々によってムシ作りが始まっていて、筆者が到着した時は蛇体の心棒に藁を巻いて針金で止める作業が行われていた。その後大ムシと小ムシの2体が作成され、大ムシができあがると、大きなリアカーのようなムシ車に括りつけられた（写真7）。ムシ作りと並行して、荒馬役の方々は馬の準備と調整を行っていた。



写真7 「相内の荒馬」のムシ作り（左）、完成したムシ車（右）
2018年6月9日 筆者撮影

午前中の作業が終わると、1度解散して自宅で食事や着替えを済ませて、出発地点である市浦コミュニティセンターに集合した。スタート前の神事無く、参加者による記念撮影が行われた後、13：00にお囃子の演奏がはじまり、虫送りの行列がスタートした。荒馬がステップを踏みながら進み出し、その後ろの太刀振りがリーダーの合図で踊り始めた。行列には長方形のお盆を担いだ「オリダ持ち」という道化役がいて、お盆の中にはもち米粉を練って作った小さいシトギ餅がたくさん並べてあった。行列が始まるとオリダ持ちは祭りの参加者や行列を見ている人の顔にシトギ餅を塗りつけていった。この行為は無病息災などを祈願する縁起ものと考えられ、みんな嫌がらずオリダ持ちにシトギ餅を塗られていた。

路地を進んで行くとお囃子に誘われるように沿道に人が出て来た。お花と呼ばれるご祝儀を出す家もあり、それをいただくと家の前で無病息災などを祈願して荒馬や太刀振りがひと

²⁵ 金木郷土史編纂委員会、前掲書、672-674頁。



写真8 「相内の虫送り」の行列（左）手前からオリダ持ち、小ムシ、
荒馬、太刀振り、お囃子 軒先での振る舞い（右）
2018年6月9日 筆者撮影

踊りした。庭先に飲み物や食べ物を用意している家もあり、そこではそれらをいただき、そのお礼にひと踊りしていった（写真8）。地域の老人ホームでは、入居者の方々が介護士さんに付き添われて庭先に出てきて、荒馬や太刀振りの踊りを楽しんでいた。中には一緒に太刀振りを踊る人もいて、この祭りや踊りが地域の人々の心とからだに強く刻まれていることを感じる光景であった。かくして集落を隅々まで周り、15：30 頃に市街地中心部に到着した。ここで改めてセレモニーが執り行われ、市長の挨拶などがあり、小中学生の太刀振りが合流して行列がさらに大きくなった。

行列のクライマックスは集落の東側を流れる相内川にかかる橋で、この橋を渡った先の水田では、荒馬や太刀振りの何人か田んぼの泥の中に飛び込んでいった。荒馬が飛び込んだ田んぼは豊作になるという言い伝えもあり、その様子に観客も大いに歓声を上げていた。それが終わるとさらに先にある神明宮に集まり、ムシ車につけていた大ムシを外して神社のある高台を登り、途中の木に大ムシを括りつけた。この大ムシはこの集落内に疫病や虫害などの厄災が入って来ないように守り神として 1 年間ここで集落を見守っている。その設置が終わると、みんなで境内に上がり、最後のひと踊りを行った（写真9）。

【風流行列の構成】



写真9 荒馬の最後の抵抗（左）、大ムシの設置（右）
2018年6月9日 筆者撮影

行列は、大ムシを乗せたムシ車、小ムシを持った踊り手（以下、小ムシ持ち）1人、オリダ持ち（道化）1人、荒馬は馬役1人と口取り2人の計3人、太刀振り約30人、お囃子は約10人という構成であった。お囃子は等身大近くある大きな締太鼓3人、担ぎ桶太鼓5～7人、笛人5～7、手平鉦2～3人であった。小ムシ持ち、オリダ持ち、荒馬はみんな男性で、太刀振りやお囃子には男性も女性もいた。

【作り駒の形状と衣装】

作り駒は基本形ではあるが、馬頭側の丸みが小さく臀部側が大きい卵型の楕円で、臀部には箕がつけられていてそれを隠すように幕布が垂らされ、実際の馬の様に膨らみが表現されて



写真10 「相内の荒馬」の馬（左）、馬の裏側
2018年6月9日 筆者撮影

いる。馬頭は大きく立体的で、頭部に編んだ鬃がつけられている。首は無く馬頭の首元が木枠に直接通され、顔の下に大きな鈴がつけられていた（写真10）。荒馬の衣装は、馬役も口取りも同じく黒い半纏に黒い股引きを履き、黄色い腰紐を結び、白足袋に草鞋を履いていた。頭にはトコマンポという花がつけられた編笠を被っていた。それらの衣装は基本的に行列のみんなに共通していて、さらに太刀振りと小ムシ持ちは赤い襷をしていた。オリダ持ちはトコマンポの代わりにほっかむりを被っていた。

【お囃子】

お囃子は締太鼓、笛、手平鉦で演奏を行っていた。全ての役はこのお囃子の拍子に合わせて

踊りながら歩を進めていた。

お囃子の一回りは「A、B、B'、C、A、A'、A"、D」の8フレーズを基調とし、このまどまりが繰り返し演奏された。笛のフレーズはA、A'、A"、B、B'、C、Dの七つ、太鼓は1フレーズのみ、手平鉦も太鼓に準じた1フレーズのみであった。

笛のフレーズは、メロディーラインはほぼ同じでも最後の節回しの違いでB'やA"など七つに分類された。

太鼓のフレーズは「ドーンコ ドン ドン ドーンコ ドン ドン」の1フレーズで、手平鉦もそれに対応した1フレーズが重なり、それらに合わせて笛のフレーズが演奏された。

【踊りの特徴と振り】

相内の荒馬は、馬役とその両側に馬頭に結ばれた手綱を持った2人の口取りが付き、3人が一緒にお囃子に合わせて踊る。荒馬の踊りは大きく2種類に分かれる。一つは行列に合わせて移動する踊りである。そしてもう一つは、時々見せる馬の様子を即興で表現する踊りである。金木さなぶり荒馬と違って、相内の荒馬は人が乗っている騎馬ではなく、馬そのものを表現している。まず、移動の踊りについて説明する。

移動の踊りは、馬を中央にしてその両側に少し距離を取って口取りが並ぶ。馬役も口取りも基本的に中腰姿勢で踊る。下肢の動きは馬役と手綱引きに共通していて、太鼓の「ドーンコ ドン ドン」後半の「ドン ドン」で軸足を切り換えて重心を持ち上げる。この重心の持ち上げは僅かに踵が浮く程度である。そして、次の「ドーンコ」で重心を落として地面を踏む。その後、直ぐに逆足に軸足を切り換えて、重心を僅かに持ち上げ、次の「ドーンコ」で地面を踏む。見た目は軸足の逆足を膝や鼠径部を曲げて引き上げているだけのように見えるが、重心は太鼓の拍に合わせて上下していることがわかる。この繰り返しである。

上肢の動きは馬役と口取りで違っている。馬役は下肢の踏みに合わせ馬頭を上下左右に振って馬の動きを表現する。口取りも基本的には下肢の踏みに合わせて上肢も上下するが、2人の口取りのうち一方が手綱をたぐり寄せ、もう一方はたぐっていた手綱をゆるめていく。すると荒馬がたぐり寄せる側の口取りに寄っていき、ゆるめている方から離れていく。馬が片方の口取りに近づくと、今度は反対側の口取りが手綱をたぐり寄せ、反対側が手綱をゆるめていく。すると、今度は反対側の口取りに馬が寄って行く。こうして、馬は手綱取りの間を左右に移動しながら3人で前に進んで行く。

相内の荒馬の1番の特徴は時々見られる馬の即興表現である。馬は時々歩くのをやめ、前に進むのを嫌がったり、その場に座り込んだり寝転んだりする。そうすると、口取りは手綱を強く引いて前に進ませようとしたり、寝転んでいる時は手綱の端をムチのようにして馬を叩

く真似をして、立ち上がらせようとしたりする。まさに作業を嫌がっている馬をなだめすかしながら働かせようとする馬と人のやり取りを表現している。

このような場面が時々見られるのだが、最後のクライマックスの相内川にかかる橋の上では1番激しい馬と人のやりとりが行われる。その背景には次の様な謂われがある。かつては、この橋を越えた先に屠畜場があり、食用の家畜や農耕の役目を終えた家畜がそこで屠殺された。だから馬もこの橋を渡ると自分が屠殺されることを知っていて、橋の前で1番の抵抗を見せたという。相内の荒馬のクライマックスは馬と人の命のやりとりの場面を表現している(写真9)。

【起源・由緒】

相内の虫送りは、津軽地方の原型といわれ長い歴史があると伝えられている。津軽地方には各地区で、昔からたくさんの虫送りが行われていたといわれ、今では虫送りを行っている地域は数えるくらいしかないのが現状である。

昔は、市浦地区でも「太田の虫送り」「桂川の虫送り」が行われて、各地区で賑わったものだが、祭りの担い手不足などが原因で「桂川の虫送り」は平成12年ころまでを最後に行われていない。「太田の虫送り」も現在は行われていない。※両地区とも虫送りの名残で、現在も村はずれには虫人形が納められている。

相内の虫送りは、田植が終わった後に五穀(米・麦・あわ・きび・豆)豊穰、無病息災、家内安全を祈願して相内地区一円で行われる。

なぜ、虫送りを行うかという、農薬などがなかった時代には、農作物にたくさんの病害虫が発生し、その病害虫に対する決定的な駆除法がないので、神様の力に頼り、その年の農作物の豊作を願い、害虫を追い払う願いを込めて行ってきたのが「虫送り」である。また、昔は、はやり病などを地域に流行させないためにも、虫送りに願いを込めて地域一丸となって無病息災を祈願する意味合いもあったようだ。太刀振りの最初の動作は作物から害虫を追い払う、追い出すという意味合いがあったといわれる。虫送りは、「荒馬」も祭を盛り上げる。馬は農家の宝であり、昔から唯一の農作業の原動力あり、特に田畑の作業には欠くことができないものであった。現在は、農業機械が普及し、馬で農作業をする農家はなくなったが、昔は馬をととても大事にし、虫送りの日は、真新しい背掛、腹掛をさせて一日ゆっくりと休養させた。

虫は、害虫が入ってこないよう、また害虫が発生したら、ひとのみにして退治してくれるように、悪い病気が流行したら、吹っ飛ばすようにとの願いを込めて村の鎮守様(神明宮)の大木に納められ、次の年の虫送りまで村を見守る。

また、虫送りは「さなぶり」ともいう。大体の意味は「田植えがすんだ祝い」で、漢字で書くと「早苗振」「早苗饗」などが当てられる。「早苗振」は、水面に稲(早苗)を投げ入れるという意味からきていると言われ、「早苗饗」は、田植えの喜びと豊作を祈ってみんなが集まって祝いの会を開くという意味があるようだ。田植が終わった喜びと、慰労を兼ねて、その年の豊作を祈願して行うのが「虫送り」で、いわば、お百姓さん(農家)の祭とも言える²⁶。

⑫今別荒馬

【年中行事・祭りの概要】

2018年8月7日(火)8:30~14:00に今別荒馬が踊られる今別ねぶた祭りを対象に実施されたフィールドワークは以下のようなものであった。主催は今別荒馬を保存している「今別荒馬保存会」と関連の深い「今別ねぶた実行委員会」であった。今別地区の中心部にある今別診療所が集合場所で、保存会や実行委員のメンバーの他、東京や仙台などの全国各地から今別荒馬ファンが数多く集まり、一緒に荒馬踊りの列に入って祭りを盛り上げていた。9:00の祭り開始時間になると、お囃子が打ち鳴らされ、まずはそこでひと踊りが披露され、そこからねぶた祭り運行(行列のことを指す)がスタートした。運行の先頭にいる「花もらい」が各家を回ってお花(ご祝儀)をいただいと、その家の前や路地などで合図が出され、そこで荒馬が披露される。荒馬の列の後ろにはハネト(跳ね人)が続き、「ラッセラー、ラッセラー」の掛け声で囃しながら、踊りを盛り上げる。その後ろにお囃子、そしてねぶたが続く。ねぶたは地元で唯一のねぶた師が作製したものであった(写真11)。役場、中山荘(老人ホーム)、今別高校などの主要施設を回り、市街地を運行しながら、13:30頃にゴール地点となる今別港に建てられたねぶた小屋に到着した。そこでこの日1番激しい踊りが3回ほど繰り返し踊られた。その後、昼食を兼ねた慰労会が行われた。

【風流行列の構成】

行列は、運行責任者1人、花もらい数人、荒馬(男性の馬役と女性の手綱取り)8組、ハネト約30人(そのうち約20人は地元以外から来たと思われる幼稚園の園児と先生であった)、お囃子は大きな締太鼓四つ(リアカーに二つずつ積んである)に対して打ち手が約10人(交代しながら打つ)、担ぎ桶太鼓1人、笛も約10人、ねぶた曳きが2人という構成であった。運行責任者とねぶた曳きは男性が担い、荒馬は男性と女性がペアを組んで踊り、花もらい、ハ

²⁶ 美和平三『相内の虫送りについて』相内青年団提供資料、2018、2-3頁。

ネット、お囃子には男性も女性もいた。



図11 左：人形ねぶた、右：「今別荒馬」の行列（右から荒馬、ハネト、お囃子）
2018年8月7日 筆者撮影

【作り駒の形状と衣装】

作り駒の形は基本形で、塩ビ管で作った枠に白布を巻き、そこに布幕を垂らしている。臀部は針金で膨らみを作り、その上に布をかけて臀部の丸みを表現している。臀部の布には四つ菱の家紋が描かれている。馬頭はやや大きめの板状で、鬣がつけられていた。



図12 「今別荒馬」の馬
2018年8月7日 筆者撮影

荒馬の馬役の衣装は、黒い半纏に白い股引き、足元は白足袋に白い鼻緒の草履を履いている。頭には豆絞りを巻き、後ろに白扇を刺している。手綱取りは黒い半纏に、下はお腰というピンクの布を巻き、半纏の上から帯締めで止める。その上に黄色い布を巻き、ピンクの襷をかけている。これが保存会の基本的な衣装で、保存会以外の人、馬の場合は黒以外の色の半纏を着たり、下は半ズボンなどを履いたりしている場合もある。手綱取りは浴衣の下には赤やピンクのお腰を巻き、浴衣の裾を少し上げてお腰が見える様に着付けをする場合もある。

【お囃子】

今別荒馬のお囃子は、締太鼓と笛で演奏し、集落を歩いて移動する時に鳴らす「あゆみ」、踊る時に鳴らす「踊り」、集落での運行が全て終わりねぶた小屋に帰る時に鳴らす「バツタラ（もどり節ともいう）」の3種類がある。

「あゆみ」の一回りは、笛が「A、A、B、B、C、C、C'」、太鼓が「A、A、B、A、C、C、D」のそれぞれ7フレーズを基調とし、これを繰り返して演奏する。笛のフレーズはA、B、C、C'の4フレーズ、太鼓はそれにほぼ準じたA、B、C、Dの4フレーズの組み合わせで構成さ

れる。後半の吹き回しの違いで C と C' に分けられる。

「踊り」の一回りは、笛は「A、B、B、C」、太鼓も「A、B、B、C」のそれぞれ4フレーズを基調とし、これを繰り返し演奏する。笛のフレーズはA、B、Cの3フレーズ、太鼓もA、B、Cの3フレーズの組み合わせで構成される。

「バッター」の一回りは、笛は「A、A、B、B」、太鼓も「A、A、B、B」の4フレーズを基調とし、これを繰り返し演奏する。笛はA、Bの2フレーズ、太鼓もA、Bの2フレーズの組み合わせで構成される。

【踊りの特徴と振り】

今別荒馬の最も大きな特徴は、馬役の男性と手綱取りの女性がペアになって踊ることである。始め馬は手綱でつながれているが、途中で手綱取りが綱を離すと馬は一層荒々しく踊ると言われている。また、今別荒馬はいくつかの振りで構成されたひと踊りが決まっていることもその特徴である。これまで見てきた荒馬の様に長時間流して踊るのではなく、移動した場所で、約1分のひと踊りを披露し、また移動して踊りを繰り返す。この後に分析する大川平荒馬とかなり同じ形式のところもあるが、決定的に違うのは、今別荒馬は馬を縦に振って踊ることである。

踊りのお囃子は、4フレーズを基調に繰り返されるが、踊りの振りはそれには対応しておらず、一定の拍が刻まれるお囃子に乗って、いくつかの振りを組み合わせたひと踊りを踊る。

馬のひと踊りは大きく四つの振りの組み合わせで構成される。便宜上「一つ踏み」「三つ踏み」「足踏み」「横振り」と表記し、それぞれ順番にA、C、B、Dと記号を付す。ひと踊りの構成は「B A' B C B A C D A C B」となる。

Aの「一つ踏み」の下肢の動きは、まず左足を軸足にしてやや後方に着き重心を持ち上げる。次に上げた重心を落として地面を1回踏む。直ぐ右足に軸足を切り換えて、やや後方に足を着き再び重心を上げる。重心を落として地面を1回踏む。これを2回繰り返す。上肢は軸足を切り返す時に馬頭を上方に持ち上げ、左足が着いた時に左側の脇腹の辺りに馬頭を持って来る。そして、左足で地面を踏みしめたと同時に、馬頭を左腰にグッと引きつける。次の瞬間に引きつけた馬頭を開放すると、自然に馬頭が上方に上がる。そして右足に軸足を切り換え、右足が着いた時に右側の脇腹辺りに馬頭を持って来る。そして右足で地面を踏みしめたと同時に、馬頭を右腰にグッと引きつける。次の瞬間に馬頭を開放して、再び左側に軸足を移していく。

これが基本となるBだが、最初のB'は軸足を後方ではなく前方に着きながら、手綱取りと一緒に円を描くように回る。

C の「三つ踏み」の下肢の動きは、まず左足を軸足にしてやや前方に着き重心を持ち上げる。次に持ち上げた重心を落としながら僅かに左斜め前の方へ向けて地面を 3 回連続で踏む。直ぐ右足に軸足を切り換えてやや前方に着き重心を持ち上げる。再び重心を落としながら次はやや右斜め前方に向けて地面を 3 回連続で踏む。これを 2 回くり返す。上肢は軸足を切り返す時に馬頭を下からすくい上げるように持ち上げ、左足が着いた時に左肩付近に馬頭を持って来る。そして左足で地面を踏みしめるタイミングで、3 回馬頭を大きく上下に振る。次の瞬間に馬頭を持つ力を解放し、右足に軸足を切り換える時に馬頭を下からすくい上げるように右肩付近に馬頭を持って来る。そして右足で地面を踏みしめるタイミングで、3 回馬頭を大きく上下に振る。これを 2 回くり返す。

B の「足踏み」の下肢の動きは、まず右足を左足の前に交差させて出し地面を 2 回踏む。次に斜め右側に右足左足と進み、着いた左足で上にジャンプして、右足で着地する。上肢は、馬頭から左右に出ている手綱を両手で持って正面で構え、重心の上下に合わせて馬頭を上下に振る。

D の「横振り」の下肢の動きは、まず B の最後は右足軸で立っているの、左回りに一気に後ろを振り返り、左足を前、右膝を地面につけた立ち膝姿勢になる。その姿勢で、上肢の馬頭を横に振るよう、まず左腰脇に引きつけ、次は右腰脇につける。次に立てていた左足に乗ってそのまま半回転して、A の最初の姿勢になる。これらを先に示した構成で踊るとひと流れになる。

手綱取りの振りは馬の振りに対応する A、A'、B、B' の四つの振りで構成される。馬の B に当たる部分は A の振り、馬の D に当たる部分は C' の振りを踊る。「B A' B A B A A B' A A B」となる

A の「一つ踏み」の下肢の動きは、基本的に馬の動きと同じで、左右に軸足を切り換えながら地面を 1 回ずつ踏む。上肢の動きは左軸足を切り換えて設置した時は、やや左側を向いて右手の白扇を腰の前付近で内旋させ、重心が上がるタイミングで右手を外旋させながら白扇を上方に持って行き、地面を踏み込んだ瞬間に外旋させた右手を額の左前辺りにかざして決めを作る。そして、決めた瞬間に返した手首を解放し、次は右軸足に切り換えてやや右側を向いて、右手の扇子は再び腰の前付近で内旋させ、重心が上がるタイミングで右手を外旋させながら白扇を上方に持って行き、地面を踏んだ瞬間に外旋させた右手を額の右前辺りにかざして決めを作る。これを馬が後退するのに合わせて前進しながら行う。最初の A' は馬の手綱を持ち、馬と一緒に円を描くように回る。

B の「足踏み」の下肢の動きは、始めは馬と同様に右足を左足の前に交差させて出し地面を 2 回踏む。次に斜め右側を右足で 2 回踏み、直ぐに軸足を切り換えて左側に重心を移動させ

る。上肢は、2回ずつ左右の地面を右足で踏むのに合わせて、右手に持っている扇子を腰の前付近で内旋させる。

馬がCの「三つ踏み」をする時は斜め前に前進してくるので、手綱取りはAをやや後方に行う。タイミングは、馬が最初の2回地面を踏んだ時に左を踏み、次の1回と切り返しの時に右側を踏む。

馬がDの「横振り」をする時は、Bを左右に2回ずつ踏んだところを1回ずつにして(B')、左右1回ずつ踏んだら直ぐにAの動きに入る。これで先に示した構成で踊るとひと踊りとなる。

【起源・由緒】

今別のネブタ祭りに二頭の荒馬が各戸口で踊り、その後に花笠、赤ジュバンの踊り子はネブタばやしおもしろく、踊りながら続いて町をねり歩く。

今別荒馬は田植えが終わり、田の神が天に昇るとき、農民が神に加護と感謝を祈るため催されます。神送り、サナブリ（早苗饗）の行事として伝わってきました。青森県津軽地方のサナブリはボーの神と呼ばれる男女二体の藁人形を先頭に、太刀振り、傘鉾、サラ、荒馬の順序で、笛、太鼓のはやしに送られて村中をねり歩き、のち鎮守の森の木に藁人形をかけて帰るのである。近年これが簡略され、太刀振りと荒馬になりつつある。

それが今別では荒馬のみとなって、口綱をとる菅笠姿の早乙女にひかれて、荒馬は笛、太鼓のはやしに合わせて踊りだすが、だんだん本性を現して暴れだし、少女が口綱をはなしてからますます荒れ狂う。それをとり巻きながら踊り子は、ネブタばやしにつれて円陣をつくり踊るのである²⁷。

⑬大川平荒馬

【年中行事・祭りの概要】

2018年8月5日（日）10：00～14：00に大川平荒馬が踊られる大川平ねぶた祭りを対象に実施されたフィールドワークは以下のようなものであった。主催は大川平荒馬を保存している「大川平荒馬保存会」であった。大川平地区の中心部にある大川平文化会館で祭りの準備が行われていた。行列に出る人の衣装の着付けの他、行列終了後の直来もこの会館で行われるため、料理の準備もなされていた。大川平荒馬も地元保存会だけではなく、全国から大川平

²⁷ 今別町、前掲書、505頁。

荒馬ファンが数多く集まってくる。名古屋や京都の大学生と大川平の人たちとの交流が始まり、その後卒業生も毎年「ただいま」と言って訪れるため、現在は全国各地から大川平ファンが集い祭りを盛り上げている。この日はあいにくの小雨が降る中であつたが、大勢の荒馬と太刀振りがお囃子の響に合わせて集落を練り歩き、踊りを披露した。運行の進め方は今別荒馬とほぼ同じで、先頭にいる「花もらい」が各家を回ってお花（ご祝儀）をいただき、所々の家の前や路地などで合図が出され、そこで荒馬が披露される。大川平の場合、荒馬の前には太刀振りが並び、棒をぶつけ合いながら踊る。市街地を運行しながら、12：30 頃にゴール地点となる大川平文化会館に戻ってくるとそこで最後の踊りが5回踊られ、それが終わると記念撮影をして会館内に入り、直来が始まった。

【風流行列の構成】

行列は、運行責任者 1 人、花もらい数人、太刀振り 10 数人、荒馬（男性の馬役と女性の口取り）約 40 組、お囃子は大きな締太鼓五つ（リアカーに二つと三つに分けて積んである）に対して打ち手が約 10 人（交代しながら打つ）、笛も約 10 人、ねぶた曳きが 2 人という構成であつた。運行責任者とねぶた曳きは男性が担い、荒馬は男性と女性がペアを組んで踊り、お囃子には男性も女性もいた。



写真13 「大川平荒馬」の行列 左：お囃子、扇ねぶた 右：荒馬、太刀振り、花もらい、運行責任者
2018年8月5日 筆者撮影

【作り駒の形状と衣装】

作り駒の形は基本形で、塩ビ管で作った枠に黒いテープを巻き、そこに黒い布幕を垂らしている。臀部はさらに布がかけられ、そこに塗りつぶされた○が三つ、三角に配置されている紋が描かれているものもあった。馬頭はやや大きめの板状で、鬣がつけられていた。



写真14 「大川平荒馬」の馬
2018年8月5日 筆者撮影

荒馬の馬役の衣装は、黒い半纏に黒い股引き、足元は黒の地下足袋を履いて、全身黒を基調とした衣装である。頭には豆絞りを巻いている。口取りは黒い半纏に、下はお腰という赤い布を巻き、半纏の上から帯締めで止める。その上に黄色い布を巻き、赤い襷をかけている。これが保存会の基本的な衣装で、保存会以外の参加者もほぼ同様の衣装で統一されていた。

【お囃子】

大川平荒馬のお囃子は、締太鼓と笛で演奏し、今別荒馬と同様に、集落を歩いて移動する時に鳴らす「あゆみ」、踊る時に鳴らす「踊り」、集落での運行が全て終わり会館に帰る時に鳴らす「バッターラ（もどり節ともいう）」の3種類がある。以前は手平鉦も加わっていたが、今回は見られなかった。

「あゆみ」一回りは、笛は「A、A、B、A、C、D、D'」、太鼓は「A、A、A、A、B、C、C」のそれぞれ7フレーズを基調とし、これを繰り返し演奏する。笛のフレーズはA、B、C、D、D'の5フレーズ、太鼓はそれに少し準じた A、B、C の4フレーズの組み合わせで構成される。笛は後半の吹き回しの違いでAとA'、DとD'に分けられる。

「踊り」の一回りは、笛は「A、B、B、C」、太鼓も「A、B、B、C」のそれぞれ4フレーズを基調とし、これを繰り返し演奏する。笛のフレーズはA、B、Cの3フレーズ、太鼓もA、B、Cの3フレーズの組み合わせで構成される。

「バッターラ」一回りは、笛は「A、A、B、B」、太鼓も「A、A、B、B」の4フレーズを基調とし、これを繰り返し演奏する。笛はA、Bの2フレーズ、太鼓もA、Bの2フレーズの組み合わせで構成される。

【踊りの特徴と振り】

大川平荒馬の最も大きな特徴も、今別荒馬と同様、馬役の男性と手綱取りの女性がペアになって踊ることである。始め馬は手綱でつながれているが、途中で手綱取りが綱を離すと馬

は一層荒々しく踊ると言われている。また、大川平荒馬もいくつかの振りで構成されたひと踊りが決まっていることもその特徴である。移動した場所で、約 50 秒のひと踊りを踊り、また移動して踊りを繰り返す。

踊りのお囃子は、4 フレーズを基調に繰り返されるが、踊りの振りはそれには対応しておらず、一定の拍が刻まれるお囃子に乗って、いくつかの振りを組み合わせたひと踊りを踊る。

馬のひと踊りは大きく三つの振りの組み合わせで構成される。便宜上「一つ踏み」「三つ踏み」「足踏み」と表記し、それぞれ順番に A、C、B と記号を付す。これは、今別荒馬の振りとも対応させている。ひと踊りの構成は「A B C B' C' …」となる。基本は B と C を 2 回くり返すが、祭りのクライマックスは 3 回に増えたり、逆に運行の中盤は 1 回で終わったりすることもある。B と B'、C と C' の違いは動作の向きで、B' と C' 左右が逆になる。振りの特性から構成と同じ A、B、C の順で詳述する。

A の「一つ踏み」は、最初の馬と口取りのペア 2 組で反時計回りに回る振りである。下肢の動きは、まず軸足を切り換えるきっかけとして、両足をほぼ同時に地面に着地させ、直ぐに左足を軸足にして地面を 1 回踏む。再度地面に両足を着地させ、直ぐ右足を軸にして地面を 1 回踏む。このように「両足」「左足」「両足」「右足」と足を切替ながら反時計回りに回っていく。上肢は、両足着地の時は、馬頭を正面に構え、左軸に乗る時は馬頭を横に振って右腰側に引きつける。再び両足で着地した時は馬頭を正面辺りに構え、右足で地面を踏む時は、馬頭を左腰に引きつける。これを繰り返し、1 周回って元の位置に戻るまで繰り返す。

B の「足踏み」は、手綱取りが綱を放して馬が自由になるところである。下肢の動きは、まず左足で 2 回ケンケンをしながら前に進む。次に右足を前に 1 歩踏みだし、その横に肩幅程度の距離を取って左足を着き、次はその右側に大きく 1 歩踏み出し、位置は変えずに左足に重心を乗せて、最後に左側に向かって蹲踞をする。上肢の動きは、最初のケンケンでは馬頭を正面に構え、右足を前に踏み出す時には馬頭も前に押し出すように振り、その時に口取りが投げた手綱を肩にかけてキープする。次に右側に大きく踏み出す時は馬頭を右側に押し出すように振り、最後に左に向かって蹲踞する時は馬頭を左腰側に引きつける。

C の「三つ踏み」は、地面を 3 回踏む動作のするところだが、正確に言うと、2 回踏む動作と 3 回踏む動作が組み合わされている。B からの流れで、下肢の動きは、まず蹲踞姿勢から軽く重心を持ち上げ、一つ踏みと同じように両足を地面に着地させ、それから左足を軸にして地面を 2 回踏む。この時左足軸のまま体は右に回していく。次にまた両足着地させ、次は右足を軸にして地面を 3 回踏む。この時は体を左に回していく。もう一度両足着地させ、左足を軸にして地面を 3 回踏む。体は右に回していく。地面を踏む動作を 3 回行ったら、最後に右足に軸足を切り換え 2 回ケンケンをすると、丁度太鼓のフレーズが終了する。上肢の動きは、最初

の蹲踞の時に左腰側にあった馬頭を、左足軸で踏む瞬間に右側腰に引きつける。その勢いで右回りをする。2回踏んだ後、両足着地になるところでは、右側に引きつけた馬頭をゆるめ、再び右足軸で踏む瞬間に馬頭を左側腰に引きつけ、その勢いで左回りをする。右足軸で3回踏んだ後、両足着地で馬頭をゆるめ、再び左足軸で踏む瞬間に馬頭を右側腰に引きつけ、その勢いで右周りをする。最後の右足に切り換えての2回ケンケンには馬頭を正面に構える。

次はB'の「足踏み」となる。Cが右足軸で終わるので、右足軸のまま2回ケンケンをしながらかに進む。次に左足を前に1歩踏みだし、その横に肩幅程度の距離を取って右足を着き、次はその左側に大きく1歩踏み出し、位置は変えずに右足に重心を乗せて、最後に右側に向かって蹲踞をする。上肢の動きは、最初のケンケンは馬頭を正面に構え、左足を前に踏み出す時には馬頭も前に押し出すように振る。次に左側に大きく踏み出す時は馬頭を左側に押し出すように振り、最後に右に向かって蹲踞する時は馬頭を右腰側に引きつける。

次のC'の「三つ踏み」は、B'からの流れで右側を向いた蹲踞姿勢から、右足を軸にして地面を2回踏む。この時右足軸のまま体は左に回していく。次にまた両足着地させ、次は左足を軸にして地面を3回踏む。この時は体を右に回していく。もう一度両足着地させ、右足を軸にして地面を3回踏む。体は左に回していく。地面を踏む動作を3回行ったら、最後に左足に軸足を切り換え2回ケンケンをすると、丁度太鼓のフレーズが終了する。上肢の動きは、最初の蹲踞の時に右腰側にあった馬頭を、右足軸で踏む瞬間に左側腰に引きつける。その勢いで左回りをする。2回踏んだ後、両足着地になるところでは、左側に引きつけた馬頭をゆるめ、再び左足軸で踏む瞬間に馬頭を右側腰に引きつけ、その勢いで右回りをする。左足軸で3回踏んだ後、両足着地で馬頭をゆるめ、再び右足軸で踏む瞬間に馬頭を左側腰に引きつけ、その勢いで左周りをする。最後の左足に切り換えての2回ケンケンは馬頭を正面に構える。

この後に踊りが続く場合はB、Cの振りとなる。

口取り振りは馬の振りに対応するA、A'の二つの振りで構成される。馬のBとCに当たる部分はA'の振りを踊る。「A A' A' A' A' …」となる

Aの「一つ踏み」の下肢の動きは、基本的に馬の動きと同じで、左右に軸足を切り換えながら地面を1回ずつ踏む。上肢の動きは左軸足に切り換えて着地した時は、やや左側を向いて右手の白扇を腰の前付近で内旋させ、重心が上がるタイミングで右手を外旋させながら白扇を上方に持って行き、地面を踏み込んだ瞬間に外旋させた右手を額の左前辺りにかざして決めを作る。そして、決めた瞬間に返した手首を解放し、次は右軸足に切り換えてやや右側を向いて、右手の扇子は再び腰の前付近で内旋させ、重心が上がるタイミングで右手を外旋させながら白扇を上方に持って行き、地面を踏んだ瞬間に外旋させた右手を額の右前辺りにかざして決めを作る。この振りを左手で馬の手綱を持ち、馬と一緒に反時計回りをしながら行う。

馬の B「足踏み」になった時、下肢の動きは基本的に A を続ける。ただし、馬が前に前進してくるので、それを躲すように馬の外側を通して後ろに回り込む。上肢の動きは、まず左手に持っていた手綱を馬に下から投げて渡す。その勢いで左手も上方に挙げ、右手の扇子を内旋させて決めを作る時に、左手も内旋させて両手で決めを作る。

馬の C「一つ踏み」の時は、馬が後ろに下がってくるので、それに合わせて後ろから外側を抜けて前に回り込む。B と C に合わせて馬の前後に回り込むことでひと踊りとなる。

【起源・由緒】

荒馬踊りは、昔のサナブリの行事、つまり田植えが終わり、田の神が天に昇るとき、農民が、神に加護と感謝のために催される神送りの行事として伝わってきたものである。

土地の古老が「馬は、百姓にはなくてはならない労働力として、非常に大切にされてきました。未開の山野だった土地を、汗とほこりにまみれ、苦勞をともに切り開いてきた馬は、百姓にとってかけがえのないものだったのです。田植え後は、その馬を飾り、自慢するように村中を歩きました。なかには、暴れる馬もありましたが、その雄姿をかたどり、踊りとして残したのが荒馬です。馬を飾るのは、馬への感謝の気持ちを表し、村人の健康と幸福を願うための行事でした。津軽藩主大浦為信は、この踊りと百姓を結びつけて農産物の増産を図らせたようです。荒馬の形も、今は私の記憶では昔と変わって、柔らかく今はやりみたいになってきたように思います。昔はもっと素朴でした。」と話したことが、記録されている。

現在は荒馬の行事が夏のねぶた祭りと一緒に行われているが、伝承者によると、はっきりはしないが、明治の前は<虫送り>の行事と一緒に行われていたという。その当時は、藁人形（人形とはいえないほど素朴で藁の束のようなもの）を先頭にして、その後に荒馬がついた。荒馬の役は、ばさまであったという。

今別町の、海岸地区に大川平の荒馬と芸態が異なる「今別荒馬」が伝承されている。このほかに海岸地区の増川と浜名にも、「今別荒馬」と同じ荒馬が伝承されているが、浜名では、現在おこなわれていないということである。また、大川平の近辺の山間部では、二股と鍋田に、それぞれ大川平と同じ荒馬が伝承されているが、鍋田では現在は行われていない。大川平の荒馬は、北津軽郡の金木や市浦、中里方面から伝わったとする説もある。また、同じような荒馬が、北海道の福島などでもみられたが現在は行われておらず、荒馬は、神社に奉納されているということである。同じ町の中、あるいは隣接している地区にありながら、海岸地区と山間部で異なった芸態が伝送されているのは、興味深い²⁸。

²⁸ 青森県教育委員会、前掲書、39-43 頁。

第二部 Hobby Horse Dance としての荒馬

第三章 前近代のスポーツ概念にみる Hobby Horse Dance

第一節 第1節 本章の目的と研究方法

前章までに津軽の荒馬について青森県の一地域に伝わる日本の民俗芸能という観点から論じてきたが、本章ではそうした地域的な独自性の観点を別角度から深めたいと考える。つまり、荒馬のように動物を真似た装束、所作、踊り、馬を模倣する木馬を道具立てとする文化は津軽のみに限定されるものではなく、むしろ、Hobby Horse Dance として総称される舞踊としては世界中に同様の文化が広がっている¹。そこで、本章では津軽の荒馬を俯瞰し、世界に伝わるホビーホースダンスの中に荒馬を位置づけようと試みるものである。それにより、津軽地方にみられる荒馬の特徴の比較だけでは捉えきれない「荒馬とは何か」という本質的な問いに迫ることを目的とする。

なお、上述の観点到し、日本以外の馬の衣装を身につける踊りに着目し、荒馬との関係について検討した研究は、弘前大学民俗芸能研究部の部報『こまおどり』の論考にも見られる。すなわち、小池雅明は「郷土の芸能－荒馬踊りと駒踊り－」の中で、フランスやスペインにも同様の馬を付けた踊りがあり、西洋の馬の踊りがユーラシア大陸を通り日本に伝わったのではないかという説を紹介している²。確かにフランスやスペインでは現在もホビーホースダンスが伝承され、祝祭等で踊られている。なかでも、イギリスはスポーツとしての狩猟、馬術との関連に限らず、馬との共生関係を重視し、たとえば、馬が人びとの生活にもたらす意味は装飾された馬蹄(ホースシュー)が魔除け及び幸福を呼び込む象徴として戸口に飾られるなど身近なものであり³、ホビーホースダンスの研究も進んでいる⁴。

¹ “Skirted Hobby Horse,” *World Encyclopedia of Puppetry Arts*, Union Internationale de la Marionnette, <https://wepa.unima.org/en/skirted-hobby-horse/> (最終閲覧 2025.3.28)。

² 小池雅昭「郷土の芸能－荒馬踊りと駒踊り」『こまおどり創刊号』弘前大学民俗研究部、1961年、8-9頁。

³ Robert Means Lawrence, *The Magic of the Horse-Shoe: With Other Folk-Lore Notes* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1898), pp.3-5.

⁴ E.C. Cawte, *Ritual Animal Disguise* (London: DS Brewer for the Folklore Society, 1978), passim.; Violet Alford, *The Hobby Horse and other Animal Masks* (London: The Merlin Press, 1978), passim.

たとえば、イギリスの伝統的な音楽やダンスを研究した E. C. Cawte カウトは、イギリスに伝わるホビーホースやその他の動物に関わる踊りや習俗を研究し、ホビーホースの定義をいくつかに分類・整理している。その中で、荒馬の様に楕円の枠に馬頭と尻尾がついたタイプを次の様に説明している。

2 a. モリスダンスのステージにおいて、あるいは、家屋の壁龕^{へきがん}に飾られたり、演者の腰に巻かれたりする簡素かつ軽量素材で作られた馬形の模倣物。⁵

2a はしばしば *tourney horse* (トーナメント馬) と呼ばれ、先端には馬の頭が、反対側には尻尾がついた地面に垂れる布のドレープ (フットクローズ) の枠が装着されている。演者はこれを腰に括るか、胸部に巻きつけ、本物の馬に跨っているように装う。⁶

この *tourney horse* という名称は、イギリスの民族音楽やフォークダンスを研究した Violet Alford アルフォードが「中世の装甲馬に似ている」ということから名づけたという⁷。アルフォード自身は *tourney horse* を次の様に説明している。

トーナメント馬は馬であると同時に騎手でもある。男、ダンサー、俳優は、腰回りに軽い木製または籠細工のフレームを持ち、そこからカーテンが地面近くまで垂れ下がり、馬を走らせたり、駆け回らせたり、跳ね回らせたりする人間の脚を隠す。フレームの前面には、通常木製で、しばしば毛のたてがみのある馬の頭が固定されている。背面には、毛、小枝、羊毛、あるいは葉っぱの尻尾がある。見せかけとして干し草を詰めた靴下で作られた一対の偽の脚がよく見られる。足は、鐙にセットされるか、馬具の布にぶら下がっている。⁸

カウトとアルフォードの説明に共通しているのは、トーナメント馬は、先端に木製の馬の頭、後部には尻尾、地面近くまで垂れ下がったカーテンやドレープ状の布が付いた木製や籠細工のフレームをその周りに装着して、騎手が馬に乗っているように走ったり跳ね回ったりするパフォーマンスやそれに用いる模倣物を指すということである。

荒馬は日本では津軽地方に固有の民俗芸能であるが、上記の説明に合致し、世界中の祭り

⁵ Cawte, op.cit., p.4.

⁶ Ibid., 8.

⁷ M.J.D-S. All Souls, "Introduction," in Violet Alford, *The Hobby Horse and Other Animal Masks* (London: The Merlin Press, 1990), p.28.

⁸ Violet Alford, op.cit., p.3.

の芸能の中でみられる馬形の模倣物に共通する、トーナメント馬の一種に他ならず、世界に伝わるホビーホースダンスとしての一面を持つ。したがって、津軽の荒馬は世界中で見られるホビーホースダンスとどのような共通点を持ち、かつ独自性を有するのかという観点は一考に値する。この点に踏み込む前に英語の sport の語義自体が「動く対象」しての「動物」、とりわけ馬と密接な関係にあったこと、かつ、そのことが、スポーツの前史としての馬との文化的共生の重要性を意味していることについて言及しておきたい。

【英語 sport の語義と horse】

英語の sport は近代を機にその概念が大きく変化した言葉であり、時代ごとに定義や対象範囲が変化してきたと言われている⁹。後述する通り、OED (Oxford English Dictionary) に基づく研究によれば、19 世紀中葉以降になると、人間の身体活動を伴う組織的な運動競技を指すように変化している。また池田は、近代スポーツが成立する前夜の「前ヴィクトリア時代（18 世紀末から 19 世紀はじめ）」には、鷹狩り、競馬、熊いじめなど、動物を伴ったスポーツが「英語 sport」を語る同時代の複数の文献に多く見られ、それ以後の時代に見られるスポーツ関連の書籍が有する中身との相違を指摘し、近代スポーツの概念を相対化している。前述の池田もその事例として引き合いに出し、前近代および過渡期のイギリスのスポーツ史を描く際に、不可欠の書とされている J. Strutt ストラットの『*The Sports and Pastimes of the People of England*（イギリス国民のスポーツと娯楽）』の中でも、動物と人間が協働する活動が紹介されており、古い時代のスポーツは、気晴らしや娯楽を含む動物との関わりを無視できない奥行ある文化であったとされている。

そこでまずはオックスフォード英語辞典 Oxford English Dictionary（以下では OED と略す）の用例研究に基づく阿部生雄による「スポーツ概念史」を基に整理する。次に近代以前の前ヴィクトリア時代のスポーツ、特に人間と動物が関わりながら行われたスポーツや人間と馬が関わり合った娯楽について、先の池田とストラットの叙述を基に概観する。また、ホビーホースダンスのうち荒馬が分類される型がなぜトーナメント馬に含まれるのか考察する。つまり、以下では、荒馬をスポーツの世界史に照らせば、トーナメント型のホビーホースに位置づけられるということをスポーツの概念史の整理から始めて示していきたい。

⁹ デイビッド・G・マコーム、中房敏朗/ウエイン・ジュリアン『スポーツの世界史』ミネルヴァ書房：京都。

第二節 スポーツの概念規定とその様相

第一項 OED 研究からみたスポーツの概念

阿部生雄は「スポーツという言葉はその一語によって様々な形式を持ち、異なった運動形態を持つ多様な活動を象徴的に集約する言葉でもある」¹⁰として、スポーツ概念について史的に考察を行った。阿部は sport という言葉について①語源、②15～16 世紀、③17～18 世紀、④19 世紀と四つの時代に区分し、時代ごとの概念を整理した。

つまり、Sport の語源はラテン語の deportare に由来するというのが定説で、主として物理的、空間的な運搬、分離、移動、隔離という意味を持つという。それがフランス語の deporter、desporter を経過して disport に英語化されると、主として人間の内面的な転換、変化、移動の要素がによって構成されるようになり、15 世紀頃には明確に拘束や義務から離れて精神的解放や楽しみを得ること、気晴らしを意味する言葉として確立した。

15～16 世紀の sport は、気分転換、精神的解放などのそれまでの意味を継承しつつ、身体運動を含む野外での遊びやゲーム、演劇や見世物、社会的行事を形成するような競技などの多様な意味を持ち、次第に真面目さと対立する概念領域を獲得していった。

17 世紀になると、とりわけ戸外での狩猟や釣等の獲物を追いとらえる余暇的活動と密接な関係をもつ言葉になっていった。18 世紀には賭博とも関連する言葉となり、当時のスポーツマンの代表的なレクリエーションは野外で行われる狩猟と賭博スポーツであった。この頃の sport は自己目的的で自発的な活動を通して得る気分転換という性質を強く保持していた。

19 世紀中葉は sport の概念が大きく変化した時期にあたる。明確に競技形式をもつ娯楽的な身体活動の概念に変化し、狩猟に限らず、組織化された競技形式を持つ運動やゲームを表現する近代的なスポーツの概念はこの時期になって初めて現れる。

すなわち、阿部は sport の概念領域の歴史的展開を次の様にまとめている。

- (1) 物理的、空間的運搬、分離、移動、隔離、(2) 精神的、内面的転換、変化、移動、(3) 喜び、楽しみ、(4) 労働、義務から離れた気晴らし、気分転換、遊び、(5) 冗談、(6) 好色な遊び、(7) 野外での身体活動を伴う気晴らし、(8) 競技的、ショー的興行、(9) 主として狩猟を中心とする野外での気晴らし、(10) 賭博、(11) 競技的性格を持つ身体運動や組織的ゲーム¹¹

¹⁰ 阿部生雄「スポーツの概念史」『宇都宮大学教養部研究報告 9 (1)』1976 年、99 頁。

¹¹ 同上、106 頁。

よって、こうしたスポーツの概念史に照らせば、sport が組織化された競技形式を持つ近代スポーツの概念として用いられるのは比較的最近のことであり、17 世紀から 18 世紀にかけての sport の概念に着目すると、とりわけ狩猟や釣り、つまり、人間と動物の関わりが sport の概念に大きく影響を与えていることがわかる。次に、人間と動物に関する sport 概念の実像について示す。

第二項 前近代におけるスポーツの様相

池田は近代スポーツが成立する 19 世紀中葉以前の 18 世紀末から 19 世紀はじめの約 30 年間にあたる前近代を当時のイギリスにおけるスポーツライター、ピアス・イーガンが描いた「スポーツの世界」を考察することで、前近代的な sport が表す概念やその具体的なスポーツの様相に迫った¹²。

池田は、イーガンが当時のスポーツをルポタージュ形式で綴った『イーガンのスポーツの書』の表題記事に見られるスポーツの名称から記事を分類し、闘鶏、釣り、鷹狩り、競馬、ハンティング、馬車競走といった動物に関わるスポーツを表題にしたものが多くを占め、前近代のスポーツは概念に拠るだけでなく、実質的にも動物を対象としたもの、動物との関わりが強かった事象が『スポーツの書』のテーマとされていたことを明らかにしている。

また池田はイーガンが叙述の中で示している「スポーツの世界」は、今日理解されているスポーツの意味よりも包括的な概念を含んでいたとして、イーガンがスポーツとして感じていた内容を示すために、『感性としての「スポーツ」』という概念を定義し、「スポーツの世界」における「スポーティング」の意味について考察した¹³。

中でも、前近代的なスポーツにみられた多様性や混在性は、ものごとの秩序や区別の明確化にこだわる合理的精神よりも言い伝えや迷信といった伝統社会が持ちえた慣習の曖昧さに価値を置く精神と通ずるとし、伝統的なスポーツの概念に含まれていた「笑い・冗談・ユ

¹² 池田恵子『前ヴィクトリア時代のスポーツ』不昧堂出版、1996 年。

¹³ まず、「スポーティングな人物」として、1 コリント的（キリスト教的紳士の理想に反する贅沢放蕩三昧の性格）、2 トム・アンド・ジェリーイズム（酒を飲んで大暴れする乱暴者の気質、わんぱく者・いたずら小僧）、3 ポールプライ的気質（詮索好き・好奇心旺盛な気質）を上げ、下層社会の暮らしを好み、浮浪者に交じってパブで安いジンを飲む人びとを例示しながら、今日的にみれば、英国紳士的ではない下層の暮らしぶりを通して、近代スポーツの特殊性を逆照射している。前近代的なスポーツマンは、規律正しい、実直なスポーツマンではなく、むしろ、自由奔放で正しいとされる規範を逸脱し、自分の思うがままに行動する姿であったとされている。さらに、「ファンシー」という概念からも補足し、それが「愛好家集団」を指し、ボクシング、釣り、ハンティングといったそれぞれのスポーツに対して共通の価値を追求した集団と捉えている。その中では階層は関係なく混在し、うすのろも抜け目ない者も、聖職者も軍人も、若者や女性も、多種多様な人物を受け入れられ、そのある種のカオス状態こそが「スポーティングな世界」であるとした（同上、107-146 頁）。

ーモア・巧みな弁舌・機知・ショー」が「スポーツの世界」において重要な意味を有していると論じている。重要であるのは、この中に動物のショー、動物の芸当など、動物に関する叙述が含まれていることである。その際に表現されている、「スポーツの世界」における「ものの混在・融合性」は人間以外、すなわち、動物との共生関係にまで及んでいることである。もっとも、ユーモラスな趣向を交えた叙述が、作家イーガンの得意とするところであったが、たとえば、馬に新たな毛皮をまとわせるためにその毛を剃ったという理髪師のエピソードや、作りもののライオンに扮した人があたかも人間のように振る舞うエピソードを紹介し、人間による動物の模倣や動物に技を仕込んで披露するといった芸も伝統的なスポーツの概念を含んでいた。特に「動物の人間化」という混合性には、単に人間が動物になりきるだけではなく、動物が人間になるという双方向の関係が示されている。このような動物の模倣や動物話は近代のスポーツの概念とは決して相容れないものである。

しかしながら、このような動物の模倣や動物の芸をスポーツと捉えているのは、イーガンの独創に拠るものではなく、本章の冒頭で言及の尚古学者、ストラッドも同様であり、その意味でかつての前近代的なスポーツの概念が有していた包括的側面と馬を介した祭りや民俗舞踊のもつ生活性は無縁ではなかった。すなわち、ストラットの *The Sports and Pastimes of the People of England* に見られる人間の動物の融合・混在性は次のようなものであった。

第三項 ストラットの描く人間と動物によるスポーツの様相

ストラットの *The Sports and Pastimes of the People of England* は表題の通り、19 世紀の都市化の進行に伴う社会変化を機にイギリスにおける古いスポーツと娯楽を書き残そうとして詳述されたものであった。初版は 1801 年で、池田が前ヴィクトリア時代のスポーツとして近代前夜を描いた時期とほぼ同時代のものにあたり、前時代からの転換期を理解する上で、貴重な史料として、イギリス文化史を中心にこれまで注目されてきた書にあたる¹⁴。

上述のストラット書の第 3 部 「中都市や主教座のある都市およびその近郊で実践されてきた娯楽」BOOK III「PASTIMES USUALLY EXERCISED IN TOWNS AND CITIES, OR PLACES ADJOINING TO THEM.」の第 6 章 CHAPTER VI には、曲芸師たちが動物に人間の真似をさせたり様々な芸を覚えさせたりすることは一般に考えられているよりも古くからあると述べ、人間が教えたパフォーマンスを披露する動物たちの姿をより古い時代の文献から引用して紹介している¹⁵。

¹⁴ 同上、39 頁。

¹⁵ Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England* (London: J. White, 1801; reprint, London: Thomas Tegg, 1845), Project Gutenberg e-book, 239-265, <https://www.gutenberg.org/ebooks/48983>.

また、反対に人間が動物の模倣することも古くからあり、それが一種のスポーツだったことも以下のように指摘している。

模倣に依存するパフォーマンスの中でも、さまざまな動物の姿になり、そのしぐさをまねるというパフォーマンスは、おどけた動作を披露する道化師が始めたものではないようだ。この滑稽な慣習は、私の記憶が正しければ、少なくとも興行の一団、プロとして登場する道化師たちが現れるずっと前から存在していた。古代の人々の間でよく行われていたスポーツがあり、それは通常元旦のカレンズ Kalends に行われていた。おそらくそれは〔古代の農神祭〕サトゥルナリア Saturnalia ないしはサトゥルヌス Saturn の祝祭の一部であった。それは仮装と変装から成り、俳優たちは野生動物や家畜に似せて自分自身を装い、あちこちを練り歩いた。そして、模倣した獣のキャラクターを最もよく演じることができた者が、仲間たちから最も高い評価を得ていたようである¹⁶。

道化師や吟遊詩人たちによるこうした滑稽な仮装儀礼の慣習は庶民に好まれし、さまざまな動物の真似をする道化師たちの才能は注目され、斬新な技が加えられると、彼らの見世物は盛り上がった。以下に、先に引用したボドリアン写本から、彼らのパフォーマンスの例をいくつか紹介する。¹⁷

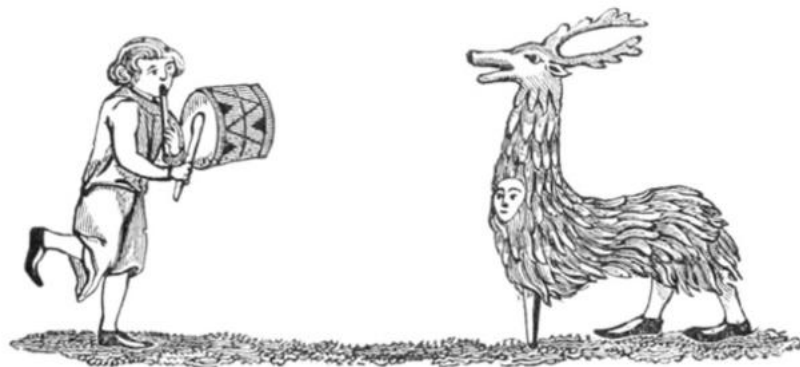


図8 牡鹿の仮装
Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England*, London, 1801 より引用

これは牡鹿の真似。次のものは、同じ写本からの抜粋で、後ろ足で直立して歩くヤギに扮

¹⁶ Ibid., p.250.

¹⁷ Ibid., p.253.

した。¹⁸



図9 直立する山羊の仮装
Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England*, London, 1801 より引用

これらの偽装動物にはどちらも前足がなく、最初の動物には欠損部分が杖で補われ、役者はその杖にもたれてくつろぐことができる。胸の部分に開いた穴から顔を覗かせている。そして、紛れもなく、この役には顔を歪めることができる人物が選ばれ、その人物は、自分の顔を最大限にアピールする機会を得て、観客から称賛を浴びるに違いない。また、首を動かすことで、この変装の気まぐれな外観を強調することも可能であった。この男は、首のくぼみに腕を入れることで、このトリックを簡単に実行できるだろう。おそらく首は、その目的のために柔軟に作られていた。同じ写本からの次の描写では、犬の頭に似た仮面をつけた少年が、羊皮紙の巻物を主人に差し出している。¹⁹

¹⁸ Ibid., p.255.

¹⁹ Ibid., p.254.



図10 羊皮紙を持った犬の仮装
Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England*, London, 1801 より引用

原典には、さらに2人の少年がおり、彼らは同様の方法で変装し、それぞれが羊皮紙の巻物を手に持っている。[権威者を示す元帥杖をもち、鬘を被っていることから、判事に対し、法的公文書に羊皮紙を使用することに対し、動物があたかも抗議しているかの]このパフォーマンスの機知について、わたしも抗議したくもなるが[冗談]、そのような抗議はこの時代には見当たらず、こうした動物に扮する娯楽が人々に楽しまれていることがわかる。²⁰

ストラットの叙述や池田の分析にも示されていたとおり、動物の模倣や動物の芸当もスポーツの概念の範疇に違和感なく含まれていたのが前近代であり、その行為は曲芸師や吟遊詩人のような芸を職業としている人によって始められたのではなく、古代より宗教的行事の中で一般人が始めたとも記されている。よって、動物との融合・混在性は近代では特殊に映るものの、もともとは生活を通じて、動物との共生がより身近に感じられていたことから、イギリスにおいては、ごくありふれたものであったと考えてよいことがわかる。

またストラットは、“Horses are animals exceedingly susceptible of instruction, and their performances have been extended so far as to bear the appearance of rational discernment.”

²¹「馬は調教に際して飲み込みが良く、彼らのパフォーマンスは理にかなった洞察の結果のごとくに映る」と述べ、人間が奏でる音楽に合わせて踊る馬、後ろ足で立ち上がり人間と模擬戦闘を行う馬など、人間と一緒に様々なパフォーマンスをしている様子も紹介している。さらに、馬が2本足で立ち上がり何かをするということは馬に人間の真似をさせることであると叙述され、このような馬の姿を描いた原画について “The original drawings,

²⁰ Ibid., p.254.

²¹ Ibid., p.245.

represented by these engravings, are all of them upwards of four hundred and fifty years old; and at the time in which they were made the jocolators were in full possession of the public favour.”²²「これらの銅版画で表現された原画はすべて 450 年前以上前のものであり、[吟遊詩人のような] 道化師が人々の支持を完全に得ていた時代のことであった」と説明している。

反対に人間が馬の模倣をする場合は、“The prancing and curveting of horses was counterfeited in the hobby-horse, the usual concomitant of the morris-dance.”²³「馬の跳躍やクルベット [馬術の技。後肢でジャンプし、前肢を持ち上げて移動すること] はモリスダンスにつきもので、ホビーホースによって模倣された」と記されている。ホビーホースが用いられ、モリスダンスの中で行われたことも指摘している。モリスダンスの中でのホビーホースについては、次のような記述も見られる。

モリスダンスはしばしばそれだけで独立して演じられることもあったが、通常、お祭りの行列や山車^{ベージェント}に加わり、とりわけ、五月祭^{メイゲームズ}のお祝いの機会に披露された。これらの機会にはロビン・フッドにマリアン姫、その他のよく知られる無法者の一団といった登場人物たちと共に、木馬^{ホビーホース}やドラゴンが加わり、ダンスが行列の一部を構成していた。²⁴

後にホビーホースはモリスダンスの構成に分かちがたい要素となった。つまり軽い木で出来た胴体に馬の頭と尻尾をつけた木馬が、人であり馬である人物に括りつけられていた。この演者の足元は馬に人間の足が生えているかに見えぬよう、地面に着くほどのトラッピング [馬のための装飾覆い] で隠されていた。²⁵

以上のストラットの叙述は本村凌二『馬の世界史』からも補うことができる。左記によれば、人間と馬との共生関係は古く、馬の家畜化は紀元前 4000 年頃から始まり、紀元前 2000 年頃にはまとまった数の馬を飼育し、戦車に用いたという記録も残されている²⁶。イギリスに馬がどのように持ち込まれ、生活の中でどのような役割を与えられていたかについては、正確に限定できるものではないが、イギリスの五月祭につきものである伝統的な「モリスダンスにつきもののホビーホース」と言われるように、早い時期から人々がホビーホースを付け、馬と渾然一体となって踊ったことはストラットのようなスポーツ娯楽の書に残さ

²² Ibid., p.245.

²³ Ibid., p.254.

²⁴ Ibid., p.223.

²⁵ Ibid., p.224.

²⁶ 本村凌二『馬の世界史』中央公論新社：東京、2013、15-55 頁。

れているだけでなく、イーガンが指摘した人間と動物の双方向の関係性が、生活全般にかかわって象徴的な意味を果たしていたことがわかる。

第三節 「さかさまの世界」におけるホビーホースダンスの意味

前節では、スポーツの概念史を辿り、前近代のスポーツには狩猟や釣などの獲物を追いとらえる余暇的活動といった動物と関わる活動が多く含まれていたことや、ストラットの叙述や池田の分析から、動物の模倣や動物への芸当もそれらに含まれていたことを確認した。また、馬を用いたパフォーマンスとしてホビーホースダンスが、五月祭を初めとした祭りの行列やページェントのモリスダンスには欠かせない演目になっていたことも見てきた。

本節では、五月祭などの祭りがもっていた中世ヨーロッパ社会における社会的機能と、そこで踊られるホビーホースダンスの意義について考察する。とりわけ、中世ヨーロッパの民衆文化に着眼した Peter Burke ピーター・バークと中世イギリス社会の民衆娯楽を探究した Robert W. Malcolmson ロバート・W・マーカムソンの研究はイギリスやヨーロッパの中世を超え、広く前近代の祭り、動物と人々との関係性を考える上で示唆に富む。それゆえ、以下で論じていくことは、津軽の荒馬の社会的機能を考察する上で、示唆的である。

第一項 ピーター・バークの民衆文化における「さかさまの世界」

バークは、ヨーロッパの民衆文化を「非公式的な文化」「非エリートの文化」「『従属階級』の文化」と表現し、その担い手である「非エリート」の中で最も重要なのは「職人と農民」であるとした²⁷。しかし、その全てが彼らであったのではなく、「民衆」の定義が困難であり、民衆文化はきわめて多様であることも指摘している²⁸。民衆文化の担い手には、それを生業としていた民衆芸術家（彫刻家、画家、漫画家、織布工、工芸家など）、役者や芸人（中世の吟遊詩人、歌手、大道芸人、曲芸師、道化役者、喜劇役者、旅芸人など）の他、仕事をしながらそのような芸事を嗜むアマチュアの実存も大きかったとされている²⁹。それらの文化が披露され享受された場所は教会と酒場と市場であった。教会は様々な祝祭が行われる場であり、酒場では歌や踊りが披露され、市場ではその空間的広さから、大道芸や野外劇などを含めたありとあらゆる娯楽が享受された³⁰。地中海諸国とイングランドの市場の様子は

²⁷ ピーター・バーク（中村賢二郎・谷泰訳）『ヨーロッパの民衆文化』人文書院：京都、1988年、11-14頁。

²⁸ 同上、17-40頁。

²⁹ 同上、123-146頁。

³⁰ 同上、146-151頁。

次の様に記されている。

地中海諸国では、民衆文化の実際の集中点は「広場」であった。十七世紀のセヴィーリャでは市場広場で人形芝居が行われたが、マドリードでは芝居、闘牛、競馬、馬上試合を市庁広場で見ることができ、もし歌手たちの声が、研ぎ師や栗売りの女の呼び売りの声に掻き消されなければ、バラッドも聞くことができたはずである。ローマでは人々は大道芸人や低い奇術師を見にピアッツ・ヌオヴァに行ったり、最新の落首目当てにパスキエーノ広場へ行った。フィレンツェでは市政庁広場は公の見世物のための広場であり、サンタ・クロチェ広場は野牛レースや闘牛、フットボールを見る場所で、サン・マルティーノ広場（オル・サン・ミケーレ近く）は、物語歌手の朗唱を聞く場所であった。ヴェネツィアでは、一流の大道芸人がベンチを据え、おどけをして菓を売ったのは、サン・マルコ広場においてであった。

31

イングランドでは、バーソロミューの市とストゥアブリッジの市が娯楽の主要な中心地であった。バーソロミューの市は、聖バルトロメオの祝日である八月二十五日にスミスフィールドで催された。そこでは十七世紀に、芝居や人形芝居、道化師、綱渡り芸人、蠟人形を見ることができたが、それらは道化や森の野人の身なりをした興行師の前口上つきで演じられたものだった。（中略）ケンブリッジ近くのストゥアブリッジで開かれた市は、九月八日から三週間続いた。ジェームス一世がストゥアブリッジの「無益な遊び」に反対する法令を出したとき、「牛攻め、熊攻め、卑俗な芝居、見世物、幕間劇、英語による喜劇と悲劇、ロジェッツ、^{ナインボールズ}九柱戯」が挙げられており、他の十七世紀の史料によれば、競馬、とんぼ返り曲芸師、手品師、説教師、それに、おそらく数日前にバーソロミューの市で見られたのと同じあやつり人形と綱渡り芸人による芸もつけ加えることができる。³²

前述した通り、市場では様々な民衆文化・民衆娯楽が見られたが、特に「闘牛」「競馬」「馬上試合」「牛攻め」「熊攻め」といった動物を用いた娯楽も多く、そのことは前節でストラッドが挙げた民衆娯楽とも重なる。また、「森の野人の身なりをした興行師」というのは、森に住む動物やそれを象徴した存在としての野人の仮装をする芸があったことを意味し、民衆文化や娯楽の中に動物が深く関わっていたことが読みとれる。

バークは伝統的なヨーロッパ民衆文化において最も重要な背景は祭りであり、「祭りは日

³¹ 同上、149 頁

³² 同上、151 頁。

常の反対であり、日常ができる限りの節約の時であっただけに、浪費の時であった」と説明している。結婚式のような家族の祭り、都市ないし教区での共同体の祭り、復活祭、五月祭、クリスマスの十二日間など、人々は仕事をやめて、飲み、食べ、普段着ない上等の服を着飾って、浮かれ騒いだ。その中でも最大の祭りはカーニバルであった。カーニバルは「大通りと広場とが舞台となる巨大な芝居」であり、「そこでは役者と観客の間にははっきりとした区別はなかった」と述べている。男が女装、女が男装をしたり、聖職者、悪魔、道化、野人などの普段とは違う全身仮装をしたりして、普段とは違う役割を演じた。それは「さかさまの世界」を実際に演じたものであった。「さかさまの世界」は16世紀以降の通俗版画で好まれたテーマで、逆立ちする人々、空中都市、空を飛ぶ魚などの「物理的逆転」、自分の主人に蹄鉄を打つ蹄鉄工の馬、人間を切り刻む肉屋の狐、漁夫を食べる魚などの「人と動物の関係の逆転」、年齢の逆転、性の逆転、地位の逆転といった「人と人の関係の逆転」などが多く描かれた。カーニバルの中では多くの芝居が上演されたが、裁判官がさらし台にさらされたり、妻が夫を打ち負かす逆転したりする情景が上演された。バークによれば、カーニバルが「制度化された混乱の時、一連の逆転の儀式の時」であり、「富や身分や権力の不平等に満ちた彼らの住む社会」の「安全弁」として、「従属者が彼らの恨みを発散し欲求不満の埋め合わせ」をする機能を果たしていた。

このようなバークが解説する伝統的なヨーロッパの民衆娯楽、カーニバルの世界に目を向ければ、日常の鬱屈した世界から解放された「さかさまの世界」だからこそ、人間と動物の関係が入れ替わり、パロディが繰り広げられたと考えることができる。それゆえ、人が馬となるホビーホースも、この「さかさまの世界」に相当し、そのパロディに人々の目が注がれたのであり、同様の装具を身に着けて楽しまれた日本の荒馬も日常が入れ替わる、同様の「さかさまの世界」意味を有していたことはもはや否定できない。

第二項 マーカムソンの描いた民衆娯楽としての祭り

マーカムソンが英国社会の民衆娯楽について研究対象としたのは中世後期から前近代にかけての時代で、その時代はピューリタン革命や名誉革命といった市民革命が生じ、その後の産業革命につながる社会構造の変化が生じていた時期であった。しかし、中世後期はまだそれまでの民衆文化・民衆娯楽が持続し、前項のバークによるヨーロッパ一円に共通した民衆娯楽に関する研究と重なる部分も多分にあった。

その頃のイギリスの社会は農本的であり、苛酷な労働と農事歴のサイクルの休閑期に大きな例祭の多くが組み込まれていた。民衆が娯楽を楽しんだ祝祭や場は、ウェイク（教区の例祭）、フェア（定期市）、雇い人市、ガイ・フォークス・デイ、クリスマス、復活祭、メイ・

デイ、聖霊降臨祭などがあった。そこでは、フットボール、クリケット、ピュジリズム（拳闘）、レスリングなどのスポーツも楽しまれた。また、牛掛け、熊掛け、牛追い、鶏当て、闘鶏、狩猟と競馬といったアニマル・スポーツも多数行われた。暦にある祝祭行事のいくつかは、家族、親戚、友人、近隣住民といった小さく緊密に結びあった農村のコミュニティを基盤としていた。こうした祭りの時節は若者たちにとっては男女の出会いの場となり、老人たちも若者が行うスポーツやダンスなどを観客として見に来た。マーカムソンによれば、伝統的な民衆娯楽は権威者のパトロネージを必要としジェントルマンの庇護の下で実施され、彼らの黙認に依存していた。競馬はジェントルマンなしには存在せず、クリケットや闘鶏、拳闘の懸賞金の支援に積極的に加わっていた。

このようなノブレス＝オブリージュの関係性の中で果たされた祭りの社会的機能の一つは規制の解除であった。マーカムソンは「遊びは、通常の規制を解除し、そんな機会でもなければとても許されないようなことを容認に、本当に実現すれば狂気としか思えないようなファンタジーを時として許すことがありうる」と述べている。どんちゃん騒ぎの饗宴、狂ったような踊り、自然にわき起こる歌や奇声が、性的規制のゆるみなどがこれに当たるといえる。また祭りは「支配的な権力構造に対する敵意の直接的な表現のメディア」としての機能も果たした。つまり、祭りの機会は身分の高い者をなぶりものにし、同じ共同体内部にいるめざわりな人物を懲らしめることに利用された。このことは非日常世界における地位の逆転を意味し、支配的な勢力や価値に対して、制限付きの軽侮を表現する機能として働いた。それゆえ、社会集団同士の敵愾心がスポーツ競技として発揮する機会や、それらによって社会的凝集力や集団の一体性を培うことにつながったと解説されている。

最後にマーカムソンは、民衆娯楽がごくありふれた人たちに「名誉を得て得意となる現実の機会を提供する」機能を持つことも指摘した。スポーツは全て個人を認知させる機会を提供し、1人1人の人物に批判や喝采、尊敬や侮蔑が与えられ、また、何かを組織する能力や嗜好をはかるテストとしても役だった。祝日のために着飾り、惜しみなく費やすことも評判を受けるに比較的にしやすい手段であった。民衆娯楽は、ほとんど何も残さない遊びの世界のただつかのまのできごとではなく、「社会全領域の現実と切り離すことのできない、基本的な社会行為」なのだと括っている。

それゆえ、イギリスを含むヨーロッパ全土で繰り広げられた動物の模倣、ホビーホースダンスを含む祭りの時節は、こうした村落共同体の社会的機能、さかさまの世界、地位の逆転、日常と非日常世界の均衡を保つ上で、重要な社会的役割を担うものであり、日本におけるホビーホースダンス、荒馬を分析する上で、こうした視点は無視できない。

第四節 小括

以上、述べてきたように、Sport の語源は、物理的・空間的移動を意味するラテン語の *deportare* に由来し、古代フランス語を経由して精神的・内面的転換、気晴らし・気分転換という意味を持つようになった。その後、阿部が論じているように、15～19 世紀にかけて、野外での身体活動を伴う気晴らし、ショー的興行、狩猟・釣り、賭博といった意味で使われるようになり、19 世紀中期以降から現在用いられるような競技的性格を持つ身体運動や組織的ゲームを意味するようになった。

イギリスにおける 17～18 世紀は、狩猟や釣りに代表されるような動物を用いたり、動物と関わったりするスポーツが盛んに行われた時期にあたる。その際、動物の真似をしたり、動物に芸を仕込んで披露したりする娯楽もスポーツの概念に含まれていた。その底流にあったのは、人間が動物になるだけではなく、動物が人間になる双方向性の関係性を含むことから、人間が動物を操作したり、征服しようとしたりする関係性よりも、むしろ動物と人間との融合・混在性を描くある種の自然との共生意識が存在するものであったと考えられる。

中でも馬は当時の娯楽・スポーツには欠かせない存在で、競馬、馬車競走だけでなく、馬を用いた芸当、荒馬と同様に、馬の模倣という芸能が含まれていた。ホビーホースはやがて、イギリスでは五月祭のモリスダンスにはかかせないものになっている。

しかも、古くからの馬との共生関係を基底としたイギリスの祭りの中のホビーホースは津軽の荒馬について考察する場合、無視できない視座を提示している。イギリスのホビーホースも祭りの山車や行列の中で行われ、単に馬の模倣であるというその形態の類似性のみならず、慣習による装飾や流儀には差異があっても、民衆娯楽として共通点がある。すなわち、非日常的な祭りの中にある馬の模倣は、世界の他の地域にも共通した人々と馬との日常生活における共生関係の象徴であり、世界中で行われていたホビーホースを用いた祭りが日本にも存在していることの証であると言える。本章はその源流がどこにあったのか、荒馬がどこから来たのかという議論の喚起を目的としているわけではないが、少なくとも、以上の世界的視野から、荒馬は、その地域独自の形態—津軽の場合は荒馬—として定着したという相対的な見方が必要であることを意味している。そして、そのことは人類において普遍的な共通性とスポーツの語源ともかかわっていることがわかる。それは何故なのか。最終章では、このことに立ち入るために「自然との共生関係と荒馬」について論じていく。

第四章 荒馬に見る日本馬と人の共生関係

第一節 本章の目的と研究方法

前章では、イングランドの19世紀初頭に著されたストラットの著作、ヨーロッパの前近代の民衆娯楽を対象としたバーク、マークムソンの研究を通して、民俗文化にみる普遍的な共通性とスポーツの語源とのかかわりを通して、荒馬を世界のホビーホースの中に位置づけた。それにより、荒馬はその地域独自の形態に他ならず、津軽の場合は荒馬となるという視座を得た。こうした世界において古くから存在する動物と人間の共生関係と民衆の祭りの中の舞踊について、再び津軽の荒馬の特徴に立ち返り、本章では荒馬に見られる馬と人との関係を日本馬と人との共生関係を通じて捉え直したいと考える。

そもそも日本人は動物とどのような共生関係を築いてきたのか。ヨーロッパの民衆娯楽に見られたような関係性はなかったのだろうか。谷釜によれば、古代の貴族達は既に狩猟を趣味として楽しんでいたという¹。また、平安貴族は馬を用いた騎射、競馬、馬の雑芸、打毬などを嗜んでいた²、中世の武士が戦いに備えて励んでいたのが「馬上三物」と言われた流鏑馬、笠懸、犬追物であった³。言い換えればヨーロッパ人と同様に日本人も古くから動物、特に馬と関わるスポーツを様々嗜んできた。このことは人類に共通することであろう。

では、日本人に特有のものとはどのようなものであったのか。それを解明するには、改めて日本馬と人の関係性を見ていく必要がある。

序章でも触れたが、民俗芸能辞典では荒馬は「駒踊の一種」とされていた。ではその「駒踊」とは何かを紐解くと、「古くからの馬産地である南部地方（岩手県中北部、青森県東部）一帯に分布し、その多くは野馬捕りの行事を模して始められた」⁴と説明される。この「野馬捕り」とは、日本の馬匹生産を担っていた牧に由来する言葉で、その歴史も古いことがわっている。馬が日本に伝わり飼われるようになったのは四世紀末から五世紀初頭と考えられ⁵、五世紀には馬を飼育する牧が日本の広い範囲に作られるようになった。日本人は馬をどのように捉え、馬とどのように接していたのか。牧における日本独自の生産方法であり、主流でもあった「野馬飼い」に日本人の馬に対する考え方や共生関係が表れている。しかも、

¹ 谷釜尋徳、『スポーツの日本史』、吉川弘文館：東京、2024、48-49頁。

² 同上、56-57頁。

³ 同上、83-85頁。

⁴ 岩手県教育委員会「おおの駒踊り」『岩手県の民俗芸能－岩手県民俗芸能緊急調査報告書』岩手県教育委員会：盛岡、1997年、180頁。

⁵ 白石太一郎「日本列島の騎馬文化はどのようにしてはじまったのか」古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会『騎馬文化と古代のイノベーション』（株）KADOKAWA：東京、92頁。

その共生関係を芸能化したものが駒踊であるならば、そこから派生した荒馬にもその関係性が及び、牧での馬産の在り様や日本馬と人の共生関係が荒馬に予定調和的に表現されていた可能性がある。

したがって、次節より日本の馬匹制度と牧での「野馬飼い」や「野馬追い」について詳しくみていくこととする。

第二節 日本における馬の移入と東北への牧の拡大

第一項 日本における馬の渡来と牧のはじまり

馬の歴史について書かれた多くの文献は『魏志倭人伝』の「その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし」という記述に依拠している。それゆえ、日本には元々馬は存在しなかったというのが定説となっている⁶。初めて馬が渡来したのは3世紀前半で、その頃は馬の数も多くなく、積山は「当時の倭人社会にあって牛馬は珍獣とみなされたことであろう」⁷と述べている。その後4世紀末から5世紀にかけて、大量の馬が渡来人と共に日本列島に渡来し、日本国内での生産が進み⁸、馬は急速に日本人の生活にとって欠かせない身近な存在となった。

馬の移入・生産の創始について、『日本書記』の応神一五年の条の中に、百済の王が良馬二匹とそれを飼育する阿直伎を献上し、軽（奈良県橿原市大軽町付近）の厩で養ったという記述があり、これが渡来人による馬生産の創始とみるものも多い⁹。しかし近年の考古学の研究成果から、日本で最初の本格的な馬生産の拠点となる牧が成立したのは、河内平野（現在の大阪府東部）の河内湖東岸部の讃良郡で、生駒山麓の放牧地、馬の祭祀場、馬具工房、管理施設、馬の搬出・搬入の港施設を有していたことがわかっている¹⁰。また、同時期に伊那谷地域（長野県飯田市付近）や上野地域（群馬県榛名山麓付近）にも渡来人が移住してつくった牧があり、東国の馬が畿内に運ばれた形跡が見られることから、ヤマト王権が馬の安定的供給を確保するため、東日本から近畿地域までの複数の牧で役割を分担させる、広域分業生産システム＝馬生産システムの実現を目指したとされている¹¹。右島も畿内（ヤマト王

⁶ 久慈勝男『日本馬と人の文化史』文眞堂：東京、2016年、p.18。蒲池明弘『「馬」が動かした日本史』文藝春秋：東京、2020年、12頁。

⁷ 積山洋「日本列島における牛馬の大量渡来前史」栄原永遠男編『日本古代の王権と社会』塙書房：東京、2010年、79-80頁。

⁸ 白石、前掲書、91-103頁。久慈前掲書、51-5頁。

⁹ 久慈、前掲書、36頁。安田初雄「古代における日本の放牧に関する歴史地理的考察」『福島大学学芸学部論文集 社会科学 10(1)』福島大学、1959年、1頁。

¹⁰ 千賀久「日本に伝えられた馬文化」、右島和夫監修『馬の考古学』雄山閣：東京、2019年、12-21頁。

¹¹ 千賀久「渡来系移住民がもたらした産業技術－畿内地域の鍛冶生産と馬生産」吉村武彦・吉川真司・川

権)と伊那谷や上野地域における馬匹生産が直接連動している可能性は高いとして、それらの地域をつなぐ古東山道ルートが存在したことを指摘している¹²。

また、山口によると甲州にも古代から牧が存在し、そこではかなりしっかりとした馬の生産管理がなされていたことを伝えている。日本の古代における馬を飼育する方法には繫飼(つなぎがい)と放飼(はなちがい)の2種類があり、更に放飼には限定放牧と自由放牧があった。限定放牧とは柵・堀・土塁などで外部と区画した範囲で放牧する方式で、自由放牧は山野・河原などで自由に放牧させる方式で、繫飼と放飼、限定放牧と自由放牧は固定的なものではなく、状況に応じて使い分けられていたようだ¹³。牧での1年間の作業について、山口の解説を引用する。

一年の最初の大きな作業は、正月(旧暦、以下同じ)に行われる放牧地の野焼きであり、草の生長を促す効果があった。初夏四月になると、自由放牧に出していた牧馬を、牧の区画内に集める狩り込めの作業がおこなわれる。いわゆる野馬追いのような形で、自由放牧範囲の牧馬を駆り立て、区画内に追い込む作業である。狩り込められる牧馬の中には、その春に生まれた仔馬を連れた母馬の姿も見られたであろう。夏・秋の間、牧馬は区画された放牧地で放牧された。初夏の交配期には牝牡別の区画に分けられ、責課の牝馬は種馬との交配がはかられた。牝馬の中に種馬を放したり、あるいは種付け場での交配が行われたと思われる。夏の間には、一部の繫飼馬の冬・春の飼料とするための牧草を刈り取り、蓄える作業もおこなわれた。秋の終わりの九月になると、全牧馬の点検作業が行われる。牧の周辺から多くの人手が集められ、各馬におかれている焼印によって所属が確認され、毛色や年齢などの登録が行われた。新たに二歳となった仔馬はこのとき牧馬として登録され、焼印がおされた。これと同時に、四歳以上の牡馬から貢馬を選別する作業も実施された。貢馬に適するとされた馬は、こののち調教を施されることとなる。その後、冬を迎えると牧の区画が開放され、調教中の貢上予定馬や種馬を除き、牧馬の多くは自由放牧に出される。¹⁴

以上のように、季節によって自由放牧と限定放牧を使い分け、交配も自由交配に任せるだけでなく種付け場も設置して計画的に行われてきたことがわかる。そして、秋には牧ごとに頭数が点検され、毛色や年齢などの登録が行われ、焼印が押された。また、この当時から貢

尻秋生編『シリーズ古代史をひらく 渡来系移住民－半島・大陸との往来』岩波書店：東京、2020年、130-134頁。

¹² 右島和夫「古墳時代における古東山道の成立と馬」右島和夫監修『馬の考古学』雄山閣：東京、2019年、154-163頁。

¹³ 山口英男「御牧の成立」『山梨県史 通史編1』山梨県：山梨、707-708頁。

¹⁴ 同上、709-710頁。

馬として牡馬が選別されている。次に東国への牧の広がりについて述べる。

第二項 東国への牧の広がり

畿内から始まった牧はその後全国に拡大し、6世紀後半には東国地域が他地域を凌駕するようになったと言われている¹⁵。前項の古東山道ルートで信州から上州、そして武蔵や奥州へと広がり¹⁶、7世紀末には古代から近世に至るまで馬産地として有名な糠部（岩手県北部と青森県東岸部）まで牧が広がった¹⁷。したがって、この時期に広がった牧が荒馬の原風景となる牧を創り出したと考えられる。

では、荒馬が生まれた東北地域の牧はいつどのようにして開発されたのか。

東国に多くの牧がつくられたことに関して、蒲池は、古代日本の東国には馬のエサとなる天然の草原が多くあったことと、台地や谷間など天然の牧に利用できる地形が豊富だったため、多くの牧がつくられ馬産地になったという論を展開している¹⁸。草原については、日本は火山大国であると同時に急流の川が多ので、火山の周辺には広い「火山性草原」が、急な河川の周囲には氾濫によってできる「氾濫原草原」が広がる。このような地域には黒ボク土という黒っぽい土が滞積し、この土は農業には適さないがその黒ボク土が分布しているのが信州、上州、関東平野、岩手県北部から青森県、九州南部地方に多く、それらの地域には広大な草原が広がっていたという。そしてそこがまさに古代から牧がつくられ、馬産地と呼ばれている場所であったと主張している。それゆえ、蒲池の説が正しければ、東国は豊富な牧草地を抱えていたことから日本に馬の移入が始まった直後から多くの馬が飼育され、国家政策にとって重要な馬匹生産の拠点として発展したということになる。こうして、荒馬が踊り継がれるようになる東国は、有数の馬産地として知られることとなった。

第三項 農地開発と牧の拡大

加えて、安田や佐藤、入間田は、農地開発が東国への牧の拡大と関係していることを指摘している。安田は、奈良時代に牧飼が普及したことと合わせて、「牧とは一定の土地を劃し、家畜をかうために垣をめぐらしてある地所をさすが、その維持経営は容易ではないから、官

¹⁵ 山口英男「御牧の成立」『山梨県史 通史編 1』山梨県：山梨、689頁。

¹⁶ 入間田宣夫・横濱道成・諫早直人「馬文化の発展経路」『日本馬と人―埒を越える十二の対話』東京農業大学出版会：東京、104-135頁。

¹⁷ 杉山陽亮「北方の馬産地―糠部地域における馬産の一考察―」、入間田宣夫・谷口一夫編『牧の考古学』高志書院：東京、199-210頁。

¹⁸ 蒲池明弘『「馬」が動かした日本史』文春新書：東京、2020年、9-37頁。

又は王公諸臣等の豪族がこれを経営した」¹⁹と述べている。前の項で触れた河内の牧や伊那谷・上野の牧、山口が解説した甲府の牧などは諸臣による運営管理が行き届いていた牧であったと考えられる。しかし、全国に広がった牧の全てがそのような運営をしていたわけではなかった。平安時代になると、破損した馬柵の修繕ができずにそこから馬が逃げたり、盗難が起きたりすることもあったという²⁰。それらを完備して管理を行うような令も出されたが、当時は天皇の命を受けた勅旨牧であっても馬柵が不完全であったり壊れても修繕されなかったりすることがあり、財力がない豪族は牧経営から手をひかざるを得なかったと考えられる。このように馬が柵を超えて、逃げ出すケースは人による運営管理上の問題とも直結するが、財政的理由により結果的に馬柵の修繕ができない以上、逃げ出す馬と管理しようとする人との間での格闘を物語るものでもある。それゆえ、こうした状況は荒馬と呼ばれる風流との関係性を想起させる歴史的背景も伝えている。

また、周りが牧草地であれば被害は小さくて済むのだが、人口が増え、牧の近くの農地開発が進むと、逃げた馬が田畑を荒らす被害が増え、場合によっては廃牧が要請されることもあった²¹。佐藤は『続日本紀』『日本後紀』などに書かれた廃牧の記述から、牧が廃止された後の土地の利用方法に着目し、牧が荘園に転化された可能性を指摘している。牧にはその運営を支える牧田が附属し、それは牧の内部における開発を支える財政的な基盤でもあり、広大な土地を囲んで設定される牧には開墾可能な土地が多数あり、集約的な土地利用の必要から牧を廃して開田する場合も多く、荘園に転化する可能性を内在させていたとしている²²。

入間田は、このような経緯を経て、牧内や牧周辺の農地開発が進むにつれて、牧が東国に広がりさらに本州の北側へ広がったことを指摘している。人口が増え農業開発が進むと、牧の近くや牧内に農地がつくられる。すると馬が農地を荒らさないように、そこから離れた所に牧を移す。更に農地開発がされるとそれと干渉しない場所や地域に牧を開く。こうして信州から上州、上州から武蔵や房総、そして奥州へと牧が広がり、最後は本州の北端に馬産地ができあがったと説明されている²³。

さらに、安田は牧がつくられた地形は、氾濫しやすい河畔の近くだったり、水持ちの悪い砂礫質の扇状地だったり、農業に適さない場所であり、牧の中でも農業に適している場所は農地に転用され、新たな牧がつくられたとしている。前項で蒲池が、東国には農業には向

¹⁹ 安田、前掲書、3頁。

²⁰ 同上、10-12頁。

²¹ 同上、10-12頁。

²² 佐藤、前掲書、9-17頁。

²³ 入間田ら、前掲書、125-128頁。

かないが豊富な牧草地が多く、また台地や谷間など天然の牧に利用できる地形が豊富だったことを述べていたが、これは安田の指摘とも合致する。つまり、東国には元々馬のエサとなる草原が豊富にあったため、そこに牧がつくられるのは必然のように思われるが、その広がりの中で農地が増えていったことも見逃せない。馬と人が上手く共存するために、牧や農地は工夫の上につくられていったと考えられる。それゆえ、東北以北の地が馬産地となるには、牧の管理と農地開発との均衡が密に関与したと捉える必要があるということになる。そして、自由放牧された馬が農地に進入することを避けるために工夫された共存の在り方は、荒馬という風流を生む前提に影響を与えた可能性がある。このことについては、次節の「野馬」との関係性を踏まえて、後段にて、まとめて論じることとする。

第三節 日本における馬生産の特徴―野馬と荒馬

第一項 自然に任せた馬の生産管理

日本の牧における馬の生産について、白石は「前近代の日本においては、五世紀初頭頃に百済や加耶から馬の生産技術が伝えられて以来、十九世紀に欧米から新しい馬生産の技術が伝えられるまでのあいだ、古代・中世・近世を通じて基本的には同じような原始的な技術で馬の生産が続けられていた」²⁴と述べている。山口も「史料から実態の知られるこの時期の牧の多くは、乗用馬の生産・飼育をおもな役割とするものであり、その性格は牧の出現以降さほど大きな変化はなかったと思われる。とすれば、牧の形態においても年代を超えて共通する点が多い」²⁵としている。前節第一項でみた甲州の古代牧の馬匹生産は適切な管理態勢の下にあったが、管理が行き届いた牧は減少し、その形態はそれ以降大きく変わっていない。例えば、以下に示す白石が解説した江戸時代の下総佐倉牧では馬を放し飼いにし粗野な生産方式をとっていたことがわかる。

これらの牧の馬はすべて野馬^{のんま}と呼ばれ、飼放ちで馬を自然繁殖させる粗放な生産方式であった。草が枯れる冬場にも、雪でも積もらなければ飼料の補給もされなかった。これらの野馬が畑に出て農作物を荒らさないように、牧の周囲には高さ三メートル前後もある野馬土手がめぐらされていた。年に一度、田植えと麦刈りが終わった、今でいえば六月の終わり頃、野馬狩りが行われる。多くの農民が動員され、牧士と呼ばれた牧の管理者の指揮のもとに、若駒を捕獲するのである。そのための牧には「込め」と呼ばれる野馬を追い込むための土手

²⁴ 白石、前掲書、136 頁。

²⁵ 山口、前掲書、690 頁。

で囲まれた施設がつくられていた。この時捕獲されるのは三歳くらいの馬で、三歳未満のものは捕らえられてももう一度野に返される。また三歳馬でも特に勢いの良い馬は、繁殖用ということでこれも野に戻された。²⁶

上記の引用文に示した通り、「野馬」とは牧で放し飼いにされている馬を指す。牧は土手を盛る程度の自然の地形を利用し、年に一度、馬を追い込んで捕らえる野馬追^{のまおい}が行われている。これも古代牧と同様であった。注目すべきは日本の馬匹生産は自然繁殖で行われ、人為的な介入なく行われていたことである。その繁殖と生産の特徴や様子について、入間田は平安時代から名馬の産地として有名だった糠部の牧の例を挙げ、去勢をせず、蹄鉄も打っていないことを以下のように示している。こうした去勢していない馬と人との共生関係は、世界の多くの地域とは異なり、荒馬と呼ばれる風流を生み出す前提に関与している可能性がある。以下の一節は野馬追の際の格闘の様子を示し、風流荒馬が牝馬との関係性を描いていることの証左につながるように思われる。

毎年秋に、野馬追といって、柵で囲んだような袋状の一カ所に馬を追い込むのですが、そのときに捕まえるのは二歳の牡だけなのです。牝は一切使わない。これが日本の馬の扱い方の特徴でもあって、牡を取って、ただし父馬といって、種付け用に立派な馬を一頭だけ残すのです。だから普段、牧場にはどういう馬がいるかというと、一頭の立派な成長した牡馬と、あとは牝馬と、二歳以下の子どもがいる。秋になると二歳の牡を捕まえて、それぞれの牧場の監督というか、取りしきりをしている南部氏などの武士が、自分たちの館の近辺に二歳の牡を連れてきて、自分の牧場のブランドの焼き印を押すのです。²⁷

牡はオス馬、牝はメス馬を意味し、春の繁殖期になると群れの中で繁殖行動が起き、やがて仔馬が生まれる。上記は、その仔馬も群れの中で成長し、秋の野馬追の時に生後2年、2歳になっている牡馬（若駒）だけを捕まえ、若駒は自分たちの牧の焼き印を押される。野馬追では若駒は捕まえられるが、種馬として1頭だけ牡馬が残された。この選別も血統などで選んだり血を混ぜたりという人為的なことはせず、おそらく体格が大きい馬や1番元気のいい馬を残すという、自然に任せた方法が採用されていたことがわかる²⁸。

この糠部の牧での野馬追の様子やそこに至る過程は、荒馬と同じく作り駒をつける駒踊に大きく影響を与えた可能性がある。

²⁶ 白石、前掲書、136-137 頁。

²⁷ 入間田ら、前掲書、112 頁。

²⁸ 同上、128-132 頁。

第二項 日本馬の気性の荒さとその御し方

幕末になると、日本にも西欧人が到来し、彼らによる日本の生活や文化について記録した史料が多く残されている。それによると日本馬は欧米人に評判が悪く、例えば、プロイセン王国の外交官フリードリヒ・アルブレヒト・オイレンブルクは日本の馬について次の様に批評した。

馬は小さく体格が悪く、^{だくあし}跑足やギャロップは多くやるが、^{はやあし}速歩はいやいやながらかうじてする。しかし、けわしい斜面の道や多くの階段は至る所にあるので、駆け上がることは非常に長じている。騎乗するのは牡馬であるが、常に注意深くしていなければならない。なぜなら、ほとんどすべての馬はかみつく癖があり、また互いに歯や蹄で喧嘩するからである。

29

上記の記述からも、元々の馬は西洋の馬よりも小柄であり、かつ乗馬の基本的な歩法は「常歩」、「速歩」、「駈歩」の三つから成るが、「跑足」や「ギャロップ」はそれらには含まれないため、調教された歩法を欠いていることの指摘にもつながっている。「速歩はいやいやながらかうじてする」という表現からも、調教された歩き方に慣れていなかったことも伺われる。さらに乗馬用の馬は牡馬であったことがわかる。また多くの馬は気性が荒く、上手く操作できていないとある。この原因は去勢がされていないことと調教がされていないことの二つが考えられる。しかし、斜面や階段を登ることには長けていて、その強靱さには一目置かれている。

また、フランス人のリュドヴィック・ド・ボーヴォワールが、世界一周旅行の途中で日本に立ち寄った時のことを記録した『ジャポン 1867 年』には、旅行中に見かけた馬の様子が次のように書き残されている。

藁や米を積んだ馬と絶えずすれ違うが、内陸部の奥まった田舎から出て来る馬は、足にわれ沓をつけ、束縛を嫌う、野生の荒く激しい気性のままに（中略）われわれがすれちがったひどい暴れ馬は、われわれヨーロッパ人を見るや否や、後脚で立ち、後ずさりし、傍らの家に大穴をあけ、通行人を踏みつぶし、積荷をひっくり返した。そして、逃げしなに度を失っ

²⁹ フリードリヒ・アルブレヒト・オイレンブルク、中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』雄松堂書店、1969、117 頁。

て手の出せない気の毒な馬方をひきずったのである。³⁰

上記の中で、荷物を運ぶ駄馬の様子を「絶えずすれ違う」と記載しているように、馬の使用頻度は高かったことがわかる。馬は蹄鉄ではなく、馬用草履を履き、これらの馬もほとんど調教されることなく気性の荒い馬が多かったことがわかる。傍らの家を壊したり、通行人を踏みつけたり、荷物をひっくり返すなどの傍若無人ぶりが繰り返されていたが、馬方もそれを制御できない様子から、馬を調教してコントロールしようという考えがなかったか、その技術を持ち得なかったとも捉えられる。

それでは、日本人はこのような気性の荒い日本馬にどのように乗り、馬を自分の行きたいところへ導いていたか。このことについては以下に示す入間田の分析が示唆的である。

馬を徹底的に調教して使いこなすというよりも、むしろ馬との、乗馬の技術もそうですが、いろいろな気配りをして、馬をうまく調教する。装備よりも、馬と仲よくなる。

人馬一体。それで、馬に気に入られて乗せてもらうのがうまい乗り手というのが日本の馬の特徴です。(中略) 馬とのメンタルな繋がりを極端に重視しているから、去勢や蹄鉄を含めて、いろいろな意味で、馬に一切、人為的な操作をおよぼさないということがあったというのがひとつ。当然、馬肉も食べない。³¹

上記は馬に気配りをし、馬とメンタルな意味で繋がりを持ち、馬が同意すれば、馬が主人の行きたいところへと連れていくといった対等性を示している。こうした馬の御し方は、馬を支配するのではなく、愛情を持って接することで、人の側を馬に理解してもらうことに近い。こうした乗馬法は世界的に共通する面もあるが、多少馬がいうこと聞かなかったり、荒れ狂って人に多少の害を及ぼしても、日本人は比較的そのことに腹を立てたりせず、おおらかに見守り、再び馬との繋がりに戻れると自負していたことがわかる。こうした馬と人との関係性は風流としての荒馬の流儀にも影響を及ぼした可能性がある。

つまり、このように、日本の馬匹生産は、日常生活の中に多くの馬が見られるほどの生産力を示しつつも、多くの馬は調教されておらず、暴れて、手がつけられないといったことも日常的であったと考えられる。一方で斜面や階段を駆け上がる強靱さは外国人にも一目置かれ、そういった力強さを引き出すためにも、日本では牡馬の去勢は行われず、自然な荒々しさを共存させようとしていた。それゆえ、こうした荒々しさをそのままに残した日本特有

³⁰ リュドヴィック・ド・ポーヴォワール、綾部友治郎訳『ジャポン 1867 年』有隣堂、1984、50 頁。

³¹ 入間田ら、前掲書、133 頁。

の馬を想定しつつ、風流荒馬の中で表現された馬と人との駆け引き、祭りという虚構の世界の中で繰り広げられた表象や人々の思いを捉える必要があろう。

次に「男馬」、「女馬」の観点にも踏み込んでみたい。

第三項 盛岡藩にみられた「男馬」「女馬」の関係

江戸期の馬と人の関係は兼平賢治の研究の中で詳しく描かれている。兼平の研究は盛岡藩が管理していた九つの牧（南部九牧）で生産された南部馬を対象としており、特に馬の性別に着目して「男馬」、「女馬」という観点から馬の一生を考察しているところが注目に値する。兼平は馬の性別による馬の一生について、次の様に述べている。

生まれた際に、牡馬（男馬）に生まれるか、牝馬（女馬）に生まれるか、百姓に飼われて農馬として一生を過ごすか、武士に飼われて軍馬として一生を過ごすか、さらには、権力者の「御馬」となるか、御の字を冠されることなく「馬」で過ごすかなどによって、江戸時代の馬の一生は随分と違ったものとなった。³²

この文章には、馬も性別や能力によって選別され、馬社会の役割が与えられて一生過ごすということが端的に表現されている。盛岡藩では、牡馬を「駒」、牝馬を「駄」と呼び、区別していた。合わせて、藩の牧で飼育されている馬を「野馬」、領民が所有し飼育している馬を「里馬」と呼んで、区別していた³³。

牡馬（駒）に生まれた場合、軍馬に選ばれる可能性が生じる。盛岡藩の牧でも、年に1度、秋に野馬追（盛岡藩では「^{のとり}野取」とよんだ³⁴）によって2歳の牡馬が捕らえられ、その中で「上・中・下」の三等級に区分けされた。上馬になると藩の厩に引き取られ、「御馬」として調教され、軍馬として過ごした。中馬は武士に買い取られて軍馬となる場合や町人や農民に飼われて駄馬や農耕馬になる場合を指した。下馬は基本的に他藩に売られたようであった。里馬に関しても牛馬改役が管理し、二歳駒は特に厳密に管理されたようである³⁵。

さらに、牝馬に生まれた場合、牧の場合はそのまま飼育され、繁殖能力を備えると母駄として扱われた。その中で老馬・悪馬・病馬・不妊馬は「^{よけうま}除馬」として淘汰された。里馬においては、生まれた牝馬は領民の所持とされ、繁殖馬・農馬・運搬馬として使用された。藩は牝馬についても厳しく管理していた。それは良い母駄が領内から流出することを防ぐため

³² 兼平賢治『馬と人の江戸時代』吉川弘文館：東京、2015、73頁。

³³ 同上、12頁。

³⁴ 同上、75頁。

³⁵ 同上、73-77頁。

で、馬の質を保つために駒と駄が厳しく管理された³⁶。

また、駄は農民所有とされることから、村の馬は牝馬の占める割合が高かったと言える。兼平が示す明治前期の例からも盛岡藩内にあった郡では圧倒的に牡馬よりも牝馬の方が多かったことがわかる。このことは、村の生活の場では牝馬が活躍していたことを示している³⁷。このような盛岡の場合は以下に述べる津軽の場合と正確には同じと言えないにしても、東北地方では中馬の中でも牝馬が村祭りの荒馬ともっとも関わりが深い馬となった可能性を示していよう。

さらに、農村での馬の役割との関わりからも考察してみたい。寒冷な東北では発酵性の高い馬糞が肥料として適しており、肥料となる厩肥を得ることが主で、馬を耕作に積極的に利用するようになったのは、国策によって推奨される明治時代になってからで、定着に時間がかかったと言われている³⁸。藩政期の農村では良馬を生む繁殖馬としての役割が最も期待され、次にモノを運ぶ運搬馬としての役割を担った。したがって、藩政期から江戸末期にかけて馬に期待された役割も変化していることから、荒馬は風流である以上、正確にその時々の変化を映すものではないにしても、かつての繁殖馬、運搬馬としての期待、幕末から明治以降になって農耕馬としての役割を混在させつつ、第二章で区分した様々な形態の垂流を派生させつつ踊り継がれた可能性が考えられる。これらは津軽とも共通する側面があったが、次に津軽固有の馬政と「男馬」、「女馬」について言及しておきたい。

第四項 津軽藩における馬政と「男馬」「女馬」

津軽藩においては産業としての馬産はふるわなかった³⁹。津軽藩にも藩営の牧が五つあり、牧の管理のための役職を置いて改良と繁殖に努めていた。しかし、晩年は牧馬の事業は振るわず天保以降は四つの牧が廃止となった⁴⁰。では津軽藩には馬がいなかったのかというとそうではなく、津軽藩では幕末になると馬は農耕に直接結びついていて、農業経営のためには欠かすことのできない存在になっていた⁴¹。

安政5年に堂野前村（現在の青森県田舎館村堂野前）農民、中村喜時が書いた農書『耕作

³⁶ 同上、77-80 頁。

³⁷ 同上、80-81 頁。

³⁸ 同上、95-96 頁。

³⁹ 新編弘前市史編纂委員会編『新編弘前市史 通史編2（近世1）』弘前市市長公室企画課：弘前、267 頁。

⁴⁰ 青森県農地改革史編纂委員会『青森県農地改革史』農地委員会青森県協議会：青森、1952、41 頁。
[『復刻版青森県農地改革史』不二出版：東京、1990。]

⁴¹ 青森県農地改革史編纂委員会、同上、42 頁。

嘶』⁴²では、農業に1番大事な農具として「馬、鞍共」⁴³が挙げられている。また、「代かき」の項では、馬を大切にすることが良い稲を育てることにつながることを次の様に述べている。

凡農家は薪取にも、御収納米納るにも、御駄下而も、田畑の肥草溜るにも、家の葺萱用意までも馬の力にて候。悪敷馬でも飼立肥れば達者する者ぞ。攪擾能ければ稲能栄へ、田の草立ず耕作に人手間入らず、能稲を取るは馬の力也。随分馬を勞りて飼料を能し玉へ。⁴⁴

およそ農家は、薪を取るにも、御収納米を収めるにも、また御駄下げをするにも、田畑の肥料草を集めるにも、屋根の葺萱を準備するにもすべて馬の力を必要とするものである。わるい馬でも、大切に飼育して肥えれば、力がついてよく働くものである。掻きこなしがよければ稲はよく繁茂生育し、田の草も生えず、耕作に人手間がかからず、よい稲をとるのは馬の力である。十分馬をいたわってよい飼料を与えてほしい。(現代語訳・稲見五郎)⁴⁵

この記述から馬が代かきだけでなく、農家の様々な仕事に馬の力を必要とされていたこと、愛情を持って馬に接することで、馬が力を出してよく働き、それがよい稲の生育にもつながると人々に認識されていたことがわかる。このことは、荒ぶれた馬でも、人との関係性次第で、役に立つ馬にもなれる可能性に触れており、『耕作嘶』の解説に「著者中村喜時自らの経験だけでなく、同じ地域の耕作に熱心な人たちの意見もとり入れていることが大きな特色である」とある通り、津軽地方の農民はどうすれば馬と折り合いよくやれるのかという経験値を共有し、その心得は地域の風流荒馬にも表われたと考えることができよう。

また、天明から寛政年間にかけての津軽の人々の生活の様子を絵と文で綴った『奥民図彙』⁴⁶には、馬に荷物を積んで運ぶ「小荷駄」について書かれた箇所がある。

小荷駄 駄馬ト云、^{ギョ}馱スル馬^{ショウメ}乗馬ト云。

牝牡トモニツカウトイヘトモ牝馬多シ、カルユヘニソウヤク馬ト云、雑事ノ役ニツカウト云事ナルヘシ。牡馬ヲ駒ト云、牝馬ヲゾウタト云、按雑駄ト云事ナルヘシ。

如図一人ニテ馬四五匹ヲ牽、牝馬ユヘソノ子馬^{コムマ}母駄ニシタイテ行、母駄五匹ヲヒクトキハ

⁴² 中村喜時『耕作嘶』1858。[『日本農書全集1』農山漁村文化協会：東京、1977年、pp.13-121。]

⁴³ 同上、40頁。

⁴⁴ 同上、63-65頁。

⁴⁵ 稲見五郎「耕作嘶（現代語訳）」『日本農書全集1』農山漁村文化協会：東京、1977年、63-65頁。

⁴⁶ 比良野貞彦『奥民図彙』1789年頃成立。[『日本農書全集1』農山漁村文化協会：東京、1977年、133-212頁。]

子馬五匹アリ、一人ニテ十匹ノ馬ヲ牽カコトシ。子馬ハ牽繩ナクハナチヲクユヘニ、草ヲハミ道ニオクレ、母駄ノイナ、ク声ヲ聞跡ヨリ走り行モアリ、道ヨリナドスル事ヲ道草スルト云ハ此事歟。

オモツナノ鼻ノ上ニツクル繩ヲ牽ナリ、是ヲハツナト云、鼻繩ノ略言ナルヘシ。⁴⁷

小荷駄を背につけて使いする馬は駄馬といい、また乗って馭する馬を乗馬^{しょうめ}という。このように、馬は使いかたによって呼び名がちがうのであろう。この駄馬には牝馬とも使うが、概して牝馬の方が多いいという。このような駄馬をソウヤク馬（雑役馬）という。つまり雑事の役に使うということであろう。牝馬を駒といい、牝馬をゾウタという。按ずるにこれは、雑駄ということであろう。

この図は子馬を伴った母馬が、運動にでも外出したのであろうか。あるいは母馬に鞍があるから、小荷物を運んでの帰りでもあろうか。いずれにせよ母馬は全部繋がっており、一人の管理人が全体を引率しているのである。

管理主一人で母馬四、五頭も牽くと、牝馬であるから子馬がひょこひょこ^つ従ってくる。母馬にそれぞれ一頭の子馬がいて、母馬の倍の数になってなかなか賑やかである。子馬は放しておくので、母馬からはぐれて道草をすることもあり、また母馬のいなく声をきいて慕いよってくるのもおり、なかなか情味豊かな光景である。

馬をひくときは「ヲモツナ」の鼻の上につけた繩をひくのであるが、これを「ハツナ」といい、鼻繩の略言であらうという。（解説／森山泰太郎・稲見五郎）⁴⁸

この書物は津軽藩江戸定府の侍であった比良野貞彦によって書かれた。津軽でも牝馬を「駒」と呼び、牝馬は「雑駄」と呼んでいたことがわかる。また、駄馬や乗馬には牝馬も牝馬も使うが、牝馬が多かったことも記されている。つまり、武士が使う軍馬には牝馬が選ばれ連れで行かれるので、農民や町人と入った庶民の生活の中にある馬は牝馬が多かったことを示している。これらの馬を四、五頭、子馬を連れれば最大十頭もの馬を1度に牽くこともあったが、これは牝馬だからこそできたと考えられる。前項で論じた通り、日本の牝馬は去勢していないため荒々しく、周りの馬に噛みついたり喧嘩をしたりする恐れがあり、複数の馬を1度につないで牽くことはほとんど無理であった。しかし、牝馬であればこのように一人の小荷駄でも複数の馬を連れることは可能であった。このことから、庶民の生活には牝馬（女馬）が身近でなくてはならない存在であった。

⁴⁷ 同上、156頁。

⁴⁸ 森山泰太郎・稲見五郎「奥民図彙・解説」『日本農書全集1』農山漁村文化協会：東京、1977年、215-216頁。

以上をまとめると日本における馬産や馬政の特徴、とりわけ、東北地方、津軽の人々と馬の関係はおおよそ次のように特徴づけられる。

1. 日本の馬産は、牧における自然放牧と自然繁殖を基本とする野馬飼いが特徴で、自然の風土の中で風雪に耐え、厳しさの中でも強く生き抜く野性を育てようとしていた。
2. そういった環境で育った野馬は野性味が溢れ、簡単には人にも慣れない荒々しさを持っていた。その荒々しさは戦場での勇猛果敢な姿と表裏一体であり、その荒々しい野馬＝荒馬を乗りこなすことが武士の嗜みであった。
3. 日本の馬産のもう一つの特徴は、牡馬の去勢をしなかったことである。去勢をすると馬の気性は穏やかになり調教などしやすくなるようだが、それによって野生は削られ軍馬として必要な荒々しさも失われてしまう。また、日本は、物事に手を加えてコントロールしようとするよりも、自然の形や流れを大事にしようとする気質がある。それも馬の去勢を導入しなかった根底にあった。
4. 牡馬が軍馬として武士のものとなっていたので、必然的に町人や農民などの庶民が飼っていたのは牝馬であった。したがって、庶民の周りは牝馬がいるのが日常であった。
5. 牝馬は牡馬と比べれば気性が穏やかで、1人で複数頭を曳くこともできたが、中には気性が荒く、思い通りに動かすことができない馬＝荒馬がいた。
6. 野生を備えた荒々しい軍馬としての荒馬も、庶民に飼われている気性の荒い荒馬も、馬に愛情を持って接し、人の思いを馬に理解してもらうことを前提とした御し方によって、馬との良好な関係を築き、共に行う労働や作業を可能としていた。

第四節 馬と人との関係と荒馬の流儀への影響

以上のことは第二章で論じた荒馬の圏域における各々の流儀と以下のような対応関係にある。まず第二章で見たとおり、南津軽地方の荒馬は手綱取りが付かない単騎型⁴⁹で、その芸態から「騎馬」を表現していると考えられる。この圏域の最南端に位置する碓ヶ関久吉地区には「久吉駒踊り」が伝承されている⁵⁰。また、この圏域の典型として取り上げた柏木町荒馬踊は、かつては「荒駒踊り」と呼ばれており、「荒駒」が「荒馬」に転化した形跡が残

⁴⁹ 本論文、第二章、第四節、図2・図3を参照。

⁵⁰ 青森県教育委員会「久吉駒踊り」『青森県民俗芸能緊急調査』青森県：1996、pp. 86-87。

っている⁵¹。つまりこの圏域の荒馬は駒踊から派生したと考えられる。駒踊は牧での野馬追いを模した芸能と言われている。野馬追いは2歳になった若駒を捕らえる行事で、この若駒はこのあと武士の元で軍馬となる⁵²。つまりは、駒踊の表象は武家に必要とされる軍馬との関係性であることが多く、やがて軍馬となる牡馬である場合が主流である。その風流としての比喻の根底には、野生を孕んだ荒々しさがあった。駒踊が南津軽地方に伝わると、第一章で論じたように、一丁田と高屋の虫祭において、行列の派手さや演出を競い合う芸態として取り入れられた。しかしその際、一丁田と高屋の虫祭の中では「あら馬」と呼ばれていた⁵³。このように駒踊が荒馬となる転化は稀ではない。また、庶民にとって身近であったのは軍馬ではなく、牝馬であったことから、ときに脅威であった軍馬は武士階級を想起させることから憧れの対象でもあった。ゆえに、身近な農耕馬としての共生関係にあった牝馬も、憧れの対象であり、かつ暴れ馬の危険が伴う牡馬も共に、祭りのなかでは荒馬として愛着をもって表現されたと考えられる。特に、後者の牡馬は祭りや年中行事の際、第三章で論じた通り、日常との地位の逆転が伴うことで、荒々しい牡馬を表現した可能性も考えられる。つまり、南津軽地方の荒馬は、駒踊を媒介としながら「騎馬」の表象として踊られていた。なお、虫祭を含む年中行事は、祈願より民衆の娯楽となることで、動物の模倣が面白おかしく演じられ、お囃子に乗った踊りとして楽しまれた。

南津軽地方から伝播した荒馬は、北津軽地方では新たな表象を獲得する。この圏域の荒馬は虫送りの行事の中で踊られるが、津軽の虫送りは藁で蛇や龍を模した模型（「ムシ」と呼ばれる）を作り、それを担いで村を練り歩き、稲虫退散や五穀豊穡を祈る呪術的行事であることについては、第二章においてすでに詳述した。この地方の荒馬は、一頭の荒馬に二人の手綱取りが付き、即興的な踊りが特徴的である。この「手綱取り」という荒馬を構成する祭りの中での役者の存在は、本章で論述してきた馬と人との共生関係を象徴する役柄を演じているといえる。しかも、そこに即興性が伴うことは、踊り手の創意工夫による多様な表現が、その年に馬と人との間で生じた出来事や思い出など、個々の関係性を表現する上での自由度の保証に思われる。相内の荒馬では、行列の途中で動かなくなる馬やその場に寝そべる馬が手綱取り役を困らせる⁵⁴。庶民にとってはこの思い通りに動いてくれない馬が荒馬らしさであった。この荒馬に愛情を持って、粘り強くかわり、再び手綱取りとの息の合った動きを取り戻していく場面は、人と農耕馬との関係性を表現する重要な場面と解釈できる。金

⁵¹ 柏木町荒馬保存会、「柏木町荒馬踊り」柏木町荒馬保存会提供資料、作成年不明、1頁。

⁵² 兼平、前掲書、72-77頁。

⁵³ 武田正三郎敬之『山一 金木屋又三郎日記』1862年頃成立。（復刻版：齋藤昭一編『山一 金木屋又三郎日記抜粋編』青研、1995年。）242頁。

⁵⁴ 文化庁文化財部伝統文化課「相内の虫送り」『青森県津軽地方の虫送り-青森県津軽地方の虫送り調査報告書-』文化庁文化財部伝統文化課、2015年、p.48。

木さなぶり荒馬は、かつて金木に民情視察に来た四代藩主信政公が村外れにかかる粗雑な丸太橋の上を、馬を上手に操って颯爽と渡った英姿を舞踊化した踊りと言われ⁵⁵、殿様の騎馬の表現のようにも見える。しかし、元々は新田開発に従事していた農民たちが虫送りで踊っていたもので、民情視察をきっかけに殿様に進言して踊らせてもらえるようになったという由緒から考えると⁵⁶、最初は相内の荒馬の様に農耕馬の模倣をしていた可能性もある。かつてこれに対し、軍馬を象徴する駒踊の場合は、虫送りであっても、多くの場合、手綱取りがつかず、馬が単独で踊るものであった。このことは、現在は殿様の衣裳を纏っているが、本質的には手綱取りと馬の関係を表象した芸能としての踊りであり、荒馬が丸太橋の模型を跳び越える瞬間⁵⁷は馬役の馬と手綱取りを演じる人の演技を通じてまさに「人馬一体」が表現されている。

すでに論じた通り、上磯地方の荒馬には1頭の荒馬に対して女性の手綱取りが付いていた⁵⁸。大川平荒馬は農耕馬を、今別荒馬は騎馬を表現していると言われているが、金木の例と同様に、いずれも「馬と人」との関係性の表象である「手綱取り」が荒馬を構成する上で、最も重要な役割を果たしている。女性が手綱取りに加わるようになったのは比較的新しい時期であった可能性があるが⁵⁹、即興的な踊りから振りが決まり、お囃子に合わせて踊るようになった芸態からも、上磯地方の荒馬が比較的新しく構成された荒馬であることが伺える。

なお、繰り返しになるが、馬は日本人に限らず人間にとってのコンパニオンアニマルであり、最も心的な距離が近い動物であった。特に日本においては、馬を支配するよりも、心を通わせながら乗馬し、駄馬、農耕馬として日本人の生活を助ける存在であった。去勢、蹄鉄、調教なども行われず、馬に乗せてもらう為には馬に気を配り、馬に気に入ってもらえたら、馬が人の心を理解し行きたいところ連れて行ってくれるという関係性をより重視していた。日常生活でも馬がいる風景は東北各地にみられ、津軽地方でもそれは同様であった。棒の先に馬の頭が着いた子ども用の玩具があり、子どもたちは棒にまたがって駆けるだけで、子どもは馬に乗った気分になり、同時に馬の気分で走り回る。荒馬と同様の形態をした駒踊は、

⁵⁵ 金木郷土史編纂委員会、『金木郷土史』、金木町役場：青森、1976、673-674頁。

⁵⁶ 同上、673-674頁

⁵⁷ 本論文、第二章、第四節、図4参照。

⁵⁸ 本論文、第二章、第四節、図6・図7参照。

⁵⁹ 今別物語編集同好会編の『いまべつ物語第四集』の表紙には馬と手綱取りのペアが2組映っているが、手綱取りはどちらも男性であった。記録によると、この写真は昭和11年頃の浜名ねぶた祭りの写真とある。北津軽の荒馬の手綱取りが男性であることを考えても、この時代、手綱取りはまだ男性の役割であった可能性がある。このあと、女性も手綱取りをするようになったと考え、比較的新しい時期にこのような役割分業ができた可能性もある。

馬頭がついた竹馬の玩具から派生したという由緒譚も存在した⁶⁰。馬頭がなくても棒が一本有れば、馬になりきることができる。それほど馬になることは簡単でごく身近な側面もあった。このように身近な道具を使って馬になりきることは、立派な装束を纏い、組織的に踊られる風流としての荒馬の根底にある「馬と人」の関係性の象徴としての模倣遊びの第一歩であったと言えよう。

第五節 小括 ―津軽の荒馬とは何か―

本章では、世界的なホビーホースの拡がりの一端と捉えられる津軽地方における馬と人の関係を明らかにし、日本に馬が移入されるようになったきっかけと、古代から中世にかけて東北にかけて馬産地が広がった理由について論じた。また、日本の馬匹生産の特徴、特に盛岡藩と津軽藩での馬と人の関わりについて述べた。これらの事実と第1章から第3章で明らかになったことは以下のように総括できる。

日本の馬は、大陸から持ち込まれた当初から軍勢力としての役割を第一に求められ、そのため威信財としての側面も重視された。軍勢力の増大には騎馬の増加が大きく影響するため、古くから牧が作られ、野馬飼いによる大量の馬の生産が行われ、貴族や武士といった支配階級はこぞって多くの優秀な騎馬を求めた。

野馬飼いは日本独自の馬の生産方法で、あまり手を加えていない自然の状態に近い放牧地でほぼ放し飼いにして馬を育てる。そして年に1度、野馬追いという方法で放し飼いにしていた馬を集め、その中から2、3歳になった牡馬を選び出して調教し、軍馬として支配階級の基へ送られた。この時、優秀な牡馬は父馬として繁殖のために牧に残した。このような自然の状態で育てることで、「野生」が維持され、戦場でもそうした野生が働くことが期待されていた。そのような環境から、人に慣れず人に従順ではない馬も生まれ、気性が荒く手をつけられないような荒々しい荒馬。こうした牧の厳しい自然環境の中で子馬の頃から育ち、その中で強靱な足腰と野生を身につけ、戦場などの苛酷な環境にも耐え、時には人にも支配されない反骨精神のような気力を持った馬そのもの、またはそのような馬が祭りの中で表象されたように思われる。

しかし、軍馬が荒馬（荒々しい馬）ばかりでは統率が取れず、馬同士のトラブルも頻発するため、乗り手や牽き手のいうことを聞くよう調教し、馬をコントロールする必要があった。西洋の場合は馬を性能よく使いこなすために去勢をし、蹄鉄を打って馬を機械と同じように扱おうとした。一方、日本の場合は馬を人と同じように扱い、去勢をせず蹄鉄も打たずに

⁶⁰ 岩手県教育委員会、前掲書、180頁。

藁草履を履かせた。乗る際も気配りをして馬と仲良くなることで人の意思を通い合わせて上手く乗せてもらおうとしたが上手く通じず、馬がものを壊したり人に危害を加えたりすることもあった⁶¹。しかし、そのような馬の振る舞いに対しても日本人は寛容に対応し、物理的に制御するよりも、馬の気持ちを理解し、馬にも人の心を通じさせようとする相互理解の努力を為し、馬と人との互いの気持ちを通じ合わせることを意味する「人馬一体」が意識された。「人馬一体」は、日本人が目指した馬との共生関係の理想であったが、現実には容易なものではなかったと考えられる。そこに祭りの世界で表象された荒馬の社会的機能が関与したと考えられる。

つまり、荒馬は、地震や台風といった農村社会を壊滅させるほどの前近代的な自然災害とも類似する、人間の力では太刀打ちできない力を持って人間に迫る人智の及ばぬ野生をも表象したため、虫送りの意味とも共通した。それゆえに、畏怖の念を持って祀ったり、できるなら一体となって乗りこなしてみたいという憧れの対象という矛盾する願いを含みながら、土地土地における馬と人との共生関係を「さかさまの世界」を通して表現したと考えられる。

また、去勢をしない牡馬と牝馬が同じ空間にいることを避けるため、軍馬には牡馬が選ばれ集められた。牝馬は軍馬としては用いずに、駄馬や農耕馬として庶民の生活を支えた。牝馬は牡馬と比べると比較的性格も穏やかで、数頭をつないでも暴れたり喧嘩したりすることは少なかった⁶²。そのため、牝馬は庶民にも扱いやすい身近なものであったと考えられる。これに対し、軍馬の中でもより荒々しく、武士も乗りこなすのができない馬は、江戸時代の身分社会の中では、武士をも超越する自然上位の域にあった。こうした荒馬（荒々しい馬）の存在は、ある意味庶民の憧れであり、荒馬（荒々しい馬）を制御できるという願望は、祭りの中でこそ表現できた庶民の理想であったかもしれない。

たしかに、弘前周辺から津軽一円に広がった荒馬は第2章で述べた通り、風流行列の一つとして作り駒を付け、馬の動きを真似して踊られることを共通としていた。しかし、北津軽地方と上磯地方の圏域の場合は、津軽一円に広がる中で、単騎だった荒馬に手綱取りが付くようになっている。さらに言えば、北津軽地方では、1頭の荒馬に対して2人の男性の手綱取りが付く、上磯地方の荒馬には1頭の荒馬に対して女性の手綱取りが付いている。手綱取りの存在がユーラシアのホビーホースダンスにどの程度みられるのかは不明であるが、少なくとも、日本の中では北津軽地方と上磯地方の圏域にのみ見られる特徴的なものであった。手綱取りの存在は、むしろ、日常の風景を自然に体現したものであった。北津軽地方

⁶¹ ボーヴォワール、前掲書、50頁。

⁶² 同上、63-65頁。

の圏域は江戸時代から新田開発が進められ水稻産業とかかわりが深く、明治以降の農業改革で積極的に馬耕を取り入れた地域であった⁶³。そして、第二章において、荒馬は流動的で可変的な文化的総体であったことの詳細を述べたように、各圏域の祭り全体を支配していた様式に溶け込む形で荒馬はつねに変化の中にあった。つまり、こうした自然の驚異に対する呪術の娯楽化や荒々しい馬と可能な範囲で心を通わせ、馬を御し、付き合うという手綱取りに象徴される馬と人との共生関係の痕跡が各圏域独自の変化や進化を通して特徴づけられていったものの総体としての荒馬が津軽地方に広く伝わるホビーホースダンスであったと言える。

⁶³ 大沢泉「明治期における青森県産業振興」『産業文化研究』第31号（青森：青森県教育委員会、発2022年）、31-41頁。

補論 Hobby Horse Dance としての荒馬の教材化の試み

第一節 本論の目的と方法

序章でも触れたように、荒馬は単に津軽地方に伝わる民俗芸能という側面だけでなく、全国の学校教育の場で民俗舞踊教材として用いられてきた側面を持つ。特に、上磯地方の「今別荒馬」を民族歌舞団わらび座が 1950 年代に現地を訪れ踊りを習い、舞台化教材化したことで全国的に有名になった。この意味で、これまでの荒馬教材は「今別荒馬」をベースとし、その踊り方が学習内容の中心にであった。

本論の教材研究では、荒馬を津軽の一地域の踊りの再現に終始するのではなく、世界に広がる Hobby Horse Dance の一つと位置づけ、踊りの中に津軽の人々と馬との共生関係を通じて得られる風流としての文化的奥行をどのように子どもたちに伝えていくべきか、前章までに述べてきたことを踏まえて、新たな荒馬の視座に立った教材化を試みたいと考える。

そのため、前章までに明らかになった荒馬の歴史地理的な特徴から教育内容として適切な中身を勘案し、授業単元として編成した。なお、従来の荒馬教材は、比較的幼児から小学校低学年向けの教材と捉えられてきたが、本研究で明らかになった荒馬の固有性を認識できる学年を考え、小学校高学年から中学生ぐらいの年齢層を対象とした。

なお、こうした教材化の試みについて論じる前に、学校教育における教材としての荒馬に関する先行研究を概観しておきたい。

第二節 先行研究の検討

序章でも論じた通り、学校教育における教材としての荒馬について先行研究には幾つかの潮流が存在した。荒馬は 1960 年代から始まった「民舞教育」の文脈の中で教材として全国の学校現場や幼稚園・保育園・子ども園といった幼児教育の現場に広まった経緯がある。そして、教材としての荒馬は民舞教育の発展史の中で、典型的な教材が生まれ教育実践が展開された。

第一項 わらび座が舞台化・教材化した荒馬

1960 年代から 80 年代にかけて最初に広まったのは、わらび座が舞台化した踊りを教材化した荒馬である。わらび座はその後、民舞指導用の映像教材も出してる。その特徴は、現地の踊りにある振りだけでなく、わらび座が創作した振りも組み込まれ、基本的な「型」を踏まえながらも自分たちの思いを込めて再構成や再創造をすることを取り入れたものであ

った。

当時の民舞教育を牽引していた研究団体の一つである学校体育研究同志会は、わらび座ベースの荒馬の指導についてまとめた書籍の中で、教材観とねらいについて次の6点を挙げている。

- ① 子どもに馬の躍動感を味わわせる目的で、馬だけの踊りとして再構成する。
- ② 「はやがけ」「二つとび」「四つとび」「かもしかとび」といった荒馬の動きそのものを遊び楽しむとともに、二人組や集団で一緒に動いたり対応して動いたりする楽しさを追求させる。
- ③ ひとつひとつの「はね」や「振り」を組み合わせたり、空間構成を工夫しながら、集団で一つの踊りをつくりあげていくことを大切にする。
- ④ 時には新しい「はね」や「振り」をつくりだすのもよい。
- ⑤ 「型」をきちんと踏まえながら、即興的・創造的に踊る荒馬本来のおもしろさを十分に味わわせる。
- ⑥ 自分たちで「馬」を作り踊ることで、イメージをふくらませて楽しく踊らせる。¹

「はやがけ」「かもしかとび」は現地の踊りにはないわらび座が創作した振りである。それ以外にも新しい「はね」や「振り」を創り出すことも許容し、即興的・創造的に踊ることを「荒馬の本来のおもしろさ」と述べている²。

第二項 地元の今別荒馬を教材化した荒馬

しかし、この教材化論の元で「再構成・再創造」が行われた結果、現地に伝わる踊りとは異なる踊りが生まれることに気づいた進藤貴美子は、「手具体操風民俗舞踊」「エアロビクス風民俗舞踊」と批判した³。進藤と同様に再創造に疑問を抱いた教員たちは現地で伝承されている本物の今別荒馬を学びたいと考え、青森県今別町のねぶた祭りを訪れ、その中で習った踊りを教材化した荒馬は次のようなものであった。

現地の今別荒馬の教材化の中心を担ったのは東京民族舞踊教育研究会（以下、東京民舞研）であった。東京民舞研もかつてはわらび座の荒馬を教材としていち早く地元に目を向け、

¹ 高田敏幸・渡辺孝之「第1章 荒馬」『たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞』学校体育研究同志会編、ベースボールマガジン社：東京、1988年、77-78頁。

² 同上、77-78頁。

³ 進藤貴美子「民俗舞踊を学ぶ意味」『たのしい体育・スポーツ 13(4)』学校体育研究同志会、1994年、p.18.

1979年に初めて青森県今別町を訪れている。会員の1人である園田陽一は、自らも和光小学校の教員として地元で習った踊りを教材化し、2年生の子どもたちに指導を行った。園田自身もかつてはわらび座が舞台化した民舞教材を学び実践をしていたが、それに違和感を感じ、この地元に踊りを習いに行くようになってから、踊りの意味や目指すべき指導の方向を定めていた。園田は著書の中で、地元で踊りを習う意味と教材に向き合うことの大切さを次のようにまとめている。

- ① 民舞では、「わらび座」などが舞台用に構成したものと、その元になった地元で伝承されているものが対象とされている。踊りを通して子どもたちの中に育つものを重視しつつ、地元の踊りも理解して指導する。
- ② 学校教育の中で民舞指導をするときには、踊りの地元で伝わる民俗芸能の歴史や由来、踊りの意味、伝承している方々の思いを含めて、一連の地域文化の脈絡の中で捉える。子どもたちには「踊り方」だけでなく、私たちが出会った人々、目にした風景、感じたにおいや味など、伝えられることを伝えていく。
- ③ 民舞には、道具、衣裳、踊りの意味や由来、その地域の生活様式に即した形も指導のプロセスで変化してしまうおそれもある。なぜその動きなのかという根拠を明確にすることが重要である。
- ④ 民俗芸能は地域の過疎化の中で伝承そのものが困難になっている。私たちが地元で足を運び、交流し、その踊りを学ぶことは、その地域を知り、その魅力を広め、そこに存在する文化に外側から光を当てることにつながる。またそれは地元の人々と連帯し、東北と東京と距離は離れていても、その文化への共感を共有し、発展させていくことになる。⁴

第三項 高田敏幸のダンブ園長の荒馬

このように1980年代以降は地元の踊りを教材化する試みは全国的にも広がり、教材化されていた踊りの地元を訪れたり、伝承地の保存会を招いて講習会を開き、教材化する実践が増した。

幼児体育においても同様の文脈から新しい荒馬教材が生まれた。宮城県石巻市で「わらしこ保育園」を運営し、「ダンブ園長」の愛称で親しまれていた高田敏幸による、通称「ダンブ園長の荒馬」と呼ばれる教材が存在する。高田は元々はわらび座の荒馬を実践していたが、地元志向が高まる中で、今別荒馬の本質を知りたいと現地との関わりを深めた。しかし、今

⁴ 園田陽一『民舞に恋して－民俗舞踊を子どもたちに－』東京民族舞踊教育研究会編、新日本出版社：東京、2015年、32-33頁。

別荒馬をそのまま教材化し、幼児たちに指導することに違和感があったせいか、高田はわらび座の荒馬にあった子どもたちが好きな動きや振りも残しつつ、地元に伝わる由緒、東北や青森の地理や歴史、そこにかつて住んでいた先人たちの暮らしを踊りに込めた教材化を行った。

加えて高田は、民俗舞踊の教材化にあたり、「子どもたちに自分の身体を動かす喜びを味わわせ」「仲間とつながる喜びを感じさせたい」と考えていた。そして荒馬に内在する身体を動かす喜びは「踏む」ことであるとし、「踏むことによって快いと感じる身体感覚がわかること」と「人とひとが快いものに向かって響き合い、力を合わせていく」ことを重視した。また、高田は、かつて今別にも多くいたと言われるアイヌ民族の自然と共にある生活や、津軽の九浦の一つに数えられ海上交易の拠点だった今別に人が寄り合い集う様子に思いを馳せ、「民俗にこだわる」ことも重視した。とりわけ「人間もその人間同士の関わりも自然の一部なのだ」という信念に基づき、荒馬の教材化を進めた。

第四項 学校体育研究大会舞踊分科会の民舞教材「今別」荒馬

次に学校体育同志会の教材化の試みについて述べる。最初にわらび座の荒馬による教材化を進めていた学校体育研究同志会の舞踊分科会は、その後、地元の民俗芸能を教材化する方法をもう一步進めた教材化論を構築し、新たな荒馬教材を提示した。わらび座の荒馬を再構成・再創造する方法を批判した進藤は、「民俗舞踊の身体技法」に基づく教材化論を提唱し、その後分科会メンバーがその実践研究を通して成果を明らかにしていった。進藤は民俗舞踊の学習に当たっては身体技法の解明が重要であることを次のように指摘している。

民俗舞踊という身体文化を学習の対象とすると、対象となる舞踊の形（振り、所作、動き）を生み出す『身体運用の法』すなわち身体技法に支えられていないと、形は似ていても異なった質のものを体現することになってしまう。また、身体文化の伝統を精神の問題としてだけとらえると、学習者の身体に結実しない。形と精神を切り結ぶ核心に「身体運用の法」「身体技法」がある。この技法に支えられて、形は個性を開花することになる⁵。

この指摘を受けて、舞踊分科会ではそれまで実践されてきた民俗舞踊を改めて「身体技法」の視点で捉え直し、実践と検証を重ねた。その成果としての荒馬教材が民舞教材「『今別』

⁵ 進藤貴美子「『民舞実践』が『民俗舞踊の動き』から逸脱するのはなぜか」『たのしい体育・スポーツ 21(9)』学校体育研究同志会、2002年、11頁。

荒馬」⁶である。

上記は「今別荒馬の現地から習った踊りをベースに『民俗舞踊の身体技法（以下、身体技法）』の学習を意図的に組み込んでいる」もので、身体技法やそれを意図的に組み込むねらいを以下の様に説明している。

身体技法とは、民俗舞踊に内包されている特有の「からだの使い方」のことである。民俗舞踊を踊り伝えてきた先人たちが、日常生活や労働所作の中で自然に行っていたからだ使いがその底流にある。それらは自然で無駄がなく、からだにも無理がかからないものであった。

しかし、便利な道具や機械に囲まれている現代社会の中で、我々の体からはそれらの技法が失われている。そのため、身体技法を知らない現代人が普段の身体感覚で民舞を踊ると、民舞とは似て非なる「和風ダンス」になってしまう。したがって、民舞の学習の中には、先人が行っていた身体技法の学習を意図的に配列することが必要だと考えている⁷。

そして、具体的な学習内容として①縦軸の意識化、②縦軸方向への自重による安定した「踏み」、③上肢の脱力と下肢との連動、④「踏み」と連動した形をきめる際の「結ぶ」「解く」といった身体感覚の意識化を念頭においた指導を展開している。また、踊りの動きの学習といった直接的な指導だけでなく、踊るための馬を作ったり、本来の祭りと同様にねぶたを作ったりすることも関連する内容として重視するものであった。

第5項 三浦博英の教科横断型学習の教材としての地域の年中行事

次に総合的な学習の時間や社会科の授業で地域文化として民俗芸能について学んだ実践についても述べておきたい。青森県内の中学校社会科教員の三浦博英は、2016年に弘前大学で開催された日本社会科教育学会のシンポジウム『『地域再生』に向き合う社会科授業ー東北の現実から考えるー』に参加し、3名のシンポジストの論点整理を踏まえて、青森県における地域学習について検討を試みている。具体的には、青森市以外の市町村で少子高齢化が急速に進み、中学校でも小規模校や複式学級が増える現状の中、へき地の学校は地域との距離が近く、地域の人に手厚く見守られ、1人1人に目が届く教育環境が最大の武器だと捉え、地域再生という観点から社会科という教科の枠を越え、教科横断的に学校全体のカリキュラムに関わる取組として行った五所川原市立市浦中学校での実践を報告している⁸。学区

⁶ 沼倉学「表現運動 民舞教材：『今別』荒馬」『新みんなが輝く体育2 小学校中学年体育の授業』、創文企画：東京、2019年、116-127頁。

⁷ 同上、116-117頁。

⁸ 三浦博英・篠塚明彦「地域学習は『地域再生』の基礎となりうるかー青森県における教育現場での実践

には相内の荒馬が伝承されている相内地区がある。2011 年度から 2013 年度までの 3 年間をかけての実践は「地域の伝統行事に関わることで地域に貢献する」ことを柱としている。取組初年度の 2011 年の段階では、中学生たちは自分の地区の祭りに対して積極的に参加しておらず、「外側から見ている」という状況であった。そこで総合的な学習の時間の一部を「地域学」として位置づけ、2012 年度は地区ごとに貢献できることはないかを話し合い、実践した結果を文化祭等で発表した。2013 年度は全校生徒が全地区の伝統行事に地域を支える一員として参加し、その成果を文化祭等で発表した。荒馬が踊られる相内の虫送りにも全校生徒が参加した。結果として、3 年間で祭りの様子は大きく変化し、活気あるものになったと振り返っている。三浦は 3 年間の実践を「地域の担い手を育てる」観点から次の様に総括している。

この取り組みは、地域社会の再構築といった方向へも発展する可能性を秘めたものとなった。生徒たちが伝統行事に参加する過程においては、様々な形で地域の大人たちが指導してくれる。学校として地域と共に何かを押し進めることが可能となる。(中略)

地域を余り意識することもなく、自分たちが暮らす地域の祭りや伝統的な行事などに対して、積極的に参加せずに「外から見ている」という状況であった生徒たちが、地域を意識し、地域の人々の結びつきを認識するようになった様子がうかがえる。また、地域の人々のよろこぶ姿に後押しされて、行事に前向きに取り組もうとする姿勢が見えるようになってきたことがわかる。生徒たちは、日常生活の中にある地域の価値を再評価しはじめたのである。⁹

生徒自身が「日常生活の中にある地域の価値を再評価する」ことは、次世代を担う人材育成を目指す社会科授業において重視されている。上記の実践は、荒馬を含む地域の伝統行事が、「地域再生」という大きな教育課題を実践的・体験的に考える教材であった。この事例は荒馬やそれを含む年中行事・祭りが、伝承地域において生きた教材となることを示している。

第三節 教育内容

前節では、荒馬教材、民舞教材の発展史に沿って幾つかの典型的な実践について論じた。また、教科横断型の地域学習の中で荒馬を含む年中行事を教材として取り上げた実践についても確認した。それらを踏まえて、ホビー・ホースダンスとしての荒馬を教材として扱う。

を通して考えるー」、『社会科教育研究 No.131』、日本社会科教育学会、2017 年、13-24 頁。

⁹ 同上、20 頁、21-22 頁。

その際、その教育内容は、歴史文化的固有性と、動きや振り、音とリズムの大きく二つに大別される。以下に整理する。

第一項 歴史的・文化的内容

荒馬の歴史的・文化的教育内容としては、以下の4点が挙げられる。

① ホビーホースダンスとしての荒馬

荒馬は青森県津軽地方に伝わる民俗芸能であり、世界中に伝承されている馬をモチーフにしたホビーホースダンスのひとつに位置づけられ、楕円形の枠に馬頭や尻尾、飾り幕などの装飾を施した「トーナメント馬」と呼ばれる軍馬を模したものを装着して踊ることが他のホビーホースダンスと共通した特徴である。

② 津軽の荒馬は三つの圏域に分類され、それぞれが異なる年中行事や祭の中で踊られる。

荒馬は南津軽地方、北津軽地方、上磯地方の三つの圏域に分類され、それぞれの地域の年中行事と深く結びついている。南津軽地方ではボウノカミ送りやサナブリ行事と結びつき、手綱取りが付かない単騎型の荒馬が踊られる。北津軽地方では虫送りの行事と結びつき、2人の手綱取りが付く即興型の荒馬が踊られる。上磯地方ではねぶた祭と結びつき、手綱取りと馬がペアで踊る振付型の荒馬が踊られる。

② 荒馬は年中行事が娯楽化し、隣町と出し物を競い合う中で生まれた。

荒馬は、元々疫病や虫害などの厄災を払うための呪術的行事が娯楽化し、風流行列の出し物を隣町と競い合うことを特徴としている。その中で馬を付けて踊るホビーホースダンスが取り入れられ、荒馬と呼ばれるようになった。馬の装束をつけて踊る駒踊がその原型にあり、南津軽地方にはその名残とも思われる駒踊も伝承されている。駒踊ではなく、荒馬として発展した経緯には、庶民が日常的に接していた農耕馬や駄馬は牝馬であり、「駒=オス馬」は武士が扱うものであったこととかわりがある。しかし、祭りの中では普段は人の従順な牝馬ではなく荒々しい牡馬の表現もが伴っている。この加えて、日常の武士階級の象徴する軍馬の再現でもある駒踊と混在し、牡馬と合体した荒馬になった可能性もある。

③ 荒馬の様式は、伝播に伴い各地の様式に溶け込む形で変化が生じ、それが定着していった。

荒馬は、歴史的変遷の中で津軽地方に広がり、各地区の祭り全体を支配していた様式に溶け込む形で変化していった。したがって、その伝播の過程で生まれた共通点や相違点を学習者の創造性を通じて表現することが可能な教育内容となるようにし、一定の変化を経験して完成した荒馬の流儀の全体像を理解できるようになることを到達点とする。

第二項 荒馬の動き・振り、音・リズムについての教育内容

荒馬の動き・振りについての教育内容は、以下の3点を含む。

① 地面を踏む動作

荒馬は、地面を踏みしめながら村・町内を門付けして周り、五穀豊穰や無病息災などを祈願する行為が芸能化したものである。その地面を踏みしめる動作は^{へんぱい}反閤^{はんがわい}といって、地面の邪気を払う意味が込められている。荒馬の動きは、概ね、地面を1回踏んで足を切り換える動きと、地面を3回踏んで足を切り換える動作が基本となり、その組み合わせや表現の仕方の違いがそれぞれの踊りの振りを特徴づける。したがって、基本となる地面を踏む動作の習得につながる構成を意識する。

② みんなで呼吸を合わせて踊ること

荒馬の動きや振りは、1人で踊るのではなく、必ず複数人で呼吸を合わせて踊ることを特徴としている。手綱取りが付く北津軽と上磯の荒馬は、所作そのものに手綱取りとの掛け合いを含むが、南津軽の単騎型荒馬も、荒馬同士がペアになり、集団で踊るため、息を合わせる必要がある。それゆえ、呼吸を合わせて集団で地面を踏んで跳ねる動きの面白さを体験させることが重要である。

② 動きや振りに内在する日常とは異なる「さかさま」の関係

荒馬の振りや動きには、様々な「さかさま」の関係がある。手綱取りが付くか付かないかによって、日常と非日常がどのような比喻に基づくのか表現に違いが生じる。振りが決まっているか即興で踊るかといったことも、どのような関係性を表現するのかを考えさせることにつながる。「今別荒馬」と「大川平荒馬」では、馬を縦に振るか横に振るか、馬を引きつける側の足も軸足か上げている足かといった所作の違いがある。祭りには日常とは異なる「さかさまの世界」が反映され、動きや振りにそうした比喻が具現化される。こうした意味を動きの学習を通して味わわせ、伝播の過程を通じて、地域特有

の多様な動きや振りが生まれ、定着していったことやその面白さを理解できる構成に留意する。

音・リズムについて教育内容としては、以下の2点が挙げられる。

① 太鼓・笛・手平鉦による繰り返しのお囃子

荒馬のお囃子は太鼓・笛・手平鉦（無い地域もある）によって演奏され、一定のフレーズを繰り返す構成になっている。したがって、そのフレーズの出だしを覚え、1フレーズの流れを掴むことが踊りを踊る上でも重要である。特に太鼓のリズムを強く叩く時に地面を踏む動作が行われ、太鼓のリズムを口で唱える口唱歌を覚えることは、踊りを覚える上でも重要であることから、しっかりと口でリズムを取るようにする。

② 地面を踏む軸足を切り換える時の間と間の取り方

荒馬の動きは、地面を踏んで邪気を払う動作が基本となっているが、常に軸足で踏み続けているのではなく、左右の足に軸足を切り換える時、最初の1歩は地面を踏まずに安定したところに軸足を立てる。ここが次の動作への間となる。その後、重心を真上に引き合え、真っ直ぐ真下にリズム良く踏み込む。3回地面を踏み込む振りの場合は、「1・2・3」と3回踏んだ後、軸足を入れ替えるのに1拍の間を使い、その後切り換えた軸足で再び「1・2・3」と地面を踏む。この切替の間の時に「トー」という口唱歌を入れるとリズムを取りやすくなる。続けると「1・2・3・トー・1・2・3・トー…」となる。1回地面を踏む振りは「1・トー・1・トー…」となる。これを太鼓のリズムに合わせて踊る。

第四節 指導のポイント

上記に挙げた教育内容の学習では、以下のような指導上のポイントを意識する。

① 総合的な歴史追体験・再創造型学習

荒馬の歴史、圏域毎の違い、年中行事や祭りの意味を総合的に追体験し、それらを元に自分たちの荒馬を再創造する学習を仕組む。班ごとに「『荒馬』つくる」ことを最終課題とし、学習した内容から多様な荒馬をつくり出すことで、かつて隣町との競い合いの中から荒馬が生まれたことを学習する。班ごとに、「Hobby Horse」としての馬と、それを

用いた踊りの二つを作り出す。地域の人々と馬との間でどのような共生関係があったのか所作の意味を説明できるようにする。

② 調べ学習の導入

単元の序盤では「Hobby Horse Dance」「駒踊」「荒馬」などの基本的事項について、自分たちで調べ、まとめることで、受身の授業ではなく、興味を抱き自主的に学習に取り組めるようにする。

③ 対話（発問）型の授業

授業の中で発問を投げかけ、学習者との対話を重視する。津軽のこどもたちであっても、日常的に馬に接することが少ない子どもたちもいる。祭りに対して抱くイメージも経験によって異なる。それゆえ、津軽地域やその他の地域における馬と人との共生関係の特徴や、江戸時代の年中行事や祭りの様子などを想起させる発問を通じて、教育内容として学習させる中身をできるだけ具体的にイメージできるようにする。

④ 馬をつくる

馬は楕円の枠に馬頭が付いたものを各班 2～3 体用意し、踊りの練習もそれを使って行う。後半、それに幕や飾りを付け、工夫する。踊りに使用するので、激しい動作にも耐えられるよう、壊れにくく、かつ創造性を育み、個性的な装飾に富むものになるよう動機づける。

⑤ 踊りをつくる

各圏域の典型としてあげた六つの荒馬の踊りを体験し、その中から 1 番良いと思う踊りを選んで踊り込むようにし、型を準備し、基本的な様式を踏襲しながらも細部の変更を認め、発展した踊りを作れるようになるよう促す。本教材では、振りの創造を中心とし、お囃子の生演奏は音源を使用し、踊りのお囃子も準備した音源の中から選ぶようにする。（発展系としての、既成の音源によらないお囃子は別途教材として考えたい）。

⑥ 発表会

発表会は実際の祭りの中で実践されているのと同様に行列を組んで行進しながら、途中で班ごとの踊りのセッションの場面を入れる形式で行う。お互いに良かった荒馬に投票する。競い合いを通してお互いによりよいものをつくろうと工夫し合った結果荒馬が

生まれたことを、学ぶことができるようにする。

以上のポイントを踏まえて、以下に授業単元計画を示す。

第五節 授業単元計画

単元名：Hobby Horse Dance 荒馬をつくろう（全8時間）

単元の目標

- (1) 荒馬のはじまりや圏域毎の年中行事や祭りの意味や荒馬との関係を理解し、それぞれの荒馬の動きの特徴を踏まえながら踊ることができる。【知識・技能】
- (2) 荒馬の歴史文化的発展過程や踊りの振りや馬と人との共生関係を理解し、これらを踏まえて、創造性に富む、よりよい踊りになる様に工夫することができる。【思考力・判断力・表現力】
- (3) Hobby Horse Dance や荒馬に興味を持ち、装束や踊りの作成過程を通して、班員と協力して安全に授業を進める態度を養う。【学びに向かう力・人間性】

教材について

本単元の教材は、津軽地方に伝わる荒馬を三つの圏域に分類し、その中の典型として抽出した六つの荒馬を元とする。南津軽地方の「八幡崎の荒馬」と「柏木荒馬踊」はいずれも手綱取りが付かない単騎型荒馬で、ボウノカミ送りやサナブリの行事で踊られる。北津軽地方の「金木さなぶり荒馬」と「相内の荒馬」は2人の手綱取りがつく即興型荒馬で、虫送りの行事で踊られる。上磯地方の「今別荒馬」と「大川平荒馬」は女性の手綱取りと男性の馬がペアで踊る振付型荒馬で、ねぶた祭で踊られる。同時にこれらの共通点・相違点の総体が教材でもあるので、六つの教材を学習しつつ、それらの全体的な関係性にも意識を向け、選択しない圏域の踊りを通して教材全体を見渡せるようにする。また、後半は自分たちの荒馬をつくるという活動を重視する。原型となる荒馬からの発展系を考える過程それ自体も教材の一部を為す。馬を形づくったり、踊りを構成する中で、荒馬という教材が有する祭りの社会的機能や日常と非日常世界の比喩が意味するところを見つめ直せるように配慮する。

単元計画

	授業テーマ	授業のねらい
1 時間目	「Hobby Horse Dance」としての 荒馬①	Hobby Horse Dance と荒馬に興味を持ち、 意欲的に調べる。
2 時間目	「Hobby Horse Dance」としての 荒馬②	Hobby Horse Dance、駒踊、荒馬の違いと 関係性を理解する。
3 時間目	ボウノカミ送り・サナブリ行事と 荒馬	ボウノカミ送りと虫送りについて理解 し、南津軽地方の単騎型荒馬の踊りを体 験する。
4 時間目	虫送りと荒馬	津軽の虫送りについて理解し、北津軽地 方の手綱取りがついた即興型荒馬を体験 する。
5 時間目	ねぶた祭と荒馬	ねぶた祭りについて理解し、上磯地方の 手綱取りが付く振付型荒馬を体験する。
6 時間目	荒馬をつくろう①	発表の方法や課題を理解し、班で協力し て準備をする。
7 時間目	荒馬をつくろう②	班ごとに荒馬をつくり、リハーサルを行 って発表会の見通しを持つ。
8 時間目	荒馬発表会	班ごとに考えつくった荒馬をこれまでの 学習のまとめとして発表し、これまでの 授業を振り返る。

【1 時間目の授業プラン】

Hobby Horse Dance としての荒馬①

本時のねらい：「Hobby Horse Dance」と荒馬に興味を持ち、意欲的に調べる

場所：教室（必要に応じて図書室や PC ルーム）

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 フォークダンスのオリエンテーション

(1) 世界と日本のフォークダンスについて

発問：これまでにやったことのあるフォークダンスは？

→マイムマイム、オクラホマミキサー、よさこいソーラン

発問：日本にもフォークダンスはあるか？

→ソーラン節、地域の盆踊り

確認：その国やその地域毎に伝承されている踊りがフォークダンスである。

(2) Hobby Horse Dance について

発問：「Hobby Horse Dance」とはどんなダンスか？

またどこに伝わっているダンスか？

→馬に関係するダンス。外国のダンス。アメリカ？

発問：日本に Hobby Horse Dance は伝承されているか？

→伝承されていない。馬の踊りはどこかの県にあるかもしれない。

確認：Hobby Horse Dance とは、馬を模したフレーム型の衣装を身につけ踊るダンスのことで、世界中、特にヨーロッパで広く伝承されている。また、日本にも同様の踊りがあり、駒踊や荒馬という名称で伝承されている。

3 Hobby Horse Dance についての調べ学習

「Hobby Horse Dance」「駒踊」「荒馬」の三つのキーワードについて、班で分担して調べ学習をする。調べる内容は、①踊りの概要、②伝承地域、③踊られる時期や場所、④具体的な地域名のつく踊り(写真や動画も添えて)。調べた内容は Word や PowerPoint などにまとめ、次回の授業で発表し合う。

「Hobby Horse Dance」については、フィンランドなどで行われている木馬を使った競技的ダンスと間違えやすいので、注意する。

【2 時間目の授業プラン】

Hobby Horse Dance としての荒馬②

本時のねらい：「Hobby Horse Dance」「駒踊」「荒馬」の違いと関係性を理解する。また、荒馬の種類と地域毎の特徴について知り、日本の Hobby Horse Dance に興味を抱けるようになる。

場所：教室、もしくは多目的室のような広めの教室

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 前時の調べ学習の成果発表

各班で調べた内容を「Hobby Horse Dance」「駒踊」「荒馬」の順に発表する。

発表が終わったら、その内容を整理して三つの踊りの関係性を示す。世界の Hobby Horse Dance の中に駒踊と荒馬が含まれ、北東北に伝わる駒踊の中でも津軽地方に荒馬が伝承されていること、その中でもさらに三つの圏域に分類されることを示す。

3 Hobby Horse を付けてみる

各班に2～3体の Hobby Horse を用意し、それを交代で付けてみて、感想を述べ合う。

発問：Hobby Horse を付けるとどんな気分になるか？

→ワクワクする。速く走れそう。恥ずかしい。子どもっぽい。

発問：これを付けて表現されるのは、馬に乗っている騎手か？それとも馬か？どちらか？そう思う理由は？

→騎手。馬の背に乗っているようだから。馬を操作しているところを表現している。馬。Hobby Horse を付けて跳んだり走ったりする姿は馬の動きを表している。両方。「人馬一体」という言葉があるように、どちらも表している。

確認：どれも正しく、踊り毎に表現されるものは違っている。また、どちらを表現しているのかわからない場合もある。「人馬一体」という考え方は重要。

発問：この馬は、オスか？メスか？そう思う理由は何か？

→オス。荒々しく踊るのでオス。両方。馬の能力にオスもメスも関係ないから、どっちもある。

確認：正解をすぐ確認せず、授業を進める中で考えていく。

4. 振り返り・ワークシートの記入

【第3時間目の授業プラン】

ボウノカミ送り・サナブリ行事と荒馬

本時のねらい：ボウノカミ送りと虫送りについて理解し、南津軽地方の単騎型荒馬の踊りを

体験する。

場所：体育館

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 ボウノカミ送りについて

発問：数年前、新型コロナウイルスが大流行した時、みんなはどんなことをして、病気が広がらないようにしたか？

→マスクをする。外に出ないで家にいる。病院に行って直す。ワクチンを打つ。

発問：今の様な医療技術や設備がなかったり、ワクチンがなかったりした江戸時代は、どうやって病気が広がらないようにしたのか？

→人と会わない。薬を飲む。わからない。

確認：医療技術や設備がなかった時代は、疫病の神様が村に入ってきたため病気が広まったと考えられていた。疫病の神様に見立てた藁人形をつくり、それを持って町中を練り歩いたり、村の入口に祀ったりという祈祷によって疫病の流行を収めようとした。

虫害が流行したときに行われた虫送りも、同じような考え方で藁でつくった「ムシ」を祀って祈祷した。（江戸期の日記などの史料も提示する。）

発問：医療技術が進歩して疫病が減ったり、農業技術が進歩して虫害が減ると、祈祷のために行われていたボウノカミ送りや虫送りの行事はどうなったか？

→行われなくなった。楽しみのために行われた。

確認：祈祷のための年中行事が庶民の娯楽のための行事になっていった。

発問：娯楽として行われるようになると、その行事、特に行列の形態はどのように変わっていったのか？

→人が増えた。音楽を鳴らすようになった。用具や衣装が派手になった、踊りを踊るようになった。

確認：それらに加えて、隣町の行列を競い合うようになり、その中で荒馬が取り入れられて踊られるようになったことを確認する。

3 南津軽地方の「八幡崎の荒馬」と「柏木荒馬踊」を体験する

それぞれの概略を資料で確認し、映像を見る。その後踊りの振りを体験する。

発問：映像を見ての印象はどうか？

→もっと激しく動くと思ったら意外と地味。2列で踊るのは同じだけど動き方が全然違う。「柏木荒馬踊」は中腰の姿勢が辛そう。

発問：(踊りを体験してから) 踊ってみてどう感じた？

→踊りの振りは難しくない、地面を踏みつけるようにする動きが独特、ペアで踊るのが楽しい。

確認：地面を3回ずつ踏むのが特徴。この地面を踏む動作は「反閤（へんばい）」といって、地面にいとされる悪霊（疫病の神も含め）を追い払い、禍を鎮める意味もある。

4 振り返り・ワークシートの記入

【4時間目の授業プラン】

虫送りと荒馬

本時のねらい：津軽の虫送りについて理解し、北津軽地方の手綱取りがついた即興型荒馬を体験する。

場所：体育館

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 虫送りについて

発問：、農業技術が発達していない江戸時代、農作物に病気が付いたり、虫害で作物が取れなくなったりした時、農民はどうしたか？

→神様に祈った。藁で人形を作って祈祷した。

確認：(江戸期の日記などの史料を提示しながら) 江戸期は行列を作って町を練り歩く虫祭りという行事があった。

3 北津軽地方の「金木さなぶり荒馬」と「相内の荒馬」を体験する

それぞれの概略を資料で確認し、映像を見る。その後踊りの振りを体験する。

発問：(映像を見る前に) 北津軽地方の荒馬は前回学習した南津軽地方の荒馬と違う点

がいくつかある。どんな違いがあると思うか？

→衣装がもっと派手。ペアではなく3頭か4頭で踊る。馬が人に牽かれている。

発問：(映像を見て) 前回の荒馬とどんな違いがあったか？

→馬を牽く人が2人いた。動き方は単調で決まった振りはなかった。「金木さなぶり荒馬」の馬の人が派手。

確認：手綱取り(口取り)という役が付き、馬と人が一緒に踊ること、特にこの地域では手綱取りが2人付いて3人で踊ることを確認する。また、振りは決まっておらず、ストーリーを表現したり即興で馬の仕草を表現したりする。「金木さなぶり荒馬」は殿様と家来の設定で、馬を付けている人は殿様なので衣装がきらびやかになっている。

発問：(踊りを体験してから) 踊ってみてどう感じた？

→ステップはシンプルだが、即興で馬の仕草を表現するのが難しい。演技力が必要。3人で息を合わせて動くのが難しい。

確認：どちらの踊りも、地面を1回踏んで足を入れ替える動作を繰り返す。これも反問の動作。「相内の荒馬」は騎手ではなく馬を表現し、馬が人に対して従順だけでなく、歩くのを嫌がったり寝そべったりするのは、祭りならではの「さかさまの世界」の一つである。

4 振り返り・ワークシートの記入

【5時間目の授業プラン】

ねぶた祭と荒馬

本時のねらい：ねぶた祭りについて理解し、上磯地方の手綱取りが付く振付型荒馬を体験する。また、祭りにおける「さかさまの世界」について理解する。

場所：体育館

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 ねぶた祭りについて

それぞれの概略を資料で確認し、映像を見る。その後踊りの振りを体験する。

発問：（ねぶたの写真を見せながら）これは青森の有名なお祭り、ねぶた祭りの様子である。このお祭りは東北の他の有名なお祭りと関係がある、何かわかるか？

→秋田の竿灯祭、仙台の七夕祭、盛岡のさんさ踊り、山形の花笠まつり？

確認：ねぶたは七夕祭の一種で、江戸時代は七夕灯籠を持って練り歩いていたものが大型化して現在のねぶたになった。七夕は禊ぎ（みそぎ）の風習で、水に穢れや睡魔を流して、健康で過ごせるようにと願う祭である。上磯地方では、このねぶた祭に荒馬が取り入れられた。

3 「今別荒馬」と「大川平荒馬」を体験する

発問：（映像を見て）前回の荒馬とどんな違いがあったか？

→手綱取りが1人だけ。手綱取りが女性。踊りの振りがはっきりしている。「今別荒馬」は馬を縦に振るのに対して、「大川平荒馬」は馬を横に振っている。

確認：「今別荒馬」と「大川平荒馬」は隣り合う二つの地区に伝承されているが、様々なところで違い、特に「さかさまの関係」にある。

発問：（踊りを体験してから）踊ってみてどう感じた？

→動きがダイナミックで、高揚感がある。「今別荒馬」は振りが複雑で難しい。

「大川平荒馬」と似ているようで違うのが面白い。

確認：どちらも地面を1回踏む動作と3回踏む動作の組み合わせで踊りが構成されている。馬の動かし方が、「今別荒馬」は縦振りなのに対して、「大川平荒馬」は横振り。また、馬を引きつける足は、「今別荒馬」は軸足側に引きつけるのに対して、「大川平荒馬」は軸足と逆側に引きつける。このように、似ているのに違う動き方をするのは、お互いにライバル意識を持っていたため、相手と反対の動作にすることで自分たちの方が面白いとアピールするため。「さかさまの世界」と関係があると考えられる。

4 振り返り・ワークシートの記入

【6時間目の授業プラン】

荒馬をつくろう①

本時のねらい：発表の方法やそれにむけた課題を理解し、班で協力して準備をする。

場所：体育館

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 三つの圏域の荒馬の復習と発表会についての確認

発問：これまでどんな地域のどんな荒馬を学習してきたか？

→南津軽地方の単騎型荒馬、北津軽地方の即興型荒馬、上磯地方の振付型荒馬。

発問：各地域の荒馬はどんな年中行事や祭と結びついていたか？

→南津軽地方はボウノカミ送りや虫送り、北津軽地方は虫送り。上磯地方はねぶた祭り。

発問：1番最初の荒馬は、南津軽地方の虫送りから始まったと考えられていますが、それはどういうきっかけだったか？

→年中行事が娯楽化し、隣町と行列の内容を競い合っている中で、荒馬を取り入れたと考えられる。

発問：最初に質問をしたことですが荒馬オスか？メスか？

→動きが激しいのでオス。踊りによって性別が違う。わからない。

確認：これは、日本の馬匹生産の仕方と関係している。野馬飼いという方法で馬を育て、2～3歳の牡馬を軍馬として調教するので、軍馬は基本オス。それに対し、庶民が飼っていた農耕馬や駄馬（荷物を運ぶ馬）はメスが多かった。荒馬を生みだした人たちは、町人や農民などの庶民。だから、身の周りの馬はメス馬（牝馬）が多かったと思われる。だから、祭の中では「さかさまの世界」の表現としてオス馬を表現しようとしたのかもしれない。そう考えると荒馬はオス馬ということになる。

一方、荒馬は駒踊の派生形という考えがある。北東北地方に広く伝承していた駒踊を津軽の虫送りの中に取り入れ荒馬とした。この場合、「駒」とはオス馬を指す言葉なので、オス馬の駒踊が「さかさまの世界」の中で荒馬になったとすれば、荒馬はメス馬とも考えられる。つまり、荒馬はオス馬ともメス馬とも捉えられる

3 荒馬をつくる

かつて隣町と競いあうことで荒馬が生み出されたように、班で競い合いながら自分たちの荒馬をつくり、発表しあうことを最終課題とする。

つくる内容は大きく二つ。一つは、ホビーホースをできるだけ個性的にデコレーションすること。もう一つは踊りの振りや構成を考えつくること。

確認：馬は楕円のフレームを各班2体配布し、紙、布、段ボール、色紙などを自由に使って、できるだけ個性的になるように飾る。

踊りは、単騎か手綱取りが付くか、即興型か振付型かなど、これまで踊ってきた要素を組み合わせながらオリジナルの踊り方を考える。音楽は六つのお囃子のうちから好きなものを選んだり組み合わせて用意する。

1時間では終わらないので、次回も同様の時間とする。

4 振り返り・ワークシートの記入

【7時間目の授業プラン】

荒馬をつくる②

本時のねらい：班ごとに荒馬をつくり、リハーサルを行って発表会の見通しを持つ。

場所：体育館

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 荒馬づくりの確認

各班で前時の作業を振り返り、本時の作業の見通しを持つ。リハーサルの時間を確認し、班ごとに作業を進める。

3 荒馬のリハーサル

各班の順番を確認し、最初の班から本番の発表を想定してリハーサルをする。その中で特に踊りの始まり方と終わり方を確認する。そしてまだできていないところをこの後で集中的につくる。全部の班が終わったら、次回の発表会の確認をする。

4 振り返り・ワークシートの記入

【8時間目の授業プラン】

荒馬発表会

本時のねらい：班ごとに考えてつくった荒馬をこれまでの学習のまとめとして発表し、お互いの発表も鑑賞することで、これまでの授業を振り返る。

場所：体育館

1 集合・挨拶：授業開始の挨拶、出席確認

2 荒馬発表会

班ごとに自分たちでつくった Hobby Horse と、それを用いた荒馬踊りを披露する。競い合うことを強調するために、自分の班以外の荒馬に点数を付け投票する。最後に点数を合計し、順位を付ける。

発表に対しては点数だけでなくコメントも書くようにして、後でそれらも交流できるようにする。

最後に感想を交流し合う。

3 振り返り・ワークシートの記入

結章

第一節 本論文のまとめと成果

本研究は、「津軽の民俗芸能『荒馬』に関する研究 ―Hobby Horse Dance―」と題し、青森県津軽地方に伝承される荒馬を世界中に伝承される Hobby Horse Dance の一つと位置づけ、馬と人との共生関係という視座から「荒馬とは何か」という本質的な問いを考察することを試みた。

第一章では、津軽の荒馬がいつ、どこで、どのようにして始まったのか、その起源を現存する文献史料に可能な限り迫ることを目的とし、五つの日記・紀行文を考察した。虫送りやボウノカミ送りの行事は、1600年代までは虫害や疫病が流行した時に村々で行われ、主に僧侶による祈祷が見られた。1700年中頃になると、村々で、灯籠を掲げや鉦を鳴らしながら風流行列をする形態が見られるようになった。1700年末頃には、虫害や疫病を村から送りだす呪術的要素だけでなく、風流行列を楽しむ娯楽的要素が加わってきた。1800年代中期の弘前周辺の地域では、それらの行列の内容を隣の町や村と競い合うようになり、より派手な演出をしようとする中で荒馬が取り入れられ、次第に津軽全域に広がっていった可能性が示唆された。このことにより、従来はそれぞれの地域に伝わる荒馬の起源・由緒譚に頼らざるを得なかった荒馬の起源を津軽地方という面で捉え、更に時間軸も含めた立体構造として概要を掴むことが可能となった。また、進藤が荒馬をサナブリの行事に付随した芸能と位置づけたことを補完し、小池が「南津軽郡の荒馬については、荒馬が元々あったのか後から加わったのか不明」としたことに對し、南津軽地方でも荒馬は後から加わったことを明らかにした。

第二章では、荒馬の分布と圏域ごとの祭りの形態を整理し、その圏域において典型的と思われる芸能にみられた共通点と差異について論じ、荒馬の類型化を図った。この類型化は、荒馬の芸能で分類した進藤の類型化を一步推しすすめ、複雑に絡み合う、圏域の祭り全体を構成する個々の要素と全体との関係を示すことにつながった。そして、祭り全体の伝播を編年史的に再構成することや、踊りの様式から祭り全体が確立する年代を特定することはむしろ困難であり、それよりも、祭り全体を特徴づけるどのような要素が最もその圏域ないし、特定の地区の内部で重視されているかということが歴史的に意味をなし、圏域内の地区の風流を解釈することが重要であるということが明らかになった。

第三章では、スポーツの概念を整理し、イギリスにおける動物を用いたり動物と関わるスポーツが、動物を操作したり征服しようとしたりする関係性よりも、むしろ動物と人間

との融合・混在性を描くある種の自然との共生意識が存在するものであったことが明らかになった。中世イギリスの祭りでは、闘牛、競馬、馬上試合、牛攻め、熊攻めといった動物を用いた娯楽も多く、動物の仮装もその一つであった。祭りの行列やページェントで行われるモリスダンスでは、ホビーホースダンスは欠かせない演目になっていた。また、パークが指摘した通り、祭りとは日常のさかさまの世界を映し、日常の地位が逆転する場であった。このことは、男が女装、女が男装し、聖職者、悪魔、道化、野人など、普段とは異なる全身仮装がかつての民衆娯楽に含まれていたことに顕著にみられた。本研究における津軽でも、慣習による装飾や流儀には差異があっても、民衆娯楽として共通点が見られ、非日常的な祭りの中にある馬の模倣は、世界の他の地域にも共通した人々と馬との日常生活における共生関係の象徴であり、世界中で行われていたホビーホースを用いた祭りが日本にも存在していることの証であった。それを踏まえると、ストラット、池田、パーク、マーカムソンの論考に対して、それぞれが示した動物との関係性から派生した民衆娯楽の特徴はイギリスやヨーロッパに閉じるものではなく、世界中の様々な地域に共通して存在することの意義を提示することができた。また、小池の荒馬が古代オリエント文明につながるという説についても可能性を加えることができた。

第四章では、日本馬と人の共生関係について検討した。日本の馬産は、牧における自然放牧と自然繁殖を基本とする野馬飼いが特徴で、自然の風土の中で風雪に耐え、厳しさの中でも強く生き抜く野性を育てようとしていた。日本の馬産のもう一つの特徴は、牡馬の去勢をしなかったことにあった。つまり、物理的に手を加えてコントロールしようとするよりも、自然にまかせる寛容さの中で信頼関係を築くことで解決しようとする傾向があったと考えられる。さらに、日本の庶民にとっての日常的な農耕馬や駄馬の多くは牝馬であった。そしてその馬たちは比較的穏やかで、人に対しても従順であったと考えられる。それが祭りという「さかさまの世界」においては、普段人に対して従順な駄馬よりも、荒々しく跳ねる駒を演じることが表象された。つまり、こうした自然の驚異に対する呪術の娯楽化や荒々しい馬と可能な範囲で心を通わせ、馬を御し、付き合うという手綱取りに象徴される馬と人との共生関係の痕跡が各圏域独自の変化や進化を通して特徴づけられていったものの総体としての荒馬が津軽地方に広く伝わるホビーホースダンスであったと言える。

補論では、先行研究を検討した後、ホビーホースダンスとしての荒馬の教育内容の教材化を試み、指導のポイントを整理して全8時間の授業単元計画を提案した。前半は調べ学習を取り入れ、基本的な概念や構造を整理し、中盤は六つの踊りを教材として体験し、荒

馬の共通点と相違点の比較検討から荒馬の総体を掴み、最後は班ごとに工夫して新たな荒馬をつくる歴史追体験・再創造型の学習とした。

第二節 今後の課題と展望

第四章までに論じてきたことを集約し、ホビーホースダンスとしての荒馬の授業単元学習のプランの構築を試みたが、その実践と分析は今後の授業実践の分析を行う研究に委ねたい。少なくとも本研究でオリジナルに明らかにしたことは、Hobby Horse Dance の一形態として荒馬を論じたものはほとんど皆無である中、世界的な共時性を通した荒馬分析を踏まえることにあった。荒馬が西洋から伝わってきたものなのか、それとも日本の中で独自に生まれたものなのか、それは津軽の荒馬の源流を探ること以上に困難な課題である。しかし、西洋においても日本においても馬は人間にとって歴史的に特別なコンパニオンアニマルに他ならず、人間との共生関係を築いてきた歴史がある。祭りはこの馬と人との共生関係を巧妙に反映するもので、祭りは、直接的な反映よりも「さかさまの世界」としての隠喩を伴うため、かえって奥行が深いと言える。さらに、荒馬が学校体育における民舞の再現として広く知られるようになったことを踏まえ、本研究の成果を最後に教材として提案することを到達点とした。それゆえ、授業研究としての成果は別稿に改めることとしたいと考える。

文献一覧

- 阿部生雄「スポーツの概念史」『宇都宮大学教養部研究報告 9(1)』、1976 年、99-106 頁。
- 青森県文化財保護協会『永禄日記 みちのく双書第一集』国書刊行会：東京、1956 年。
- 青森県文化財保護協会『平山日記 みちのく双書第二十二集』青森県文化財保護協会：青森、1967 年。
- 青森県郷土館『ねぶたと七夕』青森県郷土館：青森、1999 年。
- 青森県教育庁文化課『青森県の民俗芸能』青森県教育委員会：青森、1986 年。
- 青森県教育委員会『青森県民俗芸能緊急調査報告書』青森県、1996 年。[北海道教育委員会・青森県教育委員会・岩手県教育委員会『日本の民俗芸能調査報告書集成 1 北海道・東北地方の民俗芸能 1 北海道・青森・岩手』海路書院：東京、2005 年。]
- 青森県農地改革史編纂委員会『復刻版 青森県農地改革史』農地委員会青森県協議会：青森、1952 年。[『復刻版青森県農地改革史』不二出版：東京、1990 年。]
- 青森県史編さん事業民俗部会『青森県史 資料 津軽』青森県史友の会：青森、2014 年。
- 文化庁『青森県地方の虫送り』文化庁：東京、2015 年。
- 文化庁文化財部伝統文化課『青森県津軽地方の虫送り-青森県津軽地方の虫送り調査報告書-』文化庁文化財部伝統文化課：秋田市、2015 年。
- Cawte, EC, *Ritual Animal Disguise*, London, DS Brewer for the Folklore Society, 1978.
- デイビッド・G・マコーム、中房敏朗/ウエイン・ジュリアン『スポーツの世界史』ミネルヴァ書房：京都、2023 年。
- 独立法人日本芸術文化振興会、風流・風流行列、日本の民俗芸能、
<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc27/genre/furyu/gyouretsui/index.html>、
最終閲覧 2023.8.20)。
- フリードリヒ・アルブレヒト・オイレンブルク、中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』雄松堂書店：東京、1969 年。
- 五所川原市、掲載年不明、「相内の虫送り（あいうちのむしおくり）」、
<https://www.city.goshogawara.lg.jp/kyouiku/bunka/aiuchimushiokuri.html>、
(最終閲覧 2024.8.17)。
- 比良野貞彦『奥民図彙』1789 年頃成立。[『日本農書全集 1』農山漁村文化協会：東京、1977 年、133-212 頁。]
- 弘前市立弘前図書館「弘前八幡宮祭礼図 壱～伍(目録)」『おくゆかしき津軽の古典籍』[電子書籍] <https://adeac.jp/hirosaki-lib/catalog/mp000200-200010>。(最終閲覧日 2025.6.30)

- 本田安次『日本の民俗芸能Ⅱ－田楽・風流－』木耳社：東京、1967 年。
- 池田恵子『前ヴィクトリア時代のスポーツ』不昧堂出版：東京、1996 年。
- 稲見五郎「耕作噺（現代語訳）」『日本農書全集 1』農山漁村文化協会：東京、1977 年。
- 今別町『今別町史』今別町：青森、1967 年。
- 入間田宣夫・横濱道成・諫早直人「馬文化の発展経路」『日本馬と人－埒を越える十二の対話』東京農業大学出版会：東京、104-135 頁。
- 岩手県教育委員会「おおの駒踊り」『岩手県の民俗芸能－岩手県民俗芸能緊急調査報告書』岩手県教育委員会：盛岡、1997 年、180-181 頁。[北海道教育委員会・青森県教育委員会・岩手県教育委員会『日本の民俗芸能調査報告書集成 1 北海道・東北地方の民俗芸能 1 北海道・青森・岩手』海路書院：東京、2005 年、574-575 頁。]
- Strutt, Joseph. *The Sports and Pastimes of the People of England*. London: J. White, 1801. Reprint, London: Thomas Tegg, 1845. E-book.
<https://www.gutenberg.org/ebooks/48983>.
- 門屋光昭・村中健大「第 7 章 民俗芸能」『岩木川流域の民俗』青森県、2008 年、171-180 頁。
- 金木郷土史編纂委員会、『金木郷土史』、金木町役場：青森、1976 年。
- 蒲池明弘『「馬」が動かした日本史』文春新書：東京、2020 年。
- 兼平賢治『馬と人の江戸時代』吉川弘文館：東京、2015 年。
- Janeczko Karolina. *Wokół sporu o genezę i tradycję Lajkonika -Around the Dispute about the Origin and Tradition of Lajkonik-*. Rocznik Filozoficzny Ignatianum *The Ignatianum Philosophical Yearbook*, Vol. 26, No. 2 (2020), pp. 263–282.
- 蒲池明弘『「馬」が動かした日本史』文藝春秋：東京、2020 年。
- 柏木町荒馬保存会「柏木町荒馬踊り」柏木町荒馬保存会：青森、作成年不明。
- 柏木町荒馬保存会、『ひらかわ伝統芸能フェスティバル 柏木町荒馬踊』柏木町荒馬保存会：青森、2018 年。
- 本村凌二『馬の世界史』中央公論新社：東京、2013 年。
- 小池雅昭「郷土の芸能－荒馬踊りと駒踊り」『こまおどり創刊号』弘前大学民俗研究部：青森、1961 年、2-9 頁。
- 久慈勝男『日本馬と人の文化史』文眞堂：東京、2016 年。
- 民族舞踊教育研究会、<https://www.minbuken.com/>。(最終閲覧 2025.1.20)。
- 宮武外骨「ほにほろ考」『此花 第四枝』雅俗文庫、1910 年、5 頁。
- Rahmawati Mifta, Maimun Maimun, Ali Hasbi. *Community Perception of Kuda Lumping Art in The Simpang Kiri Sub-District Subussalam City*. Jurnal Seni Tari (12) (2) 2023.
- 三浦博英・篠塚明彦「地域学習は『地域再生』の基礎となりうるか－青森県における教育現場での実践を通して考える－」、『社会科教育研究 No.131』、日本社会科教育学会、2017

- 年、13-24 頁。
- M.J.D-S. All Souls, “INTRODUCTION”, Violet Alford, *The Hobby Horse and other Animal Masks*. London: The Merin Press, 1990, p. x i i i - x x x i v .
- Musée Basque et de l’histoire de Bayonne, “*La danse*”, Document enseignant.
- 仲井幸二郎・西角井正広・三隅治雄編『民俗芸能辞典』東京堂出版、1981 年。
- 中村喜時『耕作噺』1858。[『日本農書全集 1』農山漁村文化協会：東京、1977 年、13-121 頁。]
- 中森孜郎『日本の踊りに日本の踊りを』大修館書店：東京、1990 年。
- 沼倉学「民俗芸能『荒馬』の教材化について」宮城教育大学大学院教育学研究科修士論文、2001 年。
- 沼倉学「表現運動 民舞教材：『今別』荒馬』『新みんなが輝く体育 2 小学校中学年体育の授業』創文企画：東京、2019 年、116-127 頁。
- 森山泰太郎・稲見五郎「奥民図彙・解説」『日本農書全集 1』農山漁村文化協会：東京、1977 年、213-248 頁。
- 大石泰夫「第七章 民俗芸能」青森県史編さん事業民俗部会『青森県史 資料 津軽』青森県史友の会：青森、2014 年、345-365 頁。
- 大石泰夫「外ヶ浜の民俗芸能」『西浜と外ヶ浜の民俗』青森県：青森、2010 年、168-174 頁。
- 大瀧真俊『軍馬と農民』京都大学学術出版会：京都、2013 年。
- 尾上町教育委員会社教課編「八幡崎村疫ノ神退散祭由来考」『古里の歴史民俗資料第 3 集 八幡崎・西野曾江地区編』尾上町教育委員会、1981 年、113-128 頁。
- ピーター・バーク（中村賢二郎・谷泰訳）『ヨーロッパの民衆娯楽』人文書院：京都、1988 年。
- Lawrence Robert Means, *The Magic of the Horse-Shoe: With Other Folk-Lore Notes* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1898), pp.3-5.
- ロバート・W・マーカムソン（川島昭雄・沢辺浩一・中房敏朗・松井良明訳）『英国社会の民衆娯楽』平凡社：、1993 年。
- リュドヴィック・ド・ボーヴォワール、綾部友治郎訳『ジャポン 1867 年』有隣堂：横浜、1984 年。
- 齋藤吉彦『上磯風聞志』発行所不明、1930 年。[『青森県史叢書 西浜と外ヶ浜の民俗』青森県：青森、2020 年、292 頁。]
- 千賀久「日本に伝えられた馬文化」、右島和夫監修『馬の考古学』雄山閣：東京、2019 年、12-21 頁。
- 千賀久「渡来系移住民がもたらした産業技術－畿内地域の鍛冶生産と馬生産」吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『シリーズ古代史をひらく 渡来系移住民－半島・大陸との往来』岩波書店：

- 東京、2020 年、83-142 頁。
- 佐藤末吉「昔の農村」『津軽の農書 みちのく双書第 36 集』青森県文化財保護協会：青森、1993 年、382-394 頁、427-429 頁。
- Shakeri Simin, Mohammad Reza Sharif Zadeh, "Khorasan' s Wooden Horse Ceremonial Dance Analysis and Investigation". The Second International Interdisciplinary Conference "Russia and the East:Art, Philosophy and Culture", 2019, Moscow, Russia.
- 進藤貴美子「民俗舞踊の身体技法－黒川さんさ踊り『庭ならし』を例に－」『年報いわみざわ：初等教育・教師教育研究 15』北海道教育大学岩見沢分校、1994 年、71-79 頁。
- 進藤貴美子「民俗舞踊を学ぶ意味」『たのしい体育・スポーツ 13(4)』学校体育研究同志会、1994 年、18-21 頁。
- 進藤幸彦「津軽の民俗舞踊」『津軽の民俗』吉川弘文館、1970 年、395-415 頁。
- 白石太一郎「日本列島の騎馬文化はどのようにしてはじまったのか」古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会『騎馬文化と古代のイノベーション』（株）KADOKAWA：東京、88-103 頁。
- 園田陽一『民舞に恋して－民俗舞踊を子どもたちに－』東京民族舞踊教育研究会編、新日本出版社：東京、2015 年。
- 菅江真澄「牧の朝露」1793 年頃成立。〔復刻版：内藤武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第二巻』未来社：東京、1971 年、349-385 頁。〕
- 菅江真澄「外浜奇勝」1796 年頃成立。〔復刻版：内藤武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第三巻』未来社：東京、1972 年、123-191 頁。〕
- 杉山陽亮「北方の馬産地－糠部地域における馬産の一考察－」、入間田宣夫・谷口一夫編『牧の考古学』高志書院：東京、199-210 頁。
- 高田敏幸「津軽半島、今別町に伝わる民俗舞踊『荒馬』を教材化し、子どもたちに“こだわりの荒馬、を伝える」『季刊保育問題研究』全国保育問題研究協議会編集委員会編 210、2004 年、20-29 頁。
- 高田敏幸・渡辺孝之「第 1 章 荒馬」『たのしい体育シリーズ⑧なわとび・民舞』学校体育研究同志会編、ベースボールマガジン社：東京、1988 年、76-95 頁。
- 高橋秀夫「第 4 章 近世の津軽」、和歌森太郎編『津軽の民俗』、吉川弘文館：東京、1970 年、41-55 頁。
- 武田正三郎敬之『山一 金木屋又三郎日記』1862 年頃成立。〔復刻版：齋藤昭一編『山一 金木屋又三郎日記抜粋編』青研、1995 年。〕
- 谷釜尋徳『スポーツの日本史』吉川弘文館：東京、2024 年。

- The British Museum. "Horses and human history"; <https://www.britishmuseum.org/blog/horses-and-human-history> (最終閲覧 2024.11.20).
- 積山洋「日本列島における牛馬の大量渡来前史」栄原永遠男編『日本古代の王権と社会』塙書房：東京、2010 年、71-84 頁。
- 内田邦彦『津軽口碑集』郷土研究社：東京、1929 年。[復刻版 内田邦彦『津軽口碑集』歴史図書社：東京、1979 年。]
- 植木行宣「民俗芸能分布圏試論－丹後における風流踊りをめぐって－」『民族文化分布圏論』名著出版：東京、1993、11-36 頁。
- Union Internationale de la Marionnette. "Skirted Hobby Horse" .; <https://wepa.unima.org/en/skirted-hobby-horse/>. (最終閲覧.2025.8.27) .
- 右島和夫「古墳時代における古東山道の成立と馬」右島和夫監修『馬の考古学』雄山閣：東京、2019 年、154-163 頁。
- Alford Violet, *The Hobby Horse and Other Animal Masks* (London: The Merlin Press, 1990).
- 和歌森太郎編『津軽の民俗』吉川弘文館：東京、1970 年。
- 和光小学校「和光小学校の教育」<https://wakoe.wako.ed.jp/education#h.r5neb94wef2c>、(最終閲覧 2025 年 1 月 20 日)。
- わらび座「わらび座とは」<https://www.warabi.jp/pages/info/>、(最終閲覧 2025.1.24)。
- 渡辺伸夫「Ⅲ 民俗学研究の諸分野・12 民俗芸能」『民俗研究ハンドブック』吉川弘文館、1978 年、194-209 頁。
- World Encyclopedia of Puppetry Arts. "Skirted Hobby Horse". Union Internationale de la Marionnette. <https://wepa.unima.org/en/skirted-hobby-horse/>, (最終閲覧 2025.3.28).
- 山口英男「御牧の成立」『山梨県史 通史編 1』山梨県：山梨、687-710 頁。
- 安田初雄「古代における日本の放牧に関する歴史地理的考察」『福島大学学芸学部論文集 社会科学 10(1)』福島大学、1959 年、1-18 頁。